

遺跡詳細分布調査報告

～直島群島における地域総合調査～

2024. 3

香川県教育委員会

序 文

香川県教育委員会では、令和3～5年度に文化庁の補助を受けて、「地域総合調査研究事業」を実施いたしました。この事業は、瀬戸内海に面した香川らしい特徴的な地域を対象に、埋蔵文化財を悉皆的に把握し、他の文化財を含めた歴史的な所見を加えることで、地域の成り立ちと変遷過程を総合的にとらえ直す試みです。また、得られた知見と成果を、地域に還元し共有することを目的としています。今回は、直島町域を対象に、直島町教育委員会と連携し、香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館、四国村落遺跡研究会の協力をいただき、調査をすすめてきました。

3カ年の調査では、直島町内における周知の遺跡の現状把握と新たな遺跡の確認に加え、過去に発掘調査事例がある積浦地区で新たに発掘踏査を実施し、鎌倉時代の港湾施設と考えられる礫敷遺構を確認しました。

本書はこれらのうち、埋蔵文化財遺跡詳細分布調査に関する成果をまとめたものです。この成果を多くの県民の方々に知っていただくことで地域の埋蔵文化財に対する理解を深め、将来に向けた、適切な保存と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際して多大な御協力を頂きました関係各機関、また格別の御配慮と御指導をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

令和6年3月

香川県埋蔵文化財センター
所長 佐藤竜馬

例 言

1. 本書は、令和3～5年度に国庫補助事業として実施した地域総合調査研究事業の報告書である。
2. 調査は、香川県教育委員会が調査主体、香川県埋蔵文化財センター及び直島町教育委員会が調査担当者として実施した。
3. 調査は、令和3年4月1日から令和6年3月31日までの期間で実施した。調査の担当は以下のとおりである。

令和3年度 信里芳紀（分布調査・遺物整理）、小野秀幸（分布調査）
令和4年度 信里芳紀（分布調査・遺物整理）、小野秀幸（分布調査・発掘調査）
谷本峻也（発掘調査）
令和5年度 小野秀幸（報告書作成）
4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

三菱マテリアル株式会社直島製錬所、株式会社ベネッセホールディングス、本村自治会
宮ノ浦自治会、積浦自治会
5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

本報告書は2章の歴史的・民俗的環境を黛 友明氏（香川県立ミュージアム 学芸課）に依頼した他は、小野が執筆・編集を担当した。
6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

大久保徹也、田井静明、野村美紀、黛 友明、真鍋篤行、濱本鐵雄、香川県立ミュージアム、
瀬戸内海歴史民俗資料館、四国村落遺跡研究会
7. 本報告書で用いる方位の北は、世界測地系（または旧国土座標系第IV系）の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。
SK 土坑 SP 柱穴 SX 不明遺構
8. 遺構土層中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 2010年度版』による。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節	経緯	1
第2節	経過	1

第2章 立地と環境

第1節	地理的・地質的環境	3
第2節	考古学的環境	3
第3節	歴史・民俗	5

第3章 調査成果

第1節	詳細分布調査	8
第2節	直島町及び県保管資料	25
第3節	積浦遺跡の発掘調査	43

第4章 総括

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	4	第25図	遺物実測図	48
第2図	喜兵衛島遺物実測図1	26	第26図	3次1・2トレンチ配置図	48
第3図	喜兵衛島遺物実測図2	27	第27図	3次1・2トレンチ平面図	49
第4図	京ノ上臈島・屏風島・向島・直島島内 遺物実測図	28	第28図	3次1トレンチ平・断面図	50
第5図	家島遺物実測図	29		3次1トレンチ SP01・SP02 平・断面図	50
第6図	葛島遺物実測図1	30	第29図	3次1トレンチ SX01 平・断面図	51
第7図	葛島遺物実測図2	31	第30図	3次1トレンチ SX02 平・断面図	51
第8図	荒神島祭祀遺跡周辺地形及び遺物分布図	32	第31図	3次1トレンチ SX03 平面図	52
第9図	荒神島遺物実測図1	33	第32図	3次1トレンチ SX03 平面・ 礫垂直分布図	53
第10図	荒神島遺物実測図2	34	第33図	3次2トレンチ平・断面図	54
第11図	荒神島遺物実測図3	35	第34図	3次2トレンチ SK01 平・断面図	55
第12図	荒神島遺物実測図4	36	第35図	3次2トレンチ礫出土平・断面図	55
第13図	風戸山西遺跡 遺跡位置図及び遺物 散布範囲図	37	第36図	3次1・2トレンチ礫垂直分布図	56
第14図	風戸山西遺物実測図1	38	第37図	3次調査出土遺物実測図	56
第15図	風戸山西遺物実測図2	39	第38図	3次調査遺構変遷図	57
第16図	井島石器実測図1	39	第39図	名東県時代字切図	61
第17図	井島石器実測図2	40	第40図	現在の地形図へ反映させた 名東県時代字切図	62
第18図	葛島石器実測図	40	第41図	中世期の積浦遺跡想定範囲	63
第19図	各島石器実測図	41	第42図	土錘の諸要素	65
第20図	1次調査 土層堆積状況図	43			
第21図	積浦遺跡調査地位位置図	44			
第22図	積浦遺跡1次A区出土遺物実測図	46			
第23図	積浦遺跡1次B・C区出土遺物実測図	47			
第24図	積浦遺跡1次C区出土・表採				

写真目次

写真1	崇徳天皇神社のヨイマツリ	6	写真11	1トレンチ SX03 検出状況3面目 (西から)	58
写真2	住吉神社のヨイマツリ	7	写真12	2トレンチ西壁土層(東から)	59
写真3	八幡神社(2021年6月撮影)	7	写真13	2トレンチ北壁土層(南から)	59
写真4	積浦遺跡調査前風景(西から)	57	写真14	2トレンチ SP01 土層(南から)	59
写真5	1トレンチ土層(東から)	57	写真15	2トレンチ SP02 土層	59
写真6	1トレンチ SX02 礫検出状況 (東から)	58	写真16	2トレンチ SP03 土層(南から)	59
写真7	1トレンチ SX03 検出状況1 (北から)	58	写真17	2トレンチ SP04(西)・05(東)土層 (南から)	59
写真8	1トレンチ SX03 検出状況2 (東から)	58	写真18	2トレンチ礫敷遺構検出状況 (東から)	59
写真9	1トレンチ SX03 検出状況2面目 (東から)	58	写真19	2トレンチ礫敷遺構検出状況 (西から)	59
写真10	1トレンチ SX03 検出状況3面目 (北から)	58			

表目次

第1表	1次調査コンテナ内容	43
遺物観察表		68

第1章 調査の経緯と経過

第1節 経緯

香川県では、平成30年に改正された新しい文化財保護法を受け、香川県における今後の文化財の保存と活用に関する基本的な方針や今後の取組みを示すため、2022（令和2）年に「香川県文化財保存活用大綱」を策定した。その中で、人口減少・少子高齢化の進行に伴う地域の多様性や活力が衰退し、文化財の将来への継承が危ぶまれる現状に対し、先人たちが築き、守り伝えてきた、有形・無形の文化財を次世代へと継承していくため、本県の各所に残る瀬戸内の風土に育まれた歴史や文化を伝える文化財を通じて、その地域について改めて見つめ直し、その価値を知り、その価値や特性にもとづいた、保存や活用について地域総がかりで考える必要性が説かれた。

これを受け、香川県内の一定範囲の地域を対象とした埋蔵文化財の悉皆的・総合的な調査を実施し、その上で他の文化財や歴史的所見を加えることで、地域の成立及び変遷過程をとらえ直すと共に、これらの作業を通じて得られた知見と成果を地域に還元・共有する目的とした「地域総合調査研究事業」が計画された。香川県の地勢は島しょ部、沿岸部、平野部、山間部に区分でき、その島しょ部にあたり、本土との関係を検討する要素が多く、埋蔵文化財の所在がある程度把握できているという点を考慮し、直島町域を対象地域とした。

事業は令和3年度～令和5年度の3か年で行った。直島町と香川県埋蔵文化財センターが連携・協働して事業にあたるため、町と埋蔵文化財センターの間で、令和3年4月1日付で「地域総合調査研究事業に係る確認書」を交わし、これに基づいて事業を実施した。

また、調査に際しては、香川県立ミュージアム・瀬戸内海歴史民俗資料館・四国村落遺跡研究会などの機関・団体の協力を得た。

本事業では上記の目的のため、下記の項目について実務を行った。

①フィールドワーク

地形状況の把握、採集資料の図化や検討、海揚がり資料の調査を含めた、町域内の埋蔵文化財の詳細分布調査（直島本島以外の島も含む）

②発掘調査

直島本島における確認調査、試掘調査

③遺跡詳細分布調査の整理、調査報告書の刊行

④調査報告会及び資料展示会の実施

（年1回程度）

⑤市町への周知、研修会の開催

なお、本書は上記②・③に関して文化庁埋蔵文化財国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査により実施した遺跡詳細分布調査報告書である。

第2節 経過

各年度における実施内容は以下のとおりである。

令和3年度

調査場所 香川郡直島町

①埋蔵文化財詳細分布調査

対象地 直島本島・牛ヶ首島・喜兵衛島・屏風島・杵島・京ノ上臈島・葛島・荒神島

調査期間 令和3年6月～令和4年3月

調査内容 各島所在の周知遺跡の現状確認及び新規遺跡の確認。各遺跡の内容把握のための遺物採取

②分布調査資料及び既存資料の整理

対象資料 詳細分布調査採集資料

直島町所蔵の既往調査等出土遺物（町資料館・役場ロビー展示資料等）
香川県所蔵の既往調査等出土遺物（旧瀬戸内海歴史民俗資料館蔵資料等）

作業期間 令和3年12月～令和4年2月

作業内容 内容確認・台帳作成・注記・実測・写真撮影等

③資料展示会

文化祭への出展（当事業の紹介パネル展示）
（直島町開催 令和3年11月3・4日）

令和4年度

①埋蔵文化財詳細分布調査

対象地 直島本島・牛ヶ首島・井島・局島・家島・向島・柏島・寺島

調査期間 令和4年4月～令和5年3月

各島所在の周知遺跡の現状確認及び新規遺跡の確認。各遺跡の内容把握のための遺物採取

②埋蔵文化財発掘調査

対象地 積浦遺跡（直島町518-1）

調査期間 令和4年6月13日～6月24日

③分布調査資料及び既存資料の整理

対象資料 詳細分布調査採集資料

直島町所蔵の既往調査等出土遺物（町資料館・役場ロビー展示資料等）
直島町保管の文化財関連資料
香川県所蔵の既往調査等出土遺物（積浦遺跡1次調査等）

作業期間 令和3年10月～令和4年2月

作業内容 内容確認・台帳作成・注記・実測・写真撮影等

④調査報告会・資料展示会

調査報告会

令和4年6月18日 参加者50名
（令和3年度実施予定分）

令和5年3月4日 参加者60名
（令和4年度）

積浦遺跡発掘調査現地説明会
 令和4年6月18日 参加者50名
 文化祭への出展
 (発掘調査成果の紹介パネル展示)
 (直島町開催 令和4年11月3・4日)
 ⑤埋蔵文化財担当者研修会
 令和4年6月18日
 (県生涯学習・文化財課主催)

令和5年度
 ①調査報告書作成
 作業期間 令和5年4月～令和6年3月
 ②調査報告会・資料展示会
 文化祭への出展
 (整理作業成果の紹介パネル展示)
 (直島町開催 令和5年11月2・3日)
 調査報告会
 令和6年3月(予定)
 3 調査の体制
 発掘調査・整理作業の体制は以下のとおりである。

令和3年度 調査・整理作業体制
 香川県教育委員会事務局・生涯学習・文化財課
 総括 課長 渡邊 智子
 副課長 佐藤 竜馬
 総務・生涯学習推進グループ 課長補佐 長谷川 江里
 文化財グループ 課長補佐 佐藤 竜馬(兼)
 主任文化財専門員 森下 英治
 文化財専門員 宮崎 哲治
 香川県埋蔵文化財センター
 総括 所長 高原 康
 次長 北山 健一郎
 総務課 課長 北山 健一郎(兼)
 副主幹 高橋 範行
 主任 石田 こずえ
 主任 松浦 佐和
 資料普及課 課長 信里 芳紀
 主任文化財専門員 小野 秀幸
 直島町教育委員会事務局
 教育長 鴨井 俊徳
 教育次長 岡本 美由紀
 主査 大岸 法隆

令和4年度 調査・整理作業体制
 香川県教育委員会事務局・生涯学習・文化財課
 総括 課長 萩原 絢嗣
 副課長 佐藤 竜馬
 総務・生涯学習推進グループ 課長補佐 長谷川 江里
 文化財グループ 課長補佐 佐藤 竜馬(兼)
 主任文化財専門員 森下 英治
 文化財専門員 宮崎 哲治
 香川県埋蔵文化財センター
 総括 所長 高原 康
 次長 北山 健一郎
 総務課 課長 北山 健一郎(兼)
 副主幹 岩西 浩二
 (~R4.9)
 高原 保弘
 (R5.2~)
 主任 石田 こずえ
 主任 松浦 佐和
 資料普及課 課長 信里 芳紀
 主任文化財専門員 小野 秀幸
 技師 谷本 峻也

直島町教育委員会事務局
 教育長 津山 勝義
 教育次長 岡本 美由紀
 主査 大岸 法隆

令和5年度 調査・整理作業体制
 香川県教育委員会事務局・生涯学習・文化財課
 総括 課長 佐々木 隆司
 副課長 白川 暁美
 総務・生涯学習推進グループ 課長補佐 白川 暁美(兼)
 文化財グループ 課長補佐 森下 英治
 主任文化財専門員 蔵本 晋司
 文化財専門員 竹内 裕貴
 香川県埋蔵文化財センター
 総括 所長 佐藤 竜馬
 次長 菅原 宥純
 総務課 課長 萱原 宥純(兼)
 副主幹 高原 保弘
 主任 十川 晃
 主任 松浦 佐和
 資料普及課 課長 信里 芳紀
 主任文化財専門員 小野 秀幸
 直島町教育委員会事務局
 教育長 津山 勝義
 教育次長 岡本 美由紀
 係長 大岸 法隆

第2章 立地と環境

第1節 地理的・地質的環境

香川県は瀬戸内海の東半部中央付近に位置し、備讃瀬戸を挟んで岡山県と接する。この備讃瀬戸の東部に所在する直島諸島の一角に直島町がある。直島をはじめ、井島、牛ヶ首島、屏風島、喜兵衛島、家島、向島など大小27の島からなり、瀬戸内海の中でも島の密集する地域の一つである。香川県が令和5年4月に策定した離島振興計画では、直島町は5つに分けられた地域の内、高松市男木島・女木島とともに、直島諸島に含まれる。現在、有人島は直島の他、向島と屏風島で、大半が無人島となっている。周辺の自治体との関係は、大半が北側及び西側の岡山県玉野市と瀬戸内海を介して接し、井島北端部でのみ、岡山県玉野市と陸続きの県境を成す。また、東は土庄町、南は高松市とそれぞれ海を介して接する。町の面積は14.23km²を測り、直島が最大の8.12km²、続く井島が1.79km²、あとは概ね1km²以下である。令和4年4月1日時点での人口は3,016人で、人口は減少傾向にあるほか、世帯数は僅かではあるが増減を繰り返す傾向にある。

降水量は少なく乾燥し、冬季と夏季の寒暖差が小さく、通年の日照時間が多い気象で、瀬戸内式気候に区分される。

地質的にはほぼ全島が中生代白亜紀後期に生成した黒雲母花崗岩からなり、直島以外はその大半が水没した山塊である。直島は島内にあるいくつかの山塊の間を走る谷筋により、海岸部で沖積層による小規模な海岸平野が形成される。現在集落が形成される本村・宮ノ浦・積浦などがそれに相当する。本村地区においては、昭和57年に実施された直島町役場新設に伴うボーリングによる地質調査で、用地内の堆積状況を窺うことができる。直島町史によると、標高-13.7m以下に基盤岩が確認でき、標高-11.5mまでが基盤岩風化層、その上標高-9.3m付近までが陸上での谷底堆積物、標高-9.3~-0.5mまでが海成堆積層と考えられている。火山灰分析などの情報が無いため明言はできないが、陸上での谷底堆積物とされたものが洪積層で、-9.3m以上の堆積層は瀬戸内地域が「海」化していく過程で形成されたものと考えられる。

第2節 考古学的環境

直島町域における人類史の始まりは後期旧石器時代後半期にある。町北西部にあたる井島で、昭和29・30年に発掘調査が行われた「井島遺跡」＝鞍掛鼻遺跡(39)、以下()内の数字は第1図)、昭和40年代半ばに岡山大学を中心に分布調査が実施された荒神島の丘陵部(令和3年度に一部を「荒神島西丘陵遺跡」(82)として登録)、町北部の喜兵衛島北東丘陵部遺跡(76)が知られる。いずれも島の丘陵部尾根筋上に位置しており、周辺の同時期の遺跡立地と共通する。発掘調査事例が少ないが、採集資料の事例報告などから、始良

Tn火山灰降灰期以降のナイフ形石器文化から細石刃文化までの遺跡が分布する。

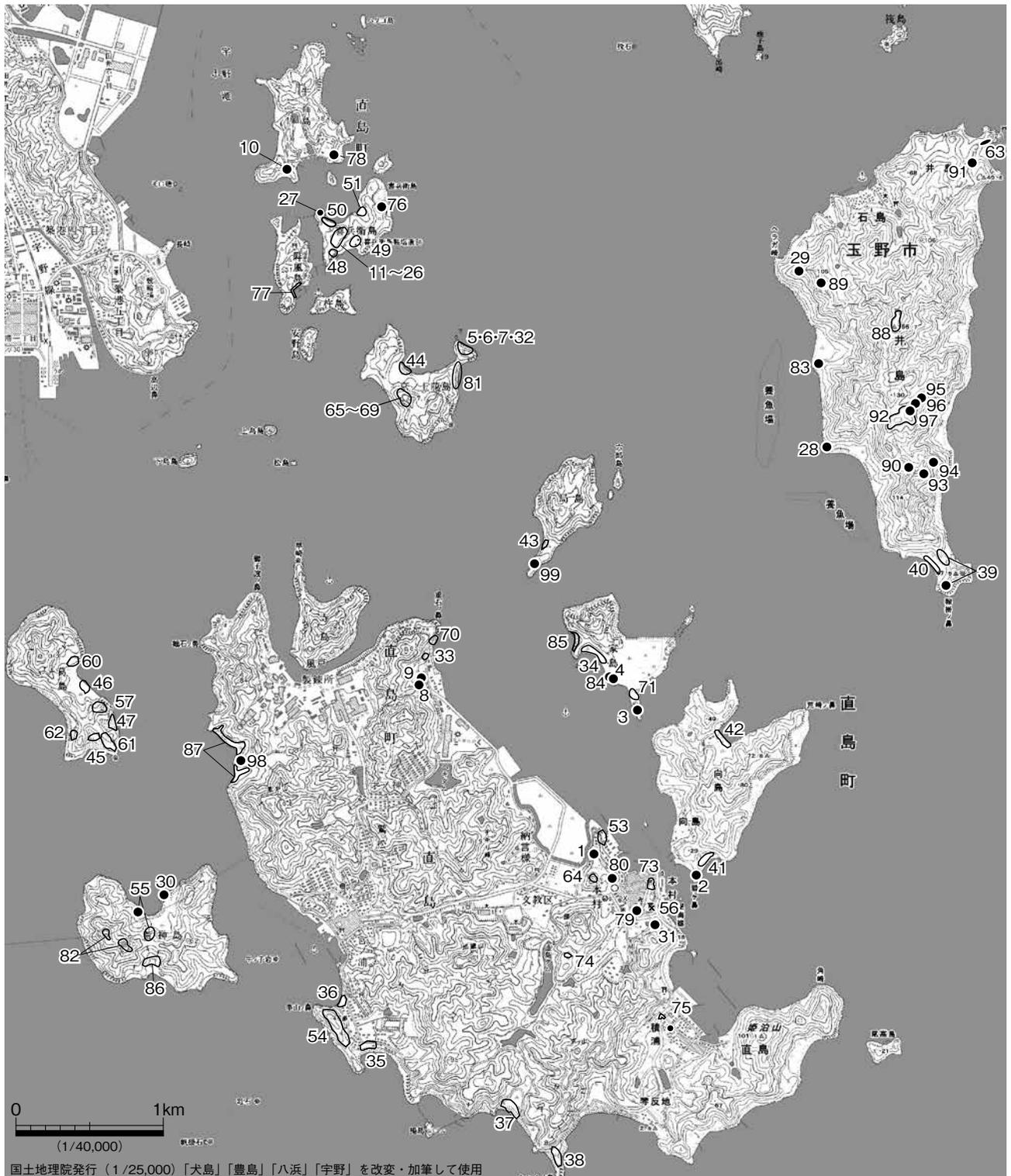
縄文時代は、先述の鞍掛鼻遺跡の他に直島本島の横防遺跡(36)・外が浜遺跡(35)・くらは遺跡(37)が知られる。前者では土器の存在は不明で、石鏃が発掘調査並びに表面採集で確認されている。帰属時期は不明である。また、後者からは縄文時代中期・後期の土器が確認されているが、各遺跡とも実態は不明である。

続く弥生時代については重石遺跡1(33)、おかめ鼻遺跡(38)、くらは遺跡がある。重石遺跡1とおかめ鼻遺跡は石器の散布が知られるのみであるが、くらは遺跡では弥生土器片の出土が知られる。今回遺物の実見が叶わず、詳細な時期は不明である。

古墳時代には直島町を構成する27島のうち、10島に古墳の存在が確認でき、比較的古墳が集中する地域であると言える。主島の直島では北部西岸に面する風戸山西古墳(98)、東岸に面する八日山古墳(1)、重石1号墳(8)、重石2号墳(9)、中部やや南寄りの東岸に面する桃山教員宿舍古墳(31)が確認できる。また、向島で猫ノ鼻古墳(2)が、家島でだるま石上古墳(4)、鶴松古墳群(3)、鶴松鼻古墳群が、京ノ上臈島で京ノ上臈A1~A3号墳(5~7)、京ノ上臈B古墳群(32)、京ノ上臈1~5号墳(65~69)が、牛ヶ首島で牛ヶ首古墳(10)、金比羅山古墳(78)が、喜兵衛島でキヘエ1~16号墳(11~26)、キヘエ北西端古墳(27)が、井島でなか鼻古墳群(28)、一本松古墳(29)が、屏風島で屏風島北西端古墳群、屏風島南東古墳群が、葛島で葛島A古墳群(60)、葛島B古墳群(61)、葛島C古墳群(62)が、荒神島で荒神島古墳(30)がそれぞれ知られる。備讃瀬戸でも有数の古墳の密集する地域であるといえる。時期的には前期と考えられるものが方形の外護列石を持つ荒神島古墳、中期のものが葛島B古墳群の一部、後期古墳で横穴式石室を伴う牛ヶ首島の牛ヶ首古墳、喜兵衛島のキヘエ1~16号墳、キヘエ北西端古墳、井島の一本松古墳である。また、当該期の製塩遺跡は国史跡喜兵衛島製塩遺跡(48~51)をはじめ、家島のはしもと畑遺跡(34)、井島の鞍掛浜遺跡(40)、直島のくらは遺跡などで確認できる。明確な集落遺跡は確認できていないが、喜兵衛島製塩遺跡のうち、キヘエ南東浜遺跡では発掘調査で作業空間からやや離れた丘陵側に堅穴建物跡が確認されており、製塩業の従事者の居住空間が存在したようである。

古代の遺跡は古墳時代から引き続き、くらは遺跡やはしもと畑遺跡などで、製塩遺跡が若干展開するほか地点不明の採取遺物で当該期のものが知られる他は、実態が不明である。

中世の遺跡については高原城跡(73)・城山城跡(74)・八日山城跡(64)といった中世城館と、八幡神社遺跡(56)・積浦遺跡(75)が知られるのみである。積浦遺跡は3次にわたる調査が行われ、集落跡と2期の港湾施設(礫敷遺構・石組護岸遺構)が確認されている。これについては次章



国土地理院発行(1/25,000)「犬島」「豊島」「八浜」「宇野」を改変・加筆して使用

- | | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|---------------|-------------------|
| 1 八日山古墳 | 16 キヘエ 6号墳 | 31 桃山教員宿舎古墳 | 46 葛島北浜遺跡 | 61 葛島B古墳群 | 76 キヘエ北東丘陵部遺跡 |
| 2 猫/鼻古墳 | 17 キヘエ 7号墳 | 32 京/上臈 B古墳群 | 47 葛島遺跡東浜遺跡 | 62 葛島C古墳群 | 77 屏風島南東浜遺跡 |
| 3 鶴松古墳群 | 18 キヘエ 8号墳 | 33 重石遺跡 1 | 48 キヘエ南西浜遺跡 | 63 戸尻鼻遺跡 | 78 金比羅山古墳 |
| 4 だるま石上古墳 | 19 キヘエ 9号墳 | 34 はしもと畑遺跡 | 49 キヘエ南東浜遺跡 | 64 八日山城跡 | 79 高原氏墓標群 |
| 5 京/上臈 A1号墳 | 20 キヘエ 10号墳 | 35 外が浜遺跡 | 50 キヘエ北西浜遺跡 | 65 京/上臈 1号墳 | 80 敬光院増有墓碑 |
| 6 京/上臈 A2号墳 | 21 キヘエ 11号墳 | 36 横防遺跡 | 51 キヘエ北東浜遺跡 | 66 京/上臈 2号墳 | 81 京/上臈島東浜遺跡 |
| 7 京/上臈 A3号墳 | 22 キヘエ 12号墳 | 37 くらら遺跡 | 52 屏風島南浜遺跡 | 67 京/上臈 3号墳 | 82 荒神島西丘陵遺跡 |
| 8 重石 1号墳 | 23 キヘエ 13号墳 | 38 おかめ遺跡 | 53 すくば下遺跡 | 68 京/上臈 4号墳 | 83 大浦台遺跡 |
| 9 重石 2号墳 | 24 キヘエ 14号墳 | 39 鞍掛鼻遺跡 | 54 串山遺跡 | 69 京/上臈 5号墳 | 84 家島港東遺跡 |
| 10 牛ヶ首古墳 | 25 キヘエ 15号墳 | 40 鞍掛浜遺跡 | 55 荒神島遺跡 | 70 重石遺跡 2 | 85 家島北西浜遺跡 |
| 11 キヘエ 1号墳 | 26 キヘエ 16号墳 | 41 アババ遺跡 | 56 八幡神社遺跡 | 71 家浦遺跡 | 86 荒神島南浜遺跡 |
| 12 キヘエ 2号墳 | 27 キヘエ北西端古墳 | 42 大福浦遺跡 | 57 葛島遺跡 | 72 鶴松鼻古墳群 | 87 風戸山西遺跡 |
| 13 キヘエ 3号墳 | 28 なか鼻古墳群 | 43 局島遺跡 A地点 | 58 屏風島北端古墳群 | 73 高原城跡(直島城跡) | 88 石島山遺跡 |
| 14 キヘエ 4号墳 | 29 一本松古墳 | 44 京/上臈遺跡 | 59 屏風島南東古墳群 | 74 城山城跡(丸山城跡) | 89 井島石切丁場遺跡(第1地点) |
| 15 キヘエ 5号墳 | 30 荒神島古墳 | 45 葛島南浜遺跡 | 60 葛島A古墳群 | 75 積浦遺跡 | 90 井島石切丁場遺跡(第2地点) |
| | | | | | 91 井島石切丁場遺跡(第3地点) |
| | | | | | 92 石島山南遺跡 |
| | | | | | 93 井島石切丁場遺跡(第4地点) |
| | | | | | 94 井島石切丁場遺跡(第5地点) |
| | | | | | 95 井島石切丁場遺跡(第6地点) |
| | | | | | 96 井島石切丁場遺跡(第7地点) |
| | | | | | 97 井島石切丁場遺跡(第8地点) |
| | | | | | 98 風戸山西古墳 |
| | | | | | 99 局島南丘陵遺跡 |

第1図 周辺の遺跡(番号は第3章第1節の「台帳番号」と一致)

で詳述する。

近世は中世から引き続き八幡神社遺跡が認められるほか、高原城主であった高原氏に関わる高原氏墓標群(79)と敬光院増有墓碑(80)が知られる。

第3節 歴史・民俗的環境

ここでは香川県立ミュージアムおよび瀬戸内海歴史民俗資料館の調査事業の成果の一部として、2022年(令和4)の祭り調査をもとに本村、積浦、宮ノ浦の歴史・民俗的環境について報告する。かつては、3地区の神社の祭りは「大祭り」、そのほかの神社の祭りは「小祭り」といったという(直島町史編纂委員会『直島町史 続編』直島町役場、1990年、150頁。以下、『町史続』と略記)。

調査事業の期間は新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響が続いており、直島でも祭り自体が内容を縮小・変更して行われ、調査が十分に実施できなかった。本村については祭り当日の調査はできなかったため、聞き取りによる祭りの組織の記載のみにとどめた。そのため内容に至らない点も多いが、世界的な感染症の流行に直島の人たちがどのように対処したかを示す記録としての意義を鑑み、報告するものである。

1. 各地区の概況

まず、本村、積浦、宮ノ浦の各地区を中心に現在の概況を紹介する。かつて集落があったが、現在は三菱マテリアル直島製錬所の敷地となっている、島の北側にあたる風戸や、地中美術館やベネッセハウスミュージアムといった施設の集中する南側地域、そして周辺の直島諸島については割愛する。

直島は古代・中世において、近衛家の荘園であり、備前国(岡山県)に属していた。後世の史料や伝承を頼りにするしかないが、中世以前は直島の中心地は、崇徳天皇神社の所在する積浦であったが、その後、高田浦(本村)へと移ったとされている(直島町史編纂委員会『直島町史』直島町役場、1990年、192頁。以下、『町史』と略記)。江戸時代には、主に倉敷代官所支配の幕府領として、農業や漁業(鯛網漁)、製塩業のほか、本村は廻船業でも栄え、明治時代に香川県の一部となる。現在は3年に1度開催される瀬戸内国際芸術祭の時期を中心にアートの島として知られ、国内外から多くの観光客が訪れる。

本村 直島の東側に位置する港に面した本村は、世帯数412、人口777人(男375、女402)となっている(直島町ホームページの地区別人口より[令和4年4月1日現在]。東町、中町、戎加茂町、西町、石場町、納言様の合計)。四国汽船株式会社が、本村―宇野間の航路を運航している。

他の地区に比べて古い民家が多く密集しており、南北に走る通り(筋)に面する両側の家々が「町」というまとまりを形成している。「大三宅(三宅家住宅)長屋門及び供部屋」(国登録有形文化財)は、江戸時代に庄屋を務めた三宅家の住宅の一部である。三宅家が所有・作成した文書類は、「三宅家文書」として瀬戸内海歴史民俗資料館に寄贈

されている(瀬戸内海歴史民俗資料館編『歴史収蔵資料目録三 瀬戸内海海事資料目録一 讃岐国香川郡御料直島三宅家文書目録』1978年ほか)。

八幡神社、護王神社、八幡山極楽寺のほか、直島町役場、直島郵便局、百十四銀行直島支店、三菱マテリアル直島生活協同組合本村店(コープ本村店)、直島漁業協同組合、香川県農業協同組合(JA香川県)の直島支店などもあり、直島の中心地である。古い民家や空地などを活かしたアートプロジェクトである家プロジェクトが展開されている。

積浦 本村の南東に位置する積浦は、世帯数189、人口342人(男168、女174)である。湾に沿って集落が形成されており、北西の高台に崇徳天皇神社が位置し、南東には整備された積浦墓地がある。積浦には、10歳未満で亡くなった子どもを葬る子墓の墓地が積浦墓地とは別の区画に設けられている。

宮ノ浦 直島の西側にあり、岡山県玉野市と香川県高松市からのフェリーが発着する宮浦港がある(地名表記は「宮ノ浦」とするが、港、墓地、団体の名称はそれぞれの表記に従った)。

地区別人口によれば、世帯数639、人口1271人(男645、女626)であり、三つの地区の中では最も人口が多い。

港には海の駅「なおしま」がある。四国汽船株式会社が高松―宮浦、宇野―宮浦間の航路を運航しているため、多くの観光客がこの港を利用する。港に面した住吉神社のある居住地は比較的古い民家が集まっており、オイベッサン(恵比寿)の神社や地蔵堂がある。

北側には「宮ノ浦共同墓地」があり、その入り口から北東に伸びる道沿いには居酒屋や料理屋があり、住宅地や製錬所に通じている。

かつては、江戸時代から住居のあった港付近を「旧宮」(旧宮ノ浦)、居酒屋や料理屋のある付近から北西にある住宅地を「新宮」(新宮ノ浦)と呼んでおり、いまでも通称として使われている。

これは、1917年(大正6)設置された三菱合資会社の直島製錬所ができた後、1930年代頃に風戸の住民が移住するために山を切り開いて住宅地とし、そこが「新宮」と呼ばれたことによる(香川県編『香川県史 第十四巻 資料編 民俗』四国新聞社、1985年、337頁)。

住吉神社の南側を走る県道256号は、文教地区や本村に通じており、バスや自動車が行きかう。島内唯一のコンビニエンスストアであるセブンイレブンなおしま店のほか、公益財団法人 福武財団の事務局オフィスが所在する。

2. 直島の神社・祭り

江戸時代には、寺院が別当・社僧として神社を支配することが一般的であった。直島三カ島(直島・男木島・女木島)では、長寿院(極楽寺)が直島の八幡宮ほか大・小社、男木島の大・小社、円明院(高原寺)が直島の弁財天1社、女木島の大・小社を管轄し、社家の三宅采女佐が直島・男木島・女木島のすべての神社の祭祀を担っていた(三宅兵右衛門『直嶋寺社由来記 控』1708年[宝永5]、瀬戸内海歴史民俗資料館蔵三宅家文書。以下、

三宅家文書と略記)。直島町長を務めた三宅親連(1908～1999)は社家の三宅家の出であり、平成初期までは八幡神社の神主として祭りに奉仕していた。その後、岡山県の神職が島内の神社を兼務するようになった。現在の神主も岡山県在住だが、10年程前から務めているという。

ほかにも、本村には神子(いわゆる巫女)を家業とする家があった。『町史続』には、神子は各神社の祭祀に社家とともに参加して神樂を行うだけでなく、小さな社(祠)の管理や、年末に各家の竈祓いを担っていたことが報告されている。神子の存在は1835年(天保6)の『宗門人別帳』(三宅家文書)でも確認できるため、江戸時代後期にはそういった活動をしていたと推測される。

以下、2022年の積浦の崇徳天皇神社、宮ノ浦の住吉神社、本村の八幡神社の祭りについて報告する。

2-1. 崇徳天皇神社(積浦)



写真1 崇徳天皇神社のヨイマツリ

ヨイマツリ 10月1日(土)16:00から神事が行われ(時間に間に合わず未見)、その後、拝殿に鉦打ち太鼓を設置し、大人たちが叩いていた。拝殿には幕が取り付けられ、境内には幟が立てられていたが、こういった準備は、当日に行ったものだという。参加者の服装は、「積浦自治会」のほっぴを羽織る人もいれば普段着の方もいた。通常であれば、この太鼓を乗せたタイコ(太鼓台。以下、太鼓台の場合は「タイコ」と表記)を担いで集落内を練り歩くが、感染拡大防止のため中止していた。太鼓を叩くのは、他地区と同じく乗り子(小学校4～6年生)だが、この時は子どもの参加を自粛していたため、指導している側の経験者の大人の男性たち(OBとっていた)が叩いていた。太鼓を叩いているのは、奉納というわけではないが、少しでも祭りの雰囲気を楽しんでもらうためということだった。

感染症対策のため、本来の祭りとは異なる状況ではあるが、疲れたら交代しながら太鼓を叩きつづけ、テンポも早くなったりゆっくりとなったりを繰り返し、間違えたりするとヤジがとんだり、うまく合わせられたら拍手がおき、笑い声も絶え

ない雰囲気であった。

太鼓の演目には、タイコが石段を上がる際に叩かれるゆっくりとした「エエラ」、最後に締めで叩かれる「マカショ」などがある。「ノーエ節」、「どんぐりころころ」なども歌われていた。太鼓のバチには黄色と緑色の布をつけていた。18:00にマカショでこの日は終了した。以下のタイコ、トウヤについては、聞き取りに基づく記述となる。

タイコ 積浦には屋台(祭りの出し物。「23八幡神社(本村)」参照)はなく、タイコも1台である。積浦の鉦打ち太鼓は他の地区のものより大きいという。担ぐには30人ほど必要だが、地区のものだけでは担げないので本村、宮ノ浦からも手伝いがくる。担ぎ手は、柔道着を着用するが、肩のところにはその下にタオルあてる。それでも重さで皮膚が破れる。地区内を練り歩いたあとに、参道の階段を上って神社にやってくるという。

ホンマツリ 10月2日(日)、神事は11:00開始の予定だったが、人がそろったため10:50に開始。拝殿から階段を上って本殿の前に氏子総代らがある。本殿に向かって右に氏子総代1人、自治会役員4人、左にトウヤである3組の5人が並ぶ。拝殿には地区の人たちが集まっていた。

本殿の前には神饌が供えられ、拝殿から本殿に上がる階段には熨斗のついた箱の神饌がいくつか並べられていた。神饌には、昆布や鯛のほか、本村にある菓子店のイワタコンフェクト(令和5年閉店)のアカガネもあった。

11:15に神事が終了し、片付けが始まる。神饌を下げるのと同時に、30人ほどが集まって、幟4つ、拝殿の幕、拝殿と鳥居の提灯(電球式)を片付けた。お供えの餅を女性たちが切り分ける。片付けが一段落したら、手伝いに来た人たちに飲み物を配る。

自治会長と、トウヤである3組の数人は社務所の中を片付け、はっぴやごみを集めて袋に詰める。それが済むと、社務所の雨戸を取り付け、戸締りをし、11:50には終了となった。このときはなかったが、ホンマツリのあとに演芸大会を催し、歌や踊りを披露するという。

積浦のトウヤ 祭りの当番のことをトウヤという。積浦は4つの組に分かれ、組単位でトウヤを務めている。墓地のある南東側から1～3組となっており、4組は埋立地で新しい。今年は3組がトウヤとなっている。トウヤの組のほかに自治会の役員も手伝いをするという。

3組は住宅が増えている一方、1組は積浦のなかでも古い地域であるため人が増えないという。

2-2. 住吉神社(宮ノ浦)

ヨイマツリ 10月8日(土)17:30に社殿内で神事が開始された。参列者は4人だった。17:50に神事が終了すると、太鼓保存会の代表者が神主に榊をもらいにきて、それを持って港に行く。ひものついたバケツを海に入れ、海水をひきあげ、バケツに入った海水に榊をつけて、乗り子や保存会のメンバーに振りかける。これをシオバライという。

そのあと神社の拝殿前に戻り、神主より幣でのお祓いを受けた。この頃、境内に準備してあった照明が点灯された。



写真2 住吉神社のヨイマツリ

18:30～19:30にかけて、境内で「宮之浦太鼓保存会」が太鼓の奉納をした。境内に二台（大・小）の鉦打ち太鼓が用意され、小さい方は普段触れたことがない子どもが叩けるようにもしていた。大きい太鼓は、保存会の年上、大人の男性たち4人が叩いていた。前半と後半でメンバーは交代した。前半と後半の間に集まった地域の子もたちにお菓子を配る時間があり、保存会の2人で「勇気100%」など比較的新しいアニメの主題歌も歌いながら叩いていた。保存会のメンバーはそろいのTシャツに野球のユニフォームや柔道着を着用していた。太鼓の奉納が終わると、保存会メンバーは神前に二礼二拍手一礼をし、後片付けに入った。

タイコ 例年、タイコは神事が終わったあとに出していた。ヨイマツリの夕方と、ホンマツリの10:00から昼を挟んで午後まで続けていたという。普段は境内の倉庫に保管しているが、2日前から組み立てておいた。

タイコは宮ノ浦のなかを練り歩く。隣接する横防には行っていないが、昔は祭りのために寄付してくれた人の家には行っていたという。

普段は、タルミコシを子ども会が出しているが、今年ではなかった。昔は男の子、女の子、それぞれのものがあつた。通常はヨイマツリの午後、ホンマツリの午前に出していたという。

宮之浦太鼓保存会 タイコは元々青年団が担当していた。青年団がなくなって保存会になった。コロナになってからタイコは出しておらず、今年はタイコの太鼓の部分で境内に置いて大人も奉納で叩くことにした。保存会での練習は、1か月前からやるが、大人はそれぞれが仕事の都合があるのでタイミングがあうときに集まるのだという。

屋台の記憶 『町史続』には宮ノ浦にも屋台があつたと報告されているので尋ねると、「記憶にない。なかつたのでは」という人もいれば、「あつたと思う」という人もいた。社殿内に、屋台と女の子の写真があつたので最終的にあつたことが確認された。

ホンマツリ 10月9日(日)11:24に神事開始され、参列しているのは昨日同様、4人であった。11:54に神事終了すると、トウヤの組の人たちが来て、片付けをはじめた。社殿内の提灯、拝殿外の幕を

外し、幟をおろし、女性たちは神饌の器を洗っていた。供えられた米はトウヤがもって帰るのだという。

宮ノ浦のトウヤ 宮ノ浦は組（隣組）が22組に分かれており、組単位でトウヤを引き受けている。組は、1～6が旧宮、7が追出、8～10が横防、11～18が新宮（18は製錬所社宅だった地区）に対応する。このうち7、18がそれぞれA、B、Cに、10がA、Bに分かれているので、全部で22組となる。

今年は8組がトウヤだった。組内の軒数は多いところだと30軒、少ないところは10軒だといいい、道で境が区分されている。本来であれば、トウヤは祭りの日に神饌料を持って神社にくる人の受付をして、お札を渡すという。これは、コロナのため今年ではしていない。神事には、トウヤの代表者のため参加していたが今回はしていないということだった。

宮ノ浦にある地藏堂内に掲げられた「昭和十六年四月吉日」とある「地藏堂落成式 寄附方名録」という板木の墨書からは「第一隣組」から「第五隣組」まであつたことがわかる。現在の組と同一視できないが、地区の範囲が拡大したことで組が増加したことが推測される。

2-3. 八幡神社（本村）



写真3 八幡神社（2021年6月撮影）

『広報直島』No.832（2022年11月号）によれば、本村では八幡神社のヨイマツリの日である10月15日（土）に、町役場前に鉦打ち太鼓と屋台を出し、本村太鼓同好会による「お披露目」が行われたという。子どもによるものではなく、指導する側の大人の男性が太鼓を叩いたり、女性が屋台の中で三味線などを演奏したりした。ここでいう屋台とは、「底抜け屋台」などと称されるもので、屋根とそれを支える柱を主に構成された移動可能な出し物のことである。本村太鼓同好会の男性が引っ張って動かし、着物を着た女の子がその内側に入って締め太鼓、鉦、三味線などを歩きながら演奏し、音頭とりなどがつくものである（香川県立ミュージアム編『祭礼百態』2019年）。

祭りの組織 現在、積浦、宮ノ浦は自治会とトウヤが祭りでも中心となるが、本村の場合は、総代会が八幡神社と護王神社の祭りを取り仕切っている。総代会は13人おり、欠員が出たら補充することとなっている。総代会は、年に4、5回の集

まりがあるという。

また、本村太鼓同好会は元々青年団であったが、これも自治会とは別組織となっている。屋台は郷土芸能保存会が担っている。

本村のトウヤ 本村自治会は、西側から、東町（東町、ハト町）、中町、戎加茂町（戎町、加茂町だったか）、西町、石場町、少し離れたところにある納言様、向島（近年加わったが祭りには参加しない）で構成されている。町の中で組に分かれている地域もあり、西町は5、中町は7、石場町は6、東町が2の組がある。以前は筋（道路）の両側という明確な基準が機能していたが、道路が延伸し範囲が広がったり、新しくできた家はその住民の意向で決めたりするのでかなり複雑になっているという。

本村のトウヤは町単位で回しており、その順番は自治会で決めている。令和4年度は中町、令和5年度は、東町・戎加茂町・納言様の三つの町、令和6年度西町、令和7年度石場町という順番になっている。

トウヤは祭り月の5月、10月を中心に神社の清掃をし、神輿の世話を中心に行うという。ホンマツリの祭りの行列に出る御幣はトウヤの一人が出て持つという。

このように八幡神社の祭りは他の地区よりも規模が大きく、複数の組織が役割を分担することで成り立っているといえる。

小括

2022年は新型コロナウイルス感染症の影響があり、祭りは縮小・変更しての実施となっていた。

神事のほか、タイコの太鼓部分だけを境内に置き、通常は乗り子（子ども）が叩くものを、教える側の大人が叩く（本村の屋台も同様）という対応が見られた。

例外的な処置であったが、地区によって雰囲気

に違いがあった。積浦では、ゆるやかな遊びのような要素が強く出ていた一方で、宮ノ浦では宮ノ浦太鼓保存会が若者を中心に組織化されていることもあって「奉納」という意識が強く、厳格に行っているようであった。また、積浦は外部からの見学が少なく、地区内からの人もそれほど長くないなかったのに対し、宮ノ浦では人口が多いことであってか、多くの人が境内に集まり、奉納を見ていた。

トウヤの組織に着目すると、宮ノ浦は住民が多いため、組数が22と圧倒的に多い。これは港が整備されて、人口が増加した後の変化といえる。本村は町を単位とし、そのなかに組がある場合もあり、島内であっても他の地域とは異なる編成がなされていた。さらに、自治会と祭りを担う組織が重なっている積浦、宮ノ浦に対して、本村では複数の組織が形成されていることもわかった。地域の歴史や祭りの規模とも関わるが、同じ直島でも一括して理解できない点を再確認させられた。

以上が、2022年の調査に基づく直島の祭りの報告である。2023年は、新型コロナウイルス感染症流行以前に戻ってきているため、この報告は例外的な状況ということになった。これまでの直島の祭りの調査報告などととも比較検討することで、直島町の歴史・民俗を考える一助となれば幸いである。

付記 調査に際して本村・積浦・宮ノ浦の自治会長および各地区の方々にご協力いただいた。記して感謝したい。

第3章 調査成果

第1節 詳細分布調査

今回の調査成果のうち、詳細分布調査について、既往の調査成果と合わせ、直島町を構成する島単位で各遺跡の概要を記載する。

凡例

- | | | |
|-------|-------|--------|
| ① 島名 | | ④ 台帳番号 |
| ② 番号 | ③ 遺跡名 | ⑤ 現況 |
| ⑤ 所在地 | | ⑧ 時期 |
| ⑦ 種別 | | ⑪ 関連文献 |
| ⑨ 概略 | | |
| ⑩ 調歴 | | |
| ⑫ 出物 | | |
| ⑬ 備考 | | |

- | | |
|--------|---|
| ① 島名 | 遺跡の所在する島の名称。 |
| ② 番号 | 本書における遺跡の通し番号。 |
| ③ 遺跡名 | 香川県遺跡台帳に掲載されている遺跡の名称。 |
| ④ 台帳番号 | 香川県遺跡台帳に掲載されている番号。 |
| ⑤ 所在地 | 遺跡の所在地。台帳上、番地が掲載されているものについては番地まで記載した。 |
| ⑥ 現況 | 踏査時に現認した状況を踏まえ、原則、遺跡台帳に掲載される区分（山林・畑・水田・宅地・墓地）をもとに記載し、該当しないものは別途記載した。現地確認が出来なかったものについては、遺跡台帳に掲載される状況を記載した。 |

- ⑦ 種別 平成22年4月1日から適用されている『行政目的で行う香川県埋蔵文化財発掘調査標準』に掲載される以下の遺跡種別を参考にした。「集落・洞穴・貝塚・宮都・官衙・城館・交通・窯・田畑・製塩・製鉄・その他生産遺跡・墓・古墳・横穴・祭祀・経塚・社寺・散布地・その他」
- ⑧ 時期 時期表記は下記のとおりとし、複数の時期が確認できる場合は併記した。
〔旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世・近代・不明〕
- ⑨ 概略 既往の調査などで判明している内容を踏まえ、踏査成果と合わせながら記載した。
- ⑩ 調査歴 発掘調査及び分布調査について把握できるものは年次と調査主体を記載した。
- ⑪ 関連文献 調査等が行われている遺跡について、発行者・執筆者と刊行年について略記した。
詳細は巻末の参考文献一覧を参照頂きたい。
- ⑫ 出土遺物 既存の調査などで確認されている遺物を記載した。なお、分布調査などで記録した遺物に付いては、別途節を設けた。
- ⑬ 備考 遺跡の別称など、当該遺跡の内容について特記すべき点を記載した。

牛ヶ首島

番号	1	遺跡名	牛ヶ首古墳	台帳番号	10
所在地	牛ヶ首島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代（後期）		
概要	高津鼻の丘陵尾根筋上に立地する大型石材を持つ横穴式石室墳。2021年度の踏査で所在位置の確認・修正。2022年度の踏査により墳丘直径16～17m、墳丘高3～4mの規模で、尾根上方側に最大幅約5.3mの周溝が良好に遺存することを確認。また石室は、玄室長3.5m・玄室幅1.5m・玄室床面積5.25㎡・玄室高1.5m、石積は奥壁1段・側壁2段・玄室天井石2枚。石材は花崗岩。南へ開口。				
調査歴	発掘調査歴なし。2021・22年踏査。		関連文献	直島町役場 1990	
出土遺物					
備考	『直島町史』には「高津古墳」として記載。				

番号	2	遺跡名	金比羅山古墳	台帳番号	78
所在地	牛ヶ首島 4584-1	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代（後期）		
概要	2022年度踏査により全長35～40mの前方後円墳の可能性を確認。前方部現況高約1m、後円部現況高約2m。				
調査歴	発掘調査歴なし。2021・22年踏査。		関連文献		
出土遺物					
備考	後円部上に花崗岩板石を集積した祠有。板石は幅0.3～0.5m、長さ0.5～1m、厚さ0.2～0.3mのものがほとんどで、横穴式石室蓋石に該当するものはみられない。採取資料には円筒埴輪片（旧瀬戸内海歴史民俗資料館所蔵資料？）がある。集成9期（MT15）頃の前方後円墳とみられる。				

喜兵衛島

番号	3	遺跡名	キヘエ北東浜遺跡	台帳番号	51
所在地	喜兵衛島	現況	山林・草地		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代後期・中世		
概要	浜東半部で遺物少量散布を確認。満潮時汀線付近まで包含層が広がる。				
調査歴	1954 直島町教育委員会（1次） 玉野市教育委員会（2次） 1955・56・57 玉野市教育委員会（3～5次） 1958 直島町教育委員会（6次） 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団（7～11次）		関連文献	『喜兵衛島』刊行会 1999 他	
出土遺物					
備考	2022年度踏査時は時期の判別可能な資料採取できず。過去に平高台を有する土師器坏底部辺や土師質土器カマド片が採取されている（喜兵衛島刊行会1999）。				

番号	4	遺跡名	キヘエ北西浜遺跡	台帳番号	50
所在地	喜兵衛島	現況	山林・草地		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代後期、中世		
概要					
調査歴	1954 直島町教育委員会（1次） 玉野市教育委員会（2次） 1955・56・57 玉野市教育委員会（3～5次） 1958 直島町教育委員会（6次） 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団（7～11次）		関連文献	『喜兵衛島』刊行会 1999 他	
出土遺物					
備考	2021年度踏査時には、過去の発掘調査地点は樹木草本類に被覆され、地表の観察は困難。満潮時汀線より下位の浜における遺物の散布は西半と東半で若干異なる。西半では6世紀前半頃の須恵器を交えつつ、主体は6世紀後半のものである。また、7世紀後半以降の遺物も少量含む。古墳時代前期の吉備系甕を1点含む。東半は6世紀後半の遺物を主体としつつ、12～13世紀の瓦器碗などを含む。				

番号	5	遺跡名	キヘエ南東浜遺跡	台帳番号	49
所在地	喜兵衛島	現況	山林・草地		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代後期		
概略					
調査歴	1954 直島町教育委員会 (1次) 玉野市教育委員会 (2次) 1955・56・57 玉野市教育委員会 (3～5次) 1958 直島町教育委員会 (6次) 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団 (7～11次)	関連文献	『喜兵衛島』刊行会	1999	他
出土遺物					
備考	遺跡全体がヨシに覆われ、1960年代の調査地付近まで近づいたが、地面が十分に観察できない。				

番号	6	遺跡名	キヘエ南西浜遺跡	台帳番号	48
所在地	喜兵衛島	現況	山林・草地		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代後期		
概略					
調査歴	1954 直島町教育委員会 (1次) 玉野市教育委員会 (2次) 1955・56・57 玉野市教育委員会 (3～5次) 1958 直島町教育委員会 (6次) 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団 (7～11次)	関連文献	『喜兵衛島』刊行会	1999	他
出土遺物					
備考	浜にて須恵器・製塩土器の散布を確認。				

番号	7～22	遺跡名	キヘエ1～16号墳	台帳番号	11～26
所在地	喜兵衛島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代後期		
概略	県遺跡台帳に掲載される16基を記載。報告書『喜兵衛島』（『喜兵衛島』刊行会1999）で報告されている古墳との正確な対比が困難であることから、一括して記載。				
調査歴	1954 直島町教育委員会 (1次) 玉野市教育委員会 (2次) 1955・56・57 玉野市教育委員会 (3～5次) 1958 直島町教育委員会 (6次) 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団 (7～11次)	関連文献	『喜兵衛島』刊行会	1999	他
出土遺物					
備考	2021年度の踏査では報告書掲載の1号墳・2号墳・10号墳の3基について現況を確認。残りのものは下草に覆われ、現認できず。				

番号	23	遺跡名	キヘエ北西端墳	台帳番号	27
所在地	喜兵衛島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代後期		
概略	島の北西端の岬状の丘陵頂部に立地し、キヘエ北西浜遺跡から北西約60mに位置する。『喜兵衛島』で報告される古墳の16号墳に相当する。				
調査歴	1954 直島町教育委員会 (1次) 玉野市教育委員会 (2次) 1955・56・57 玉野市教育委員会 (3～5次) 1958 直島町教育委員会 (6次) 1960・62・63・66 喜兵衛島調査団 (7～11次)	関連文献	『喜兵衛島』刊行会	1999	他
出土遺物					
備考					

番号	24	遺跡名	キヘエ北東丘陵遺跡	台帳番号	76
所在地	字喜兵衛島4580番地2	現況	山林		
種別	包含地	時期	旧石器		
概略	落石防止法面整備及び排水路整備工事に伴う発掘調査を実施。丘陵頂部縁辺の地山直上で約2mの範囲からサヌカイト製剥片及び未製品7点が出土。また、周辺の包含層からも散漫にサヌカイト片が出土。				
調査歴	2004年1月27日～30日	関連文献	香川県教育委員会	2004	
出土遺物					
備考	2004年2月24日登録				

屏風島

番号	25	遺跡名	屏風島北端古墳群	台帳番号	58
所在地	屏風島	現況	山林		
種別	古墳	時期			
概略	遺跡台帳上に名称記載の他、直島町保管の遺跡地図上、島の北西の岬上に地点記載あり。箱式石棺であったと見られるが、現地周辺は深い樹木草本により現況確認できず。				
調査歴	分布調査のみ（1953・1982）	関連文献	喜兵衛島発掘調査団	1956	
出土遺物					
備考					

番号	26	遺跡名	屏風島南東古墳群	台帳番号	59
所在地	屏風島	現況	山林		
種別	古墳	時期			
概略	遺跡台帳上に名称記載の他、直島町保管の遺跡地図上、島の南西の丘陵南東斜面に地点記載あり。箱式石棺であったと見られるが、現地周辺は深い樹木草本により現況確認できず。				
調査歴	分布調査のみ（1953・1982）	関連文献	喜兵衛島発掘調査団	1956	
出土遺物					
備考					

番号	27	遺跡名	屏風島南浜遺跡	台帳番号	52
所在地	屏風島	現況	海岸		
種別	製塩遺跡？	時期	古代		
概略	遺跡台帳上に名称記載の他、直島町保管の遺跡地図上に島の南東部の浜に地点の記載があるが、前記の内容から下記の屏風島南東浜遺跡と同一遺跡の可能性が高い。				
調査歴	発掘調査歴なし。2021年分布調査。	関連文献			
出土遺物					
備考					

番号	28	遺跡名	屏風島南東浜遺跡	台帳番号	77
所在地	屏風島 4558 番地先	現況	海岸		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代、古代		
概略	浜に古墳時代後期の須恵器・土師器・製塩土器が散布している。2021年分布調査では7世紀末頃の須恵器坏蓋を採取。				
調査歴	分布調査のみ（2015・2021）	関連文献			
出土遺物	須恵器蓋（古代）・製塩土器片				
備考	地点は「27 屏風島南浜遺跡」と同じ。				

京ノ上臈島

番号	29	遺跡名	京ノ上臈 A 1号墳	台帳番号	5
所在地	京ノ上臈島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	島北東部に張り出した岬の稜線上に所在。箱式石棺 長さ1m。				
調査歴	分布調査のみ	関連文献			
出土遺物					
備考	2021年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	30	遺跡名	京ノ上臈 A 2号墳	台帳番号	6
所在地	京ノ上臈島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	島北東部に張り出した岬の稜線上に所在。箱式石棺 長さ1.65m。				

調査歴 分布調査のみ 関連文献

出土遺物

備考 2021年分布調査では樹木草本により現地確認できず。

番号	31	遺跡名	京ノ上臈 A 3号墳	台帳番号	7
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	島北東部に張り出した岬の稜線上に所在。箱式石棺 長さ不明。				
調査歴	分布調査のみ			関連文献	
出土遺物					
備考	2021年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	32	遺跡名	京ノ上臈 B 古墳群	台帳番号	32
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	島北東部に張り出した岬の稜線上に所在。内容不明。				
調査歴				関連文献	
出土遺物					
備考					

番号	33	遺跡名	京ノ上臈 1号墳	台帳番号	65
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	5基の小円墳のうち1基。横穴式石室を持つ。複数の地図に地点が記録されるが、いずれも異なる場所が示され、正確な位置は不明。				
調査歴	分布調査のみ			関連文献	
出土遺物					
備考	2021・22年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	34	遺跡名	京ノ上臈 2号墳	台帳番号	66
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	5基の小円墳のうち1基。横穴式石室を持つ。複数の地図に地点が記録されるが、いずれも異なる場所が示され、正確な位置は不明。				
調査歴	分布調査のみ			関連文献	
出土遺物					
備考	2021・22年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	35	遺跡名	京ノ上臈 3号墳	台帳番号	67
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	5基の小円墳のうち1基。横穴式石室を持つ。複数の地図に地点が記録されるが、いずれも異なる場所が示され、正確な位置は不明。				
調査歴	分布調査のみ			関連文献	
出土遺物					
備考	2021・22年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	36	遺跡名	京ノ上臈 4号墳	台帳番号	68
所在地	京ノ上臈島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	5基の小円墳のうち1基。横穴式石室を持つ。複数の地図に地点が記録されるが、いずれも異なる場所が示され、正確な位置は不明。				

調査歴 分布調査のみ 関連文献
 出土遺物
 備考 2021・22年分布調査では樹木草本により現地確認できず。

番号	37	遺跡名	京ノ上臈5号墳	台帳番号	69
所在地	京ノ上臈島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	5基の小円墳のうち1基。横穴式石室を持つ。複数の地図に地点が記録されるが、いずれも異なる場所が示され、正確な位置は不明。				
調査歴	分布調査のみ	関連文献			
出土遺物					
備考	2021・22年分布調査では樹木草本により現地確認できず。				

番号	38	遺跡名	京ノ上臈遺跡	台帳番号	44
所在地	京ノ上臈島	現況			
種別	製塩遺跡	時期			
概略	島の北部に面する海岸に立地。1961年分布調査時には大規模な製塩遺跡とされるが、現況は後背地が草に覆われ、地表の確認できず。浜でも主に古墳時代後期と考えられる須恵器瓦片などわずかな遺物の散布が確認できるのみで、詳細な時期は不明。				
調査歴	分布調査のみ	関連文献			
出土遺物					
備考					

番号	39	遺跡名	京ノ上臈島東浜遺跡	台帳番号	81
所在地	京ノ上臈島	現況	海岸		
種別	散布地	時期	旧石器～縄文、中世・近世		
概略	比較的多くの遺物散布を確認。ほとんどが波による転磨を受けている。須恵器・土師器の他、縄文土器の可能性のある土器片や白磁・近世陶磁器がみられる。また、結晶片岩やサヌカイトなど島外から搬入された石材も確認。チャート製火打石を含む。浜の背後は丘陵となっており、平坦地はほとんどない。丘陵の尾根筋周りなどに生活の場があった可能性はあるが、下草の繁茂で丘陵上の踏査は未実施。				
調査歴	発掘調査歴なし。2021年分布調査。	関連文献			
出土遺物	サヌカイト製石核・縄文土器・須恵器・土師器・白磁・近世陶磁器・火打石				
備考	2021年台帳登載				

局島

番号	40	遺跡名	局島遺跡 A 地点	台帳番号	43
所在地	局島	現況	海岸		
種別	製塩遺跡	時期	古代		
概略	1961年踏査時は製塩土器包含層を確認。2022年踏査時には土器包含層の明確な存在は確認できなかったが、2～3cm角の小片が多数浜に散布している状況を確認した。薄手でタタキなどの痕跡は認められず、備讃Ⅶ式のものと考えられる。				
調査歴	発掘調査歴なし。分布調査	関連文献			
出土遺物	製塩土器				
備考					

番号	41	遺跡名	局島南丘陵遺跡	台帳番号	99
所在地	局島	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器～縄文時代		
概略	南側の丘陵部は最高所で約13mを測り、全体的には標高約10m付近の高さでやや平坦な面が広がる。松その他の樹木からなる山林で、現況は地表の多くが腐葉土に覆われ、遺物の散布遺構の存在を確認するのが困難な状況であった。若干認められる裸地の部分では花崗岩バイラン土が露出し、微量のサヌカイト片の散布を確認した。かつて細石刃が採取されており、包含層が残存している可能性がある。				
調査歴	発掘調査歴なし。	関連文献	小野・白石 2003		
出土遺物	サヌカイト片				
備考	2022年台帳登載				

家島

番号	42	遺跡名	鶴松古墳群	台帳番号	3
所在地	家島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	1961年調査時は、島南端に細く突き出る岬の丘陵頂部で箱式石棺が13基確認されている。いずれも封土は流失し、盗掘を受けていた。また、一部は島へ給電するための送電線の敷設の影響を受けている。2022年踏査時は樹木と腐葉土で覆われ、遺構を現認できなかった。				
調査歴	1961年踏査	関連文献			
出土遺物					
備考					

番号	43	遺跡名	鶴松鼻古墳群	台帳番号	72
所在地	家島 4491-1	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	42の鶴松古墳群と同一内容と考えられる。後述する調査報告に示された古墳群の範囲と42の範囲は重複する。このうちの1基は1977(昭和52)年に送電線改良に伴う掘削工事中、丘陵稜線上の地表下約0.6mから発見されている。掘削中露出した花崗岩を除去したところ、下の空間から土器片と共に頭骨が確認された。必要最低限の記録を取り埋め戻されたようで、後日改めて関係者からの聞き取りで記録の補足が行われている。それによると、確認された遺構の状況から蓋や封土が残存した箱式石棺が検出されたものと考えられる。石棺の主軸は稜線に対しほぼ直交する東西軸で、使用石材は花崗岩の板石である。東側の小口付近で掘削の影響は止まり、西側には及んでいない。また、人骨は小口付近で確認されており、頭位は東向きである。確認時の写真は町教委で保管されている。 なお、現況では丘陵頂部に2本並立するコンクリート製電柱が確認できるが、調査時の写真と現況を対比した際、その東側の下が石棺の東半に相当すると見られる。土砂の流失は確認されず、工事で破壊されたところ以外は残存している可能性が高い。				
調査歴	1961年踏査 1977(昭和52)年6月11日	関連文献			
出土遺物	人骨				
備考	(調査した古墳とは別と思われるが、直島町資料館保管資料中、須恵器坏蓋及び甕の破片が確認できる。6世紀中頃か)				

番号	44	遺跡名	だるま石上古墳	台帳番号	4
所在地	家島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	家島港の東側丘陵上に立地。明治年間に島民により発見され、人骨が出土。近くの共同墓地に改葬されたほか、蓋石を立てて祀っているとのこと。2022年に踏査した際には下草などで現況は確認できなかった。				
調査歴	1961年踏査	関連文献			
出土遺物	人骨(伝)、勾玉、管玉など				
備考	遺跡カードの保管者名に旧所有者名があるが、同氏から購入した資料で、瀬戸内海歴史民俗資料館から香川県埋蔵文化財センターへ移管された管玉3、勾玉1(家島古墳出土)がそれに該当する可能性がある。				

番号	45	遺跡名	家浦遺跡	台帳番号	71
所在地	家島	現況	海岸		
種別	散布地	時期			
概略	1961年踏査時には製塩土器の散布が確認される。企業地であり荒廃が進んでいたようである。				
調査歴	1961年踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年踏査時にはほとんど遺物の確認は出来ていない。				

番号	46	遺跡名	家島港東遺跡	台帳番号	84
所在地	家島	現況	海岸		
種別	散布地	時期	古墳時代		
概略	家島港と接する海岸で濃密に散布する製塩土器を確認。2022年の踏査により、遺物を採取している。2022年の踏査では港湾施設の石積の裏込土に製塩土器片が多量に含まれる状況を確認しており、現位置を保った資料かどうかの判断がつかなかった。製塩土器に混じり須恵器甕の散布を確認した。製塩土器は外面ユビナデ・ユビオサエ、内面具殻状痕による調整のもののみで、備讃Ⅵ式のものと考えられる。1982(昭和57)年に「家島港東浜」として踏査時採集資料が保管されているが、この資料でも製塩土器は備讃Ⅵ式のもののみで、これに須恵器蓋坏・甕や土師器坏などが採取されている。正確な採取地点は不明であるが、製塩土器の時期が限られる状況から家島港東遺跡の範疇で採取されたものの可能性が高い。				
調査歴	1982年・2022年 踏査	関連文献			
出土遺物	製塩土器(備讃Ⅵ式)、須恵器蓋坏、甕、土師器坏等				
備考	2022年新規登録				

番号	47	遺跡名	はしもと畑遺跡	台帳番号	34
所在地	家島	現況	畑 海岸		
種別	散布地	時期	古墳時代～古代		
概略	家島港北側の丘陵南側に広がる湾に面した海岸とその奥の後背地に位置する。1961年踏査時には大規模な製塩土器を含む遺跡として評価される。2022年踏査時には6世紀前半～7世紀後半の須恵器蓋坏を若干採取している他、備讃Ⅶ式の製塩土器を集中して採取。家島港東遺跡よりも新しいものが主体と見ていたが、備讃Ⅶ式以前の遺物を含むほか、1982年の踏査で「家島港北浜」として採取された遺物が保管されているが、この資料には備讃Ⅳa～Ⅳc及び備讃Ⅵ～Ⅶまでの製塩土器を確認しており、古墳時代前期～後期までの遺物を伴う。採取した範囲が不明であるが、家島港北側からはしもと畑遺跡まで約300mにわたり浜が続いており、位置的にこれ全体を指している可能性がある。少なくとも、家島港東側での製塩土器とそれよりも北側の製塩土器については主たる時期に差があるとみてよいと考える。				
調査歴	1961年・1982年・2022年 踏査		関連文献		
出土遺物					
備考					

番号	48	遺跡名	家島北西浜遺跡	台帳番号	85
所在地	家島	現況	海岸		
種別	散布地	時期	中世		
概略	はしもと畑遺跡の北西で確認した遺跡。はしもと畑遺跡との間には南西に突き出した岬が存在。遺物点数は多くないが、比較的残存状況が良好なものを確認。中世が主体となると思われる。なお、浜中央付近に矢穴の開いた長軸約1.2m、短軸約0.3m、高さ約0.2mの規模で砂から露出する石材を確認。近隣に江戸時代の石切丁場が存在する可能性がある。				
調査歴	2022年踏査		関連文献		
出土遺物	須恵器片・土師質土器坏・カマド・土錘				
備考	2022年新規登録				

向島

番号	49	遺跡名	大福浦遺跡	台帳番号	42
所在地	向島	現況	後背地 海岸		
種別	散布地	時期			
概略	向島北側にある大福浦と呼ばれる北向きの湾に面した砂浜及び後背地に所在。1961年・1973年の踏査で製塩土器の他、須恵器・土師器の散布が確認されていた。2022年の踏査では出口を堰き止められ水没した後背地への立ち入りが出来ず、現況確認は出来ず。浜についても遺物の散布をほとんど認められず。				
調査歴	1961年・1973年・2022年 踏査		関連文献		
出土遺物	須恵器・土師器・製塩土器（いずれも時期不明）				
備考					

番号	50	遺跡名	猫ノ鼻古墳	台帳番号	2
所在地	向島	現況	丘陵		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	向島南端に突き出す猫ヶ鼻に立地する古墳。国盛社の境内にあり、1961年段階で既に封土が流れ箱式石棺が露出していたようである。1973年の踏査その後、1984（昭和59）年に撮影された国盛社の写真では箱式石棺は確認できず。現在、社の東辺と南辺に立てられている石が石棺材の可能性あり。				
調査歴	1961年・1973年踏査		関連文献		
出土遺物	—				
備考	遺跡登録時に岬の名前を誤記した可能性。1973年作成の遺跡カード及び町史には「猫ヶ鼻古墳」で記載される。				

番号	51	遺跡名	アババ遺跡	台帳番号	41
所在地	向島	現況	海岸		
種別	散布地	時期			
概略	過去の踏査で製塩土器の包含層が確認されている。1973年段階の踏査で包含層は痕跡程度となっていたようで、2022年踏査ではわずかに土器片が確認できる程度であった。				
調査歴	1961年・1973年・1982年・2022年踏査		関連文献		
出土遺物					
備考					

井島

番号	52	遺跡名	戸尻鼻遺跡	台帳番号	63
所在地	井島	現況	山林		
種別	散布地・墓	時期	旧石器、弥生～古墳時代		
概略	井島北東端の戸尻鼻の稜線上に位置する遺跡。稜線付近を岡山との県境が通り、両県にまたがる遺跡である。丘陵頂部に旧石器、弥生～古墳時代の遺物が散布する他、握り拳大～人頭程度の花崗岩亜角礫～亜円礫からなる集石を現況で4基確認した。礫は基本的に平面的な分布を示すが、二段ほどの石組みをなすところも観察できる。下草類で確認できる場所が少ないが土砂の流失に伴い構成礫は遊離しつつあるように窺える。また、井島内には四国八十八カ所の写し霊場があり石仏が祀られるが、石仏を据え付ける台として集石が利用されており、改変を受けている可能性もある。				
調査歴	1961年・2022年	踏査	関連文献	直島町役場	1990
出土遺物	石鎌・剥片（直島町役場ロビー展示）				
備考					
番号	53	遺跡名	一本松古墳	台帳番号	29
所在地	井島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	井島最高点から西北西に下る尾根筋上に立地する。直径約13mの円墳。幅約0.7mの周溝を持つ。埋葬施設は、南に開口する片袖式の横穴式石室。石室は玄室の幅約1.6m、長さ約3.4m、高さ約1.4mを測り、羨道は幅約1.2m、長さ約4mを測るが天井部が無い他、左側壁の石材も抜き取られている。岡山県境に位置し、岡山県側では「石島西1号墳」として登録される。				
調査歴	1961年・1973年・2022年	踏査	関連文献	直島町役場	1990
出土遺物					
備考					
番号	54	遺跡名	大浦台遺跡	台帳番号	83
所在地	井島	現況	山林		
種別	散布地	時期	縄文時代早期		
概略	島の最高所から西へ下った尾根筋の先端に立地。通称「大浦」の南側。比較的平坦な尾根筋上に遺物の散布を確認。トレンチ調査にて縄文時代早期の押型土器の出土が確認されている。				
調査歴			関連文献	間壁	1981
出土遺物	縄文土器（早期押型文）				
備考	2022年新規登録				
番号	55	遺跡名	なか鼻古墳群	台帳番号	28
所在地	井島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	井島西岸中央やや南寄りの通称「なか鼻」に立地。箱式石棺2基を確認。並列もしくは重複関係にあるとみられ、いずれも北側小口が立地する丘陵の浸食に伴い削剥される。主軸はN73°Wを測り、南側の石棺の方が残存度が低い。残存長約1.5m、残存幅約0.6mを測る。床面は確認できておらず、見かけの高さは約0.1mである。北側の石棺は残存長約1.3m、残存幅約0.4mを測る。床面は確認できておらず、見かけの高さは約0.1mである。両者の東側小口の板石はほぼ直線的に並んでおり、2基の箱式石棺ではなく、小規模な1基の横穴式石室である可能性を含む。埋葬施設近辺では出土遺物は確認できず、北側の小規模な浜で土師器の小片を、南側の浜で須恵器片を採取しているが古墳との関係は不明。				
調査歴			関連文献		
出土遺物					
備考					
番号	56	遺跡名	石島山遺跡	台帳番号	88
所在地	井島	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器～縄文時代		
概略	井島最高所となる通称「石島山」の頂上に立地。最高所を囲む標高150mの等高線付近は比較的平坦で、ここを中心にサヌカイト製石器が散漫に散布する状態を確認。散布する石器は小型のナイフ形石器に分類できる可能性のある二次加工ある剥片の他に、小剥片並びに碎片が認められる。その帰属時期は不明であるが、過去の採取資料中に角錐状石器や石鎌が含まれることから、旧石器～縄文時代のものである可能性が高い。				
調査歴	2022年	踏査	関連文献		

出土遺物 サヌカイト碎片・剥片
備考 2022年新規登録

番号	57	遺跡名	石島山南遺跡	台帳番号	92
所在地	井島	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器～縄文時代		
概略	石島山遺跡から南へ約500mの標高約120m付近の丘陵頂部の平坦面上に立地。東西約200m、南北約100m程の範囲内に土器片やサヌカイト製石器が散漫に散布。サヌカイト製石器にはナイフ形石器が含まれる。				
調査歴	2022年踏査	関連文献			
出土遺物	土器片・サヌカイト製石器類				
備考	2022年新規登録				

番号	58	遺跡名	鞍掛鼻遺跡	台帳番号	39
所在地	井島	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器～古墳時代		
概略	北側の山塊から南端にY字状に張り出す鞍部及び南端稜線上に立地。昭和29・30年に北側山塊から下る鞍部の付け根付近を発掘調査。発掘調査を実施した地点の周辺や鞍部の南方で比較的まとまった資料が散布する状況を確認。概ね7カ所において数mの範囲内に石器類がまとまって露出しており、土中に高い密度で遺物が含まれていることを予測させる。北側のやや勾配の強い部分は資料が動いた状態でまとまった可能性があるが、南側鞍部は比較的平坦で、大きな移動が無い状態での埋没であると想定できる。				
調査歴		関連文献	鎌木 1957 他		
出土遺物	ナイフ形石器・尖頭器・細石刃核・細石刃・石鏃等				
備考	昭和29・30年の調査報告により「井島遺跡」と紹介されており、学史的にはその名の方が知られる。				

番号	59	遺跡名	鞍掛浜遺跡	台帳番号	40
所在地	井島	現況	山林		
種別	製塩遺跡	時期	古墳時代		
概略	井島西岸の南端の浜に立地。浜の後背地と東側にある丘陵の裾との境付近に製塩土器の包含層が形成。かつては炉様のものが確認できたようであるが、現況ではわずかに遺物の集中する場所が確認できる程度である。				
調査歴	1961年・1973年・2022年	踏査	関連文献		
出土遺物	製塩土器（備讃Ⅵ式）				
備考					

番号	60	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第1地点）	台帳番号	89
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	一本松古墳の南東約200mの丘陵稜線上に立地。クレーター状の採掘坑の周辺に矢穴石を散見。				
調査歴	2022年	踏査	関連文献		
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	61	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第2地点）	台帳番号	90
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	鞍掛鼻遺跡の北約600mの丘陵稜線上に立地。種石・端石等の他に、調整石がまとまって残置され、そのいくつかに井の字の中に点を配置した刻印を認める。				
調査歴	2022年	踏査	関連文献		
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	62	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第3地点）	台帳番号	91
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	戸尻鼻遺跡の南約100mの丘陵東斜面に立地。種石や端石などが確認できる。				

調査歴 2022年 踏査

関連文献

出土遺物

備考 2022年新規登録

番号	63	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第4地点）	台帳番号	93
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	「井島石切丁場遺跡（第2地点）」の東約50mの丘陵頂部から南東へ延びる稜線にかけて立地。種石が点在する他、切り出しに伴い発生した端石やコッパが標高約60m付近までの尾根筋南面の斜面上に多数散乱する。稜線頂部の種石には、十曜文と見られる刻印が確認できる。なお、頂部周辺でサマサイト製石器の散布を確認。旧石器時代～縄文時代の遺跡と重複している可能性がある。				
調査歴	2022年 踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	64	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第5地点）	台帳番号	94
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	「井島石切丁場遺跡（第4地点）」の北東約80mの丘陵稜線上に立地。標高約70m付近の稜線上にあり、第4地点とは谷を挟んだ対面に位置する。稜線頂部から東方向へ派生する尾根筋に種石や端石などが確認できる。				
調査歴	2022年 踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	65	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第6地点）	台帳番号	95
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	井島石切丁場遺跡（第2地点）から北へ約400mの地点の標高約120m付近にある二つのピークの西側の平坦面上に立地。石島山南遺跡の範囲と重複する。切り出しに伴うクレータ状の地形の外縁部を中心に矢穴石を伴う残石が確認できるほか、作業に伴い生じたコッパがクレータ底部に確認できる。				
調査歴	2022年 踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	66	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第7地点）	台帳番号	96
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	井島石切丁場遺跡（第6地点）から北東へ約200mの地点のやや狭い尾根筋上に立地。標高約110m付近の稜線南側の斜面上に種石を確認。				
調査歴	2022年 踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

番号	67	遺跡名	井島石切丁場遺跡（第8地点）	台帳番号	97
所在地	井島	現況	山林		
種別	生産遺跡（石切丁場）	時期	江戸時代		
概略	井島石切丁場遺跡（第6地点）から北東へ約100mの地点で、第7地点と同じ北東へ延びるやや狭い尾根筋上にあり、第7地点とのほぼ中間点に位置する。稜線を挟んだ西側斜面と東側斜面にそれぞれ矢穴石の分布を確認。比較的矢穴石の分布は散漫に見える。				
調査歴	2022年 踏査	関連文献			
出土遺物					
備考	2022年新規登録				

葛島

番号	68	遺跡名	葛島 A 古墳群	台帳番号	60
----	----	-----	----------	------	----

所在地	葛島	現況	山林
種別	古墳	時期	古墳時代
概略			
調査歴	1973年度 分布調査 1974年 発掘調査	関連文献	香川県教育委員会 1974
出土遺物	3号棺 ガラス小玉2、4号棺 小玉5・勾玉1・緑色凝灰岩製管玉5、10号棺 ガラス小玉134・管玉9、13号棺 ガラス小玉1・土製丸玉96・鉄鏃1、14号棺 鉄鏃3・須恵器蓋坏2（蓋1・身1）、16号棺 滑石製紡錘車1・銅環1		
備考	1974（昭和49）年に行われた島の緑化事業に伴う発掘調査により、2基の竪穴式石室と14基の箱式石棺が確認された。終了後の埋め戻し以降、植樹された木の成長以外、大きな変化はないと考えられる。		
番号	69	遺跡名	葛島B古墳群
台帳番号	61		
所在地	葛島	現況	山林
種別	古墳	時期	古墳時代
概略			
調査歴	1974年発掘調査	関連文献	香川県教育委員会 1974
出土遺物	5号棺 刀子1、8号棺 刀子1・鉄鏃1、15号棺 刀子1、23号棺 鉄鏃17、25号棺 刀子1・鉄鏃4		
備考	1974年の発掘調査で25基の箱式石棺が確認されている。2021年度に下草がやや少なく接近しやすい4号墳・5号墳について状況を確認。A古墳群同様、調査後埋め戻されているため、詳細な地点は不明であったが、土砂の流出の痕跡は認められず、旧状が保たれていると想定できる。		
番号	70	遺跡名	葛島C古墳群
台帳番号	62		
所在地	葛島	現況	山林
種別	古墳	時期	古墳時代
概略			
調査歴	1974年発掘調査	関連文献	香川県教育委員会 1974
出土遺物	3号棺 刀子1		
備考	2021年度踏査では現地の状況確認できず。		
番号	71	遺跡名	葛島北浜遺跡
台帳番号	46		
所在地	葛島	現況	海岸
種別	散布地か	時期	
概略			
調査歴		関連文献	
出土遺物			
備考	昭和40年代のものと考えられる遺跡地図では葛島A古墳群の乗る丘陵の北側の浜を指しているが、実態不明。『葛島』にも記載がなく、その後登載された遺跡と考えられる。2021年踏査時には明確に遺物の存在は確認できず。		
番号	72	遺跡名	葛島東浜遺跡
台帳番号	47		
所在地	葛島	現況	海岸
種別	散布地	時期	弥生時代～古墳時代
概略	1961（昭和36）年踏査時は「葛島師楽式遺跡」、1983（昭和48）年踏査時は「葛島遺跡Ⅱ」として記録される。現在、県遺跡地図上では「葛島北浜遺跡」の位置にある。		
調査歴		関連文献	香川県教育委員会 1974
出土遺物	町保管資料の中に「東大浜」で採取された資料あり。弥生土器壺・甕、製塩土器（備讃Ⅳ式・Ⅵ式）		
備考	2021年踏査時に少量の土器散布を確認。浜の背後にある後背地が本来の中心部と思われるが、下草の繁茂により、詳細内容は確認できず。		
番号	73	遺跡名	葛島南浜遺跡
台帳番号	45		
所在地	葛島	現況	海岸
種別	散布地	時期	旧石器～弥生、奈良
概略			
調査歴		関連文献	
出土遺物	少量の遺物散布を確認。製塩土器と思われる小片の他、8世紀代の須恵器坏やサスカイト製石器を確認した。		
備考			

番号	74	遺跡名	葛島遺跡	台帳番号	57
所在地				現況	山林
種別	散布地			時期	旧石器～弥生
概略	県遺跡地図上には地点記載なく、一覧上に記載あるのみ。				
調査歴	1961年・1973年 分布調査		関連文献		
出土遺物					
備考	島南半部の丘陵尾根のうち、東側へ派生する標高45m付近に相当。1961(昭和36)年踏査時の記録では「鞍部にあたる位置」に立地し、「石器散布。土器を伴わない状況が確認されている。石器は「ナイフ形石器・石鏃・スクレーパー状石器」が確認されている。『葛島』掲載の遺跡分布図内の「葛島遺跡I」が該当する。1973(昭和48)年に行われた分布調査でも上記と同様の資料が採取されており、町役場のロビーにおいて展示されている。				

荒神島

番号	75	遺跡名	荒神島古墳	台帳番号	30
所在地	荒神島			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	荒神島北岸の湾入した入江東側に突き出る小丘陵の頂部に位置する古墳。東西方向に主軸を持つ箱式石棺を埋葬施設として持つ。古墳の乗る小丘陵は波の浸食が著しく、西側が大きく削られ、石棺の西側小口が既に失われている。過去の調査で墳丘の裾部に2列の石列が確認されており、1辺約8mの方墳であるようだ。既に盗掘を受けており、遺物は確認できていない。今回の踏査では箱式石棺の残存は確認できたが、石列については腐植土に覆われており、確認できていない。				
調査歴			関連文献 直島町役場 1990		
出土遺物					
備考					

番号	76	遺跡名	荒神島遺跡	台帳番号	55
所在地	荒神島			現況	山林
種別	祭祀遺跡			時期	古墳時代～古代
概略	荒神島北岸の西側丘陵の谷出口付近と、その東側の尾根を越えた次の尾根の東斜面上にある谷頭状の平坦面の2地点が確認できている。(詳細位置は第3章第2節 第8図参照)				
調査歴	1971年 直島町教育委員会・香川県教育委員会 1960年・1981年 岡山大学 発掘調査		関連文献 瀬戸内海歴史民俗資料館 1979		
出土遺物					
備考					

番号	77	遺跡名	荒神島西丘陵遺跡	台帳番号	82
所在地	荒神島			現況	山林
種別	散布地			時期	旧石器～縄文時代
概略	1981年の岡山大学踏査などで島の稜線上に旧石器～縄文時代の遺物が散布することが確認されている。県遺跡地図上に「旧石器分布」の記載のみあり、遺跡登録はなかった。西側丘陵の最高点から南東方向へ延びる稜線上で遺物の散布を確認。時期不明であるが、最高点に建造された鉄塔の工事時に周辺を伐開した後、工事後に植林を実施したとのことで、植林時の植え付け穴掘削などで遺物が遊離している。				
調査歴	1981年 岡山大学 踏査、2021・22年 踏査		関連文献		
出土遺物	サヌカイト剥片・碎片				
備考	2022年新規登録				

番号	78	遺跡名	荒神島南浜遺跡	台帳番号	86
所在地	荒神島			現況	山林
種別	散布地			時期	縄文時代
概略	1994年踏査で縄文時代の遺物散布が確認されている。県遺跡地図上で範囲のみ提示されていた。				
調査歴			関連文献		
出土遺物	1994年時点の遺物は不明。2022年踏査では遺物採取なし。これより下の海浜部でサヌカイト製石器を少量採取。時期を判断する土器類は確認できず。				
備考	2022年新規登録				

直島本島

番号	79	遺跡名	重石遺跡1	台帳番号	33
所在地	重石	現況	山林		
種別	散布地	時期			
概略	海に向かって突出した丘陵上。石器の散布地。				
調査歴	1961（昭和36）年	分布調査		関連文献	
出土遺物	小型ナイフ形石器、小型縦長剥片（直島町資料館蔵）				
備考					
番号	80	遺跡名	重石遺跡2	台帳番号	70
所在地	重石	現況	砂浜		
種別	散布地	時期			
概略	浜前面に製塩土器細片が散布。				
調査歴	1973（昭和48）年	分布調査		関連文献	
出土遺物	製塩土器片、須恵器				
備考					
番号	81	遺跡名	重石1号墳	台帳番号	8
所在地	重石	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳		
概略	1961年踏査時は封土流失し、箱式石棺露出。長軸1.72mの記録のみ。2022年踏査では場所の確認できず。				
調査歴				関連文献	
出土遺物					
備考					
番号	82	遺跡名	重石2号墳	台帳番号	9
所在地	荒神島	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳		
概略	1961年踏査時は封土流失し、箱式石棺露出。長軸1.14mの記録のみ。2022年踏査では場所の確認できず。				
調査歴				関連文献	
出土遺物					
備考					
番号	83	遺跡名	すくぼ下遺跡	台帳番号	53
所在地	八日山	現況	宅地		
種別	散布地	時期	古墳～平安時代		
概略	住宅の石垣下の土層より土器包含層の断面露出、土師器・有釉土器の日常生活用具破片出土。				
調査歴	1973（昭和48）年	分布調査		関連文献	
出土遺物	土師器・有釉土器（施釉陶器か）				
備考	町保管資料中に該当する資料確認できず。また、遺跡の詳細位置が確認できたのが踏査終了後であったため、現地の実見はできていない。なお、『直嶋旧跡順覧図会』にある「高田浦全図」には本村から御恵浜のあたりまで描かれているが、御恵浜の南側水路を挟んだ対岸に「クスホ鼻」の記載があることから、一帯は「クスホ」もしくは「クスボ」と呼称されていたと考えられる。また、本文中にも「本村乾の海岸」に「公洲方」の地名があり、古くは「公住方」と表記され、領主であった三宅左京大夫重行の居住地であったことが記される。「クスホ」の漢字表記が「公洲方」となるのだろう。さらに、同所に「穴居跡」があり、「文化年中に掘埋てみえ」なくなったが、「古器數多出」たことが伝わっていると記される。				
番号	84	遺跡名	八日山古墳	台帳番号	1
所在地	八日山	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	消滅				
調査歴				関連文献	

出土遺物

備考 かつては残石と想定されるものがあつたようであるが、2021 年度踏査ではその痕跡も確認できず。

番号	85	遺跡名	八日山城跡	台帳番号	64
所在地	八日山			現況	山林
種別	山城			時期	中世
概略	丘陵先端に位置するとされる。山頂部平坦地を中心に何段もの削平地が取り巻くが、畑化に伴うもので、遺構は、未確認。				
調査歴	平成 13 年踏査			関連文献	香川県教育委員会 2003

出土遺物

備考

番号	86	遺跡名	敬光院増宥墓碑	台帳番号	80
所在地	本村			現況	山林
種別	墓			時期	中世
概略					
調査歴				関連文献	

出土遺物

備考

番号	87	遺跡名	高原城跡（直島城跡）	台帳番号	73
所在地	本村			現況	山林・公共施設用地・寺社境内地
種別	城跡			時期	中世
概略					
調査歴	昭和 59 年発掘調査、平成 13 年・令和 4 年踏査			関連文献	香川県教育委員会 2003

出土遺物

備考

番号	88	遺跡名	高原氏墓標群	台帳番号	79
所在地	本村			現況	墓地
種別	墓			時期	
概略	極楽寺の南側丘陵裾				
調査歴				関連文献	

出土遺物

備考

番号	89	遺跡名	桃山教員宿舎古墳	台帳番号	31
所在地	本村			現況	山林
種別	古墳			時期	古墳時代
概略	1957（昭和 32）年に教員宿舎建設工事中の不時発見により、組み合わせ式箱式石棺が検出された。町教委担当者により調査が行われ、頭蓋骨の一部が出土するが、詳細な記録が無い。				
調査歴	1957 年、2021 年			関連文献	直島町役場 1990

出土遺物

備考

番号	90	遺跡名	八幡神社遺跡	台帳番号	56
所在地	字高田浦			現況	山林
種別	包含層			時期	中世
概略	神社境内の参道の切り通しに包含層露出。				
調査歴	1973 年・2022 年 分布調査			関連文献	

出土遺物 土師質土器

備考

番号	91	遺跡名	城山城跡（丸山城跡）	台帳番号	86
所在地	本村	現況	山林		
種別	城跡	時期	中世		
概略	城跡とされる場所に石塁跡と考えられる石組みがあるとされる。平成13年度踏査で確認できず。				
調査歴	平成13年踏査	関連文献	香川県教育委員会	2003	

出土遺物

備考 今回の踏査では現地へ到達できていない。

番号	92	遺跡名	積浦遺跡	台帳番号	75
所在地	積浦	現況	畑		
種別	港湾関連遺跡	時期	中世		
概略	町史編纂事業（1次 直島町）及び県道北風戸積浦線離島道路特殊改良第一種事業（2次 県）、地域総合調査研究事業（3次直島町・県）に伴い、発掘調査を実施。1次調査では柱穴・土坑等の遺構と共に、中世を中心として弥生時代～近世の遺物の出土を確認。弥生時代～古墳時代前期頃の製塩が窺えるほか、中世の集落の存在が想定できる濃密な遺物の出土が確認できた。2次調査では積浦湾に面した砂堆の裏側に形成された潟湖の出口付近において、中世の2時期にわたる港湾施設と考えられる石敷き並びに石積遺構を確認。出土遺物においても、島外からの搬入品を主体とする傾向にあり、港湾関連施設としての遺跡の在り方を窺わせる。3次調査でも港湾施設の可能性がある礎敷遺構を確認。				
調査歴	1983年（1次 直島町） 2002年9月26日～11月19日（2次 香川県） 2022年6月（3次 直島町・香川県）	関連文献	香川県教育委員会	2003	

出土遺物

備考

番号	93	遺跡名	おかめ鼻遺跡	台帳番号	38
所在地	字地藏山	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器時代～弥生時代		
概略	南方の海上へ突き出す岬の丘陵上				
調査歴	1961年・1973年 分布調査	関連文献			

出土遺物

備考 遺跡台帳上は旧石器時代とされるが、町保管資料内では確認できず。2021年踏査時点では東西からの波蝕により尾根が痩せている。散布地の残存状況は樹木や下草のため確認できず。

番号	94	遺跡名	くらは遺跡	台帳番号	37
所在地	字倉浦	現況	海岸		
種別	製塩遺跡	時期	縄文時代・弥生時代・奈良～平安時代		
概略	砂堆上に製塩土器散布。1958（昭和33）年に岡山大学と直島町による発掘調査が実施され、炉跡等が確認されている。				
調査歴	1958年 発掘調査	関連文献			

出土遺物 縄文土器片、弥生土器片、須恵器片、製塩土器片

備考

番号	95	遺跡名	外が浜遺跡	台帳番号	35
所在地	字横防	現況	海岸		
種別	散布地	時期	縄文時代・古墳～飛鳥時代		
概略	砂堆上に製塩土器を主体とした遺物散布。				
調査歴	1961年・1973年 分布調査	関連文献			

出土遺物 製塩土器片・縄文土器片

備考

番号	96	遺跡名	申山遺跡	台帳番号	54
所在地	字申山	現況	山林		
種別	散布地	時期	旧石器～縄文時代		
概略	宮浦港の南に位置する丘陵上に所在する。石槍・石鏃等が採取されているようであるが、現物不明。				
調査歴		関連文献	三枝 2014		
出土遺物	横長剥片石核				
備考					
番号	97	遺跡名	横防遺跡	台帳番号	36
所在地		現況	海岸		
種別	散布地	時期			
概略					
調査歴		関連文献			
出土遺物					
備考					
番号	98	遺跡名	風戸山西遺跡	台帳番号	87
所在地	風戸山	現況	海岸		
種別	製塩遺跡	時期	弥生時代～古代		
概略	地域総合調査研究事業に伴い分布調査を実施。遺跡は南北約500mの長さを確認し、風戸山から派生する丘陵尾根の一つに分断され、大きく3箇所に分かれる。1979年の踏査で製塩土器を主体とし、古墳時代前期～古代までの遺物が採取されている。2022年に状況確認を目的とした踏査を行い、浜に面した丘陵裾や斜面地などに遺物包含層が残存することが確認できた。				
調査歴	1979年 分布調査（香川県教育委員会） 2022年 地域総合調査研究事業（分布調査）	関連文献			
出土遺物	弥生土器片、須恵器、土師器、製塩土器				
備考	2022年新規登録				
番号	99	遺跡名	風戸山西古墳	台帳番号	98
所在地	風戸山西	現況	山林		
種別	古墳	時期	古墳時代		
概略	『直島町史』に写真が掲載される既知の古墳。風戸山西浜遺跡の南浜と中浜に挟まれた丘陵の稜線先端部に立地。丘陵中軸に平行する残存長約3mを測る1条の列石を確認した。一辺約10m未満の方墳が想定されているが、残り三辺の列石は不明。墳丘も不明瞭なほか、埋葬施設も確認できなかった。				
調査歴	2021・22年 地域総合調査研究事業（分布調査）	関連文献	直島町役場 1990		
出土遺物					
備考	周辺でわずかながら風化の進んだサヌカイト片を確認しており、旧石器～縄文時代の散布地と重複する可能性がある。2022年新規登録				

第2節 直島町及び県保管資料

ここでは直島町および県で保管されていた資料について報告してゆく。なお、令和3年度及び4年度の分布調査で採取した資料も併せて記載する。なお、石器の石材について、記載がないものはすべてサヌカイトである。

1 喜兵衛島(第2・3・19図)

各浜で遺物が採取されている。第2図1～18は令和3年度の分布調査時に採取したものである。1～3は島の西岸中央付近の浜で採取した。若干広さはあるが奥行きが無く、製塩土器の散布も認められず、他の遺物も希薄である。弥生土器甕1・須恵器坏2・土師質土器足釜3が認められる。4～11はキヘエ北西浜遺跡の前面の浜で採取した。吉備型の土師器甕4の他、須恵器坏蓋5、高坏6、ハソウ7、提瓶8等、6世紀末～7世紀中葉頃までのもののほか、8世紀後半～9世紀前葉頃までの須恵器坏9～11を採取している。概ね備讃Ⅶ式の製塩土器の時期と合致するものが主体であるが、古代のものは過去の調査(『喜兵衛島』刊行会 1999)でも備讃Ⅶ式の製塩土器片と共に似た時期の須恵器が報告されており、規模は不明であるが、製塩活動に伴い残された供膳具と考えられる。12～18はキヘエ北西浜遺跡の東側に隣接する浜で採取した資料である。12～14は瓦器碗、16は瓦器皿、17は土師質土器小皿、15は土師器イダコ壺、18は須恵器高坏である。喜兵衛島では9号墳で和泉産瓦器碗(13世紀前半・中葉)及び土師質土器鍋が、南東浜1区テラスでの吉備系土師質土器碗(13世紀中葉)が確認されており、中世の段階での利用が想定できる。第2図19～27は昭和54年に県がキヘエ南東浜遺跡で採集した製塩土器である。口縁部内外面に二枚貝条痕を認めるものが大半だが、ユビナデのものや、外面に格子叩き目を認めるものがある。また、第2図28～33は昭和57年に実施された分布調査により、南東浜東尾根上及び斜面で採取された土器である。28は土師器甕であるが、体部外面を二枚貝条痕の後、指押さえやナデで、内面は二枚貝条痕の後、体部下半を板ナデでそれぞれ調整している。内面の調整は丁寧に施されるが、外面は粘土紐の単位がわずかに観察できる。胎土は19～27のものと同様である。南東浜の奥側にあるテラス上の集落との関係は不明である。

第3図34は直島町で保管されている須恵器提瓶である。出土地点や来歴が不明であるが、展示キャプションに「喜兵衛島古墳出土」とあることから島内のいずれかの古墳からの出土品と考えられる。既往の発掘調査で提瓶を伴う古墳はいくつかあるが、その中で堅穴式石槨を持つキヘエ13号墳から出土したものの形状が当該資料と同一である。6世紀前半期の古墳と考えられ、喜兵衛島の古墳群の中では最も古い時期のものとなるが、他に同時期のものは認められず、未知の古墳があるか、13号墳から出土したものの可能性が高い。蓋石が認められず、調査報告書では木製の蓋であったか石材の抜き取りが行われたためと想定されている。木製蓋が腐朽したか石材が抜き取ら

れた際に、棺内から露出したものが抜き取られたと考えられる。第19図13・14は喜兵衛島で採取された石器で、瀬戸内海歴史民俗資料館に保管されていた。いずれもサヌカイトで、13は石鎌、14は剥片である。

2 屏風島(第4図6～8)

昭和57年に香川県が行った分布調査で採取された資料がある。遺物につけられた札から、屏風島東北端で採取された須恵器甕7と東石棺群から採取された製塩土器8である。いずれも地点が不明であるため、対比が困難であるが、前者は令和3年度踏査中に、島東側の丘陵尾根先端付近で須恵器壺の頸部片を採取していることから、その一帯で採取された可能性がある。東石棺群は県の遺跡台帳に掲載されている屏風島南東古墳群を指す可能性があるが、今回の踏査では詳細確認が出来なかった。

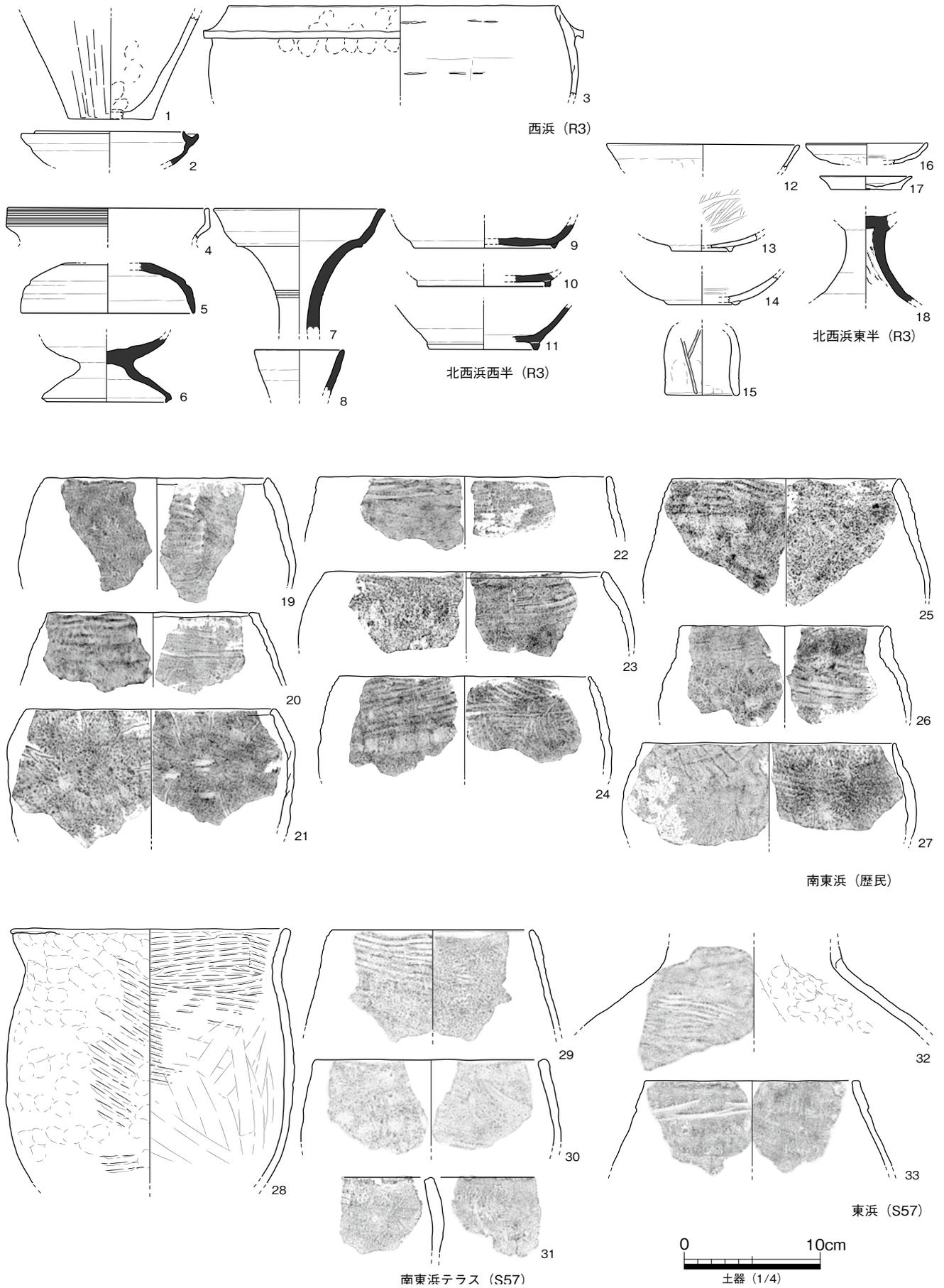
6は屏風島南東浜遺跡で採取した須恵器蓋である。7世紀末葉のものである。周辺に散布する土器片中に備讃Ⅶ式に相当すると考えられる薄手の製塩土器片が一定量含まれており、共に製塩関連の遺跡に伴う遺物であると考えられる。

3 京ノ上臈島(第4図1～5)

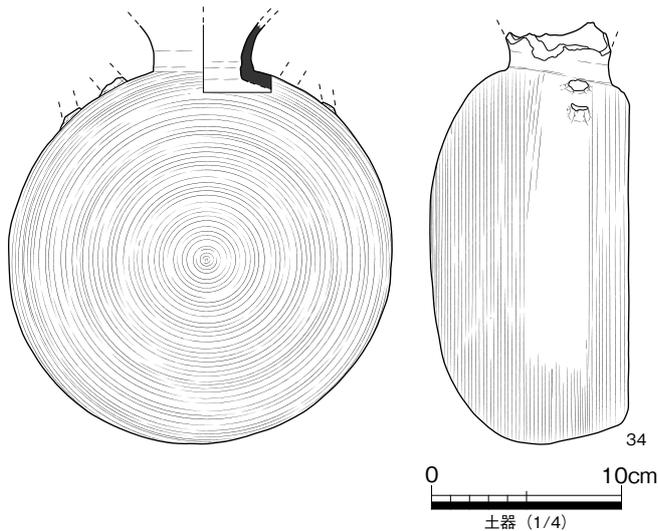
令和3年度分布調査時に京ノ上臈島東浜遺跡で採取した資料である。水磨されたサヌカイト製の横長剥片石核5の他、須恵器甕1、瓦器碗2、白磁碗3・4を図化している。他に図示していないが、近世陶磁や縄文土器片を採取しており、複数の時期にわたる遺物が散布した状態である。

4 家島(第5図・19図)

第5図1～42は昭和57年に採取された資料である。1～24は資料注記に「家島港北浜」とある。6世紀中頃の須恵器蓋坏、壺、甕、高坏、吉備系土師質土器碗、土師質土器鍋と共に、製塩土器が採取される。備讃Ⅳa、Ⅳc、Ⅵ、Ⅶの各型式が確認できる。25～42は資料注記に「家島港東浜」とある。縄文土器深鉢、弥生土器高坏、須恵器蓋坏、須恵器甕、土師器坏、土師器甕、製塩土器が認められる。製塩土器はいずれも備讃Ⅵ式である。第5図45～48は令和4年度の分布調査の際、家島港の東側に所在する「家島港東遺跡」で採取した資料である。須恵器蓋、製塩土器を図示した。現地での所見で、製塩土器は備讃Ⅵ式のみを確認しており、当該期の製塩遺跡と想定していた。前述の家島港東浜の資料も同様であり、同じ地点を指しているものとする。第5図52～65は令和4年度にはしもと畑遺跡で採取した資料である。浜の後背地への立ち入りが困難で、前面の浜で採取したものが主体である。弥生土器広口壺の他、須恵器蓋坏蓋、須恵器坏、土師器鉢、土師質土器碗、製塩土器が確認できる。須恵器坏蓋は、6世紀前葉のものと同様のものが認められる。また、製塩土器は基本的に備讃Ⅶ式が主体と考えられ、家島港東遺跡とは時期差のある製塩遺跡の可能性を考えている。このことから考えると、先に触れた「家島港北浜」の資料については、家島港の北側にある浜から採取したものと見られるが、その浜は連続してはしもと畑遺跡の前面まで伸びていることから、両遺跡の資料が混在している可能性が考えられる。第5図49・50は令和4



第2図 喜兵衛島遺物実測図1



第3図 喜兵衛島遺物実測図2

年度に家島北西浜遺跡で採取した資料で、土師質土器坏および竈である。第5図43・44は直島町資料館に保管される鶴松で採取された須恵器坏蓋と甕体部である。来歴や詳細な採取地点は不明である。概ね6世紀中葉頃のものと考え、鶴松の稜線上には箱式石棺群が存在するため、これらとの関係が想定される。51は家島から北東に陸繋島のように連続する箱島の中間付近の浜で採取した土器である。胎土の状況から縄文土器深鉢と想定する。なお、箱島の稜線上では遺物は確認できていない。

第19図15・16は家島で採取された石器である。15は鶴松鼻で採取された尖頭器である。素材面を大きく残し、基部と表裏共に右側縁に二次加工を施す。16は「鶴松」の注記がある小型の横長剥片石核である。打面調整は施されない。各面交互剥離により、求心的に剥片の剥取が行われる。

5 向島(第4図)

昭和57年の分布調査で採取された資料である。アババ浜で採取された縄文土器深鉢底部9、須恵器甕10、施釉陶器壺11が確認できる。アババ遺跡の出土資料となるが、製塩遺跡の実態が分かる資料は採取されていないようである。また、船着き場の南の浜では土師質土器皿12が採取されている。今回の分布調査では遺物の存在は確認出来ていない。西岸の浜で採取した土師器甕13は古墳時代前期のもの可能性がある。

6 井島(第16・17図)

第16図1～16は鞍掛鼻遺跡で採取されたものである。一部は瀬戸内海歴史民俗資料館に保管されていたもの(1～3、11～13)で、採取地点は不明である。島の南端部ではなく、発掘調査が実施された周辺と考えられる。また、令和4年度に鞍掛鼻遺跡で採取したもの(4～10、14～第17図19)は、採取地点を記録した資料である。1～5はナイフ形石器である。1は石核の底部を取り込んだ横長の有底剥片を素材とした一側縁加工のものと考えられる。下端を欠損する。2は素材剥片の形状が不明で背面側からの二次加工で成形される一側縁加工のものである。先端を欠損す

る。3は縦長剥片を素材とした基部加工のもの判断した。平坦で狭小な打面が残置される。4は鞍掛鼻遺跡地点2の北側で採取した二側縁加工のナイフ形石器である。先端を欠損する他、打面とそれに連続する側縁に二次加工が施されるため、素材の形状は不明である。5は鞍掛鼻遺跡地点2で採取した基部加工のナイフ形石器である。石核底面を背面に留める小型横長剥片を素材とし、打面とその対辺に二次加工を施す。打面はわずかに残置されている。ともに井島型ナイフ形石器の範疇と考える。6は鞍掛鼻遺跡地点3で採取した尖頭器である。下半部を欠損する。調整は外縁部が中心で、器体中央部には素材面が残置される。7～10は石鏃で、7は地点3、8は地点5、9は地点5の西側斜面、10は地点6で採取した。7は凹基式といえるが、あとは平基式といえる。また、7は比較的二次加工が進んだ資料であるが、それ以外は周縁加工のみで素材面が表裏とも残置される。

11～15は横長剥片である。11は複数面から構成される打面を持ち、背面に石核の底面を取り込んだ剥片素材石核に由来するものと考えられる。14・15は鞍掛鼻遺跡地点7で採取したもので、14は受熱しており、ほぼ全面にクラックが認められる。16は鞍掛鼻遺跡地点4で採取した寸詰まりの剥片である。ハリ質安山岩が用いられる。17は鞍掛鼻遺跡地点5で採取した縦長剥片石核である。打面転移を繰り返し、最終的にやや幅広の縦長剥片を剥取したもので、打面や作業面に対する調整は見られない。3のようなナイフ形石器の素材を準備した可能性がある。18・19は細石刃核である。18は地点2の北側で採取した細石刃核である。ハリ質安山岩の分割礫を用いたとみられる。少なくとも10枚以上の細石刃が剥取されている。作業面側からの打面調整が認められるが、下縁調整は確認できない。19は地点4で採取した細石刃核である。礫面を厚く剥ぎ取ったハリ質安山岩の剥片を用い、素材剥片の末端を打面に、剥片の側縁を作業面とし、少なくとも3枚の細石刃を剥取している。打面は側面からの調整がわずかに施される。下縁は素材剥片の打面を残置し、下縁調整は施さない。

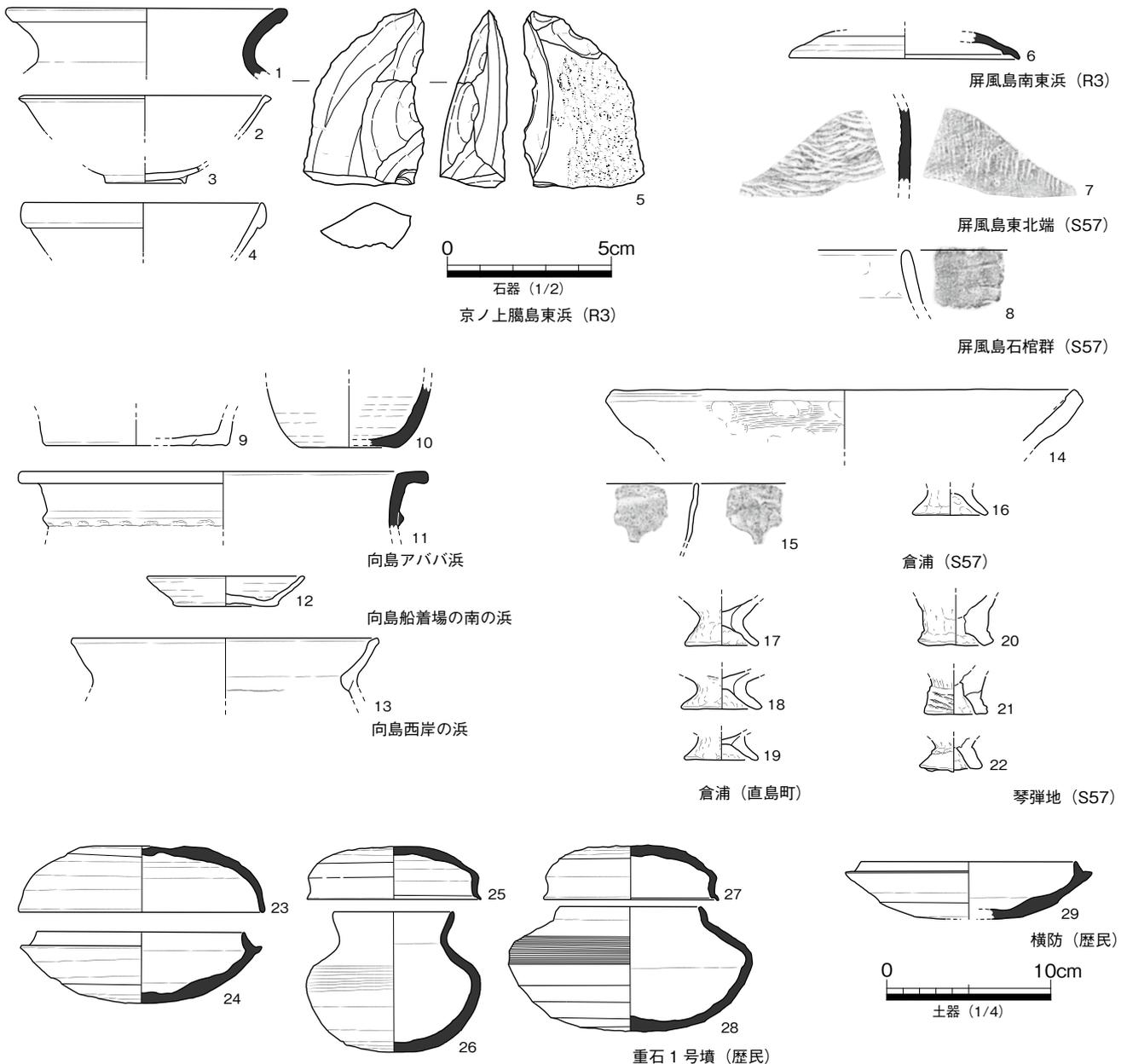
第17図21・23は井島西浜南半部で採取した石鏃・スクレイパーである。東側に接する丘陵から流下したものが、浜で波に洗われたものである。風化面が剥落する。

第17図22・24はなか鼻古墳群から大浦台遺跡にかけての浜で採取した尖頭器とスクレイパーである。尖頭器は転磨が著しく、先端を欠損する。スクレイパーの転磨はあまり顕著ではない。礫面を打面とした横長剥片を素材とし、浅い連続した二次加工で刃部を作り出す。右半は大きく割れ、調整加工に失敗した可能性がある。

第17図20は石島山遺跡の地点5で採取した二次加工ある剥片である。下半部を欠損する。打面側に連続した二次加工が施され、その対辺下部にも小剥離が認められる。

7 葛島(第6・7・19図)

第6図1・2は瀬戸内海歴史民俗資料館から埋



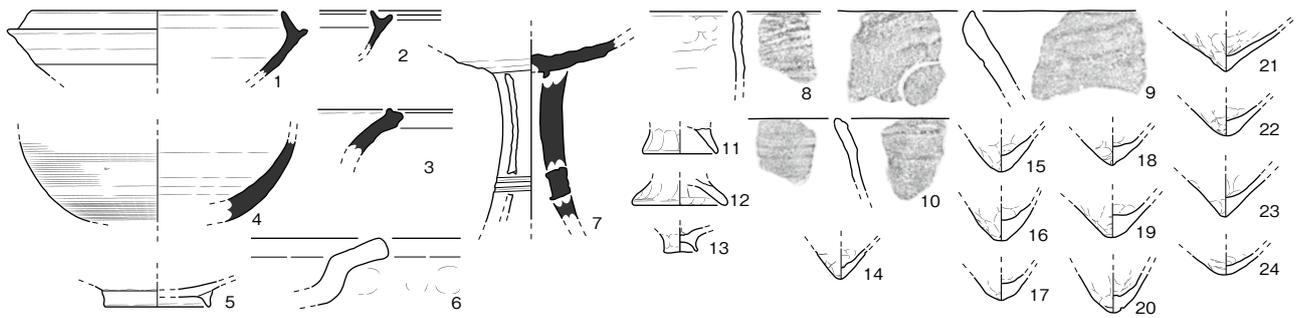
第4図 京ノ上臈島・屏風島・向島・直島島内遺物実測図

蔵文化財センターへ移管した須恵器坏である。出土地点は不明である。第6図3～6は直島町資料館で保管されている須恵器有蓋高坏である。葛島B古墳群の10号墳付近で採取された資料で5世紀後半のものと考えられる。上記の坏2点も形状から同時期のものと考えられる。葛島古墳群はA～Cの各群とも、古墳築造時期を比定しうる資料が限られており、貴重な事例となる。

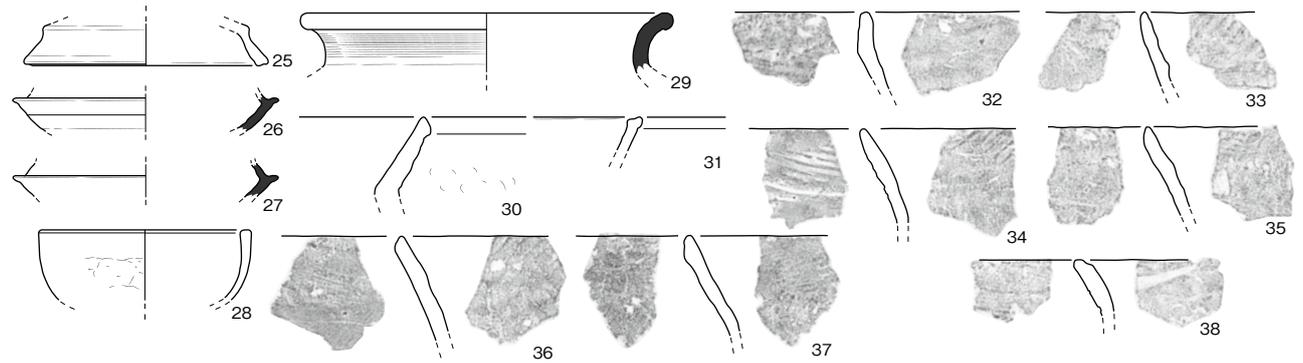
第6図8～第7図35は葛島A～C古墳群出土の鉄製品である。『葛島』（香川県 1974）で報告されたものと未報告のものを図化している。鉄鎌の分類は水野敏典氏の分類（水野 2013）に従った。8～10はA古墳群出土の鉄製品である。8は13号墳出土の長頸鎌である。頸部から茎が残存し、その関部は錆により観察が困難であるが、頸部と茎の太さが異なることから、水野分類角関bと考えられる。9は14号墳出土の鉄鎌である。方頭形のものが2点錆により癒着する。左側のものは

口巻がわずかに残存する。10は長頸鎌の頸部から茎である。口巻と木質が残存する。

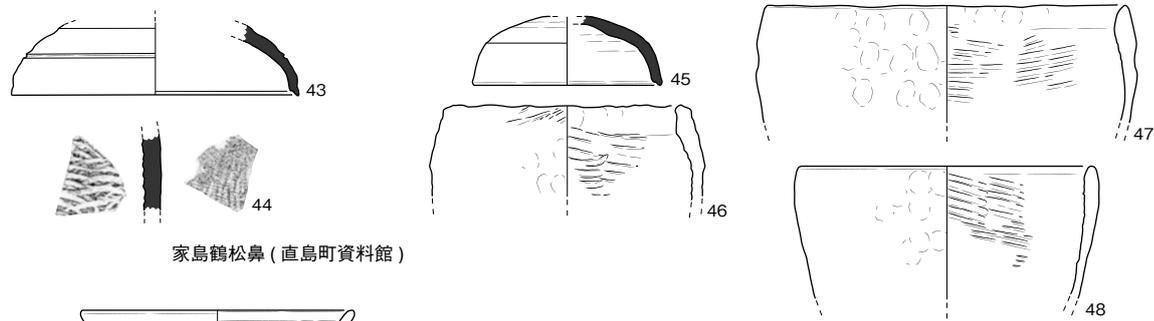
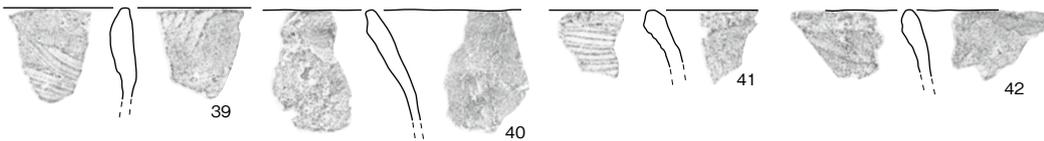
11～32はB古墳群の各古墳出土遺物である。13は5号墳出土の刀子である。11・12は8号墳出土の鉄製品である。11は刀子である。刀身の大半は欠損するが、茎に目釘穴が残存する。12は鉄鎌である。長三角形の鎌身で関はナデ関である。茎部に木質が残る。14～27は23号墳出土の鉄鎌である。細部は異なるが、14～19は長頸鎌で鎌身に腸袂が付くもの、20～25は短頸鎌で鎌身に腸袂が付くものに分類できる。大半が頸部と茎の間に関が認められる。茎部分には木質が認められ、その上端には口巻の繊維と見られるものが残存する。頸部と茎の間の関は木質で観察できないものが多いが、14は水野分類の角関aの可能性が考えられる。25は平面形長三角形でナデ関のものが2点錆により癒着したものである。茎を欠損すると見られる。26は長頸鎌の頸部から



家島港北浜 (S57)

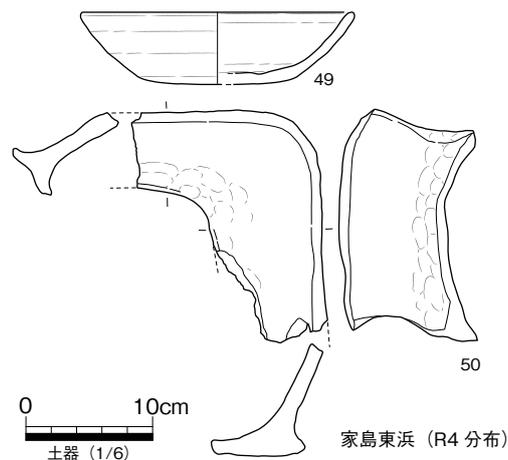


家島港東浜 (S57)



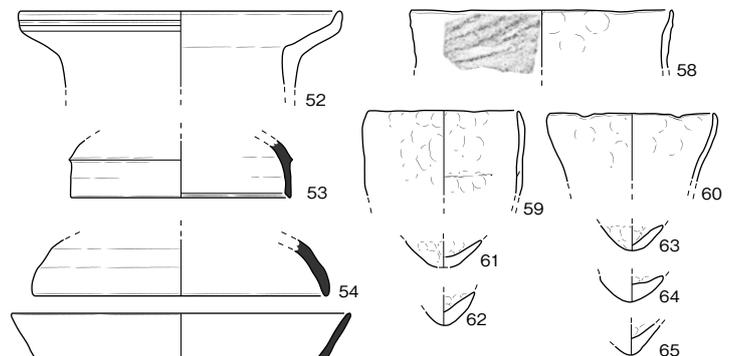
家島鶴松鼻 (直島町資料館)

家島西岸 (R4 分布)



0 10cm
土器 (1/6)

家島東浜 (R4 分布)

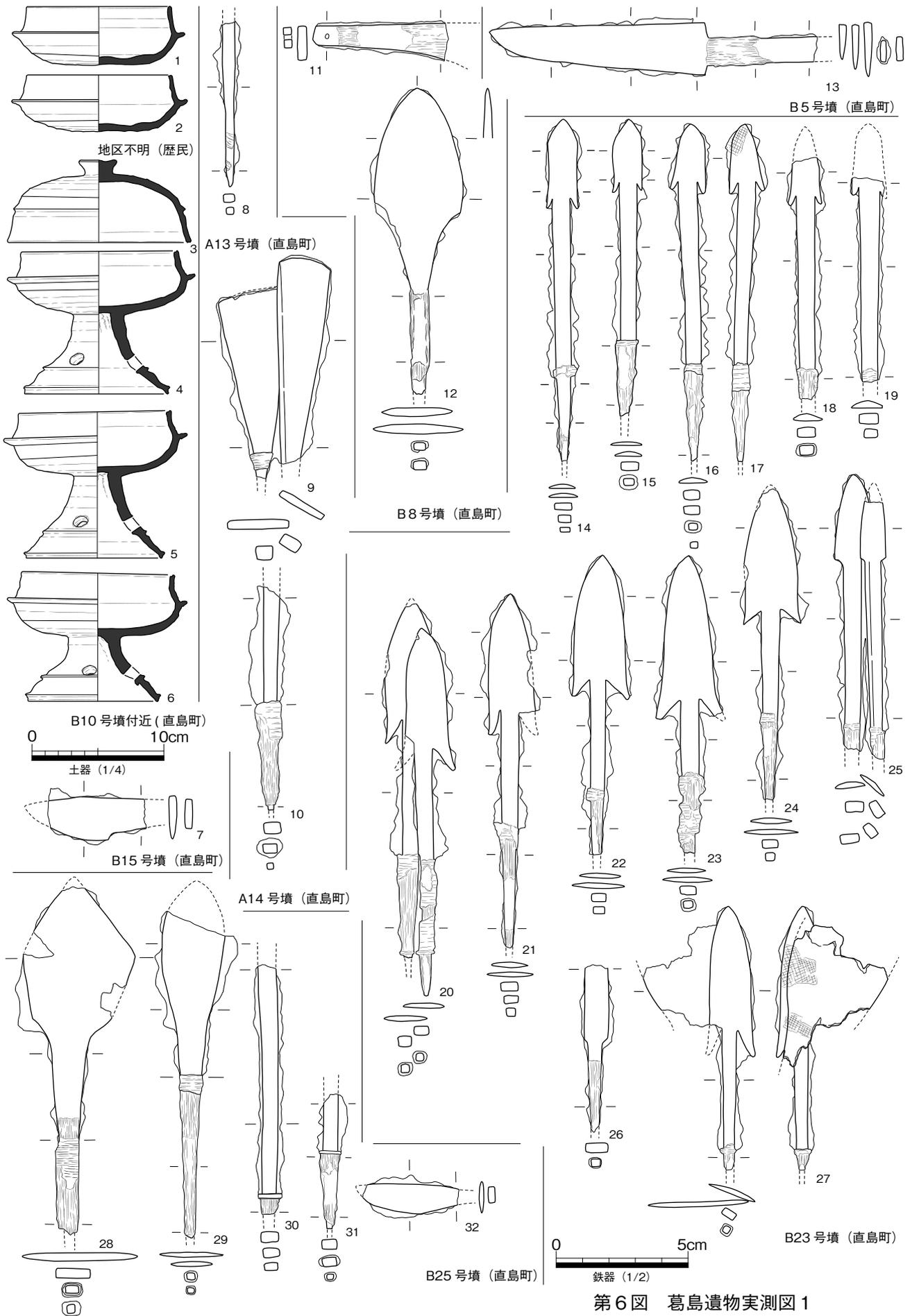


家島はしもと畑遺跡 (R4 分布)

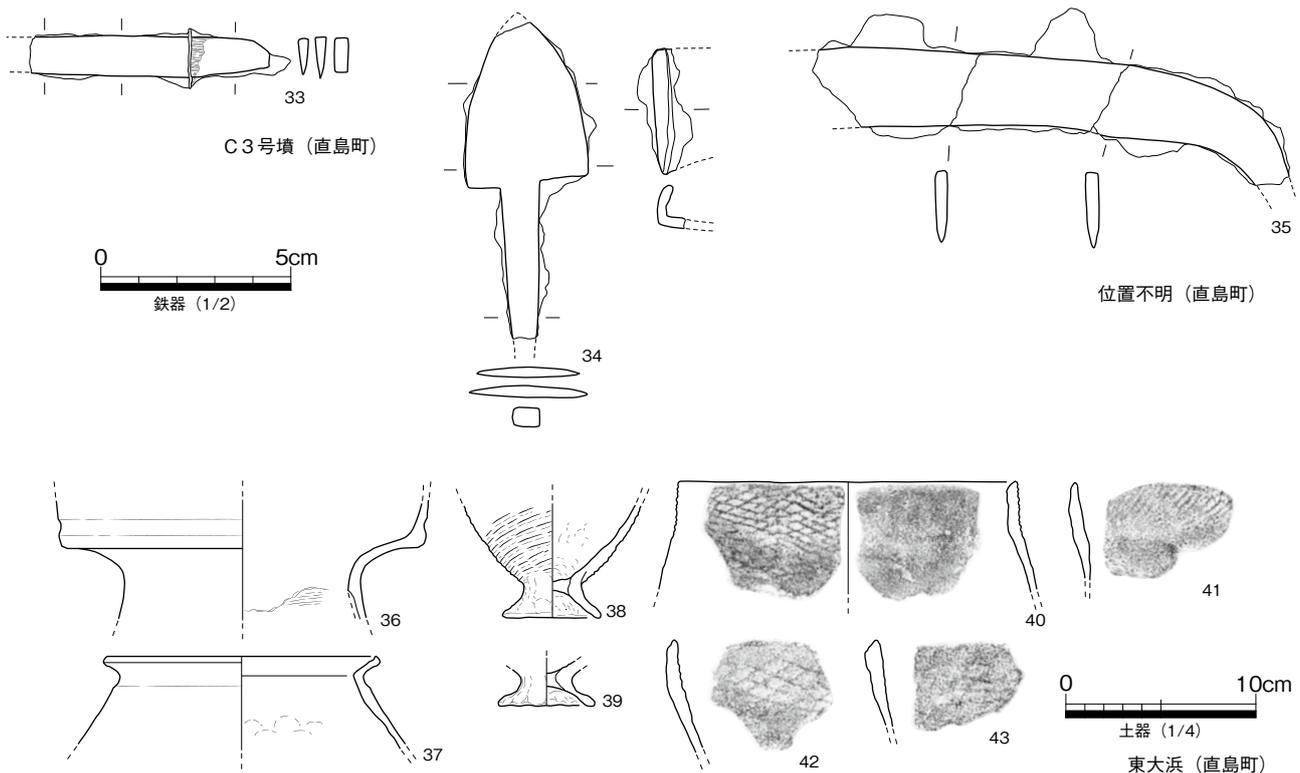
0 10cm
土器 (1/4)

家島と箱島の間浜 (R4 分布)

第5図 家島遺物実測図



第6図 葛島遺物実測図1



第7図 葛島遺物実測図2

茎の部分である。頸部の関はナデ関である。茎に木質が癒着する。27は2点の鉄鎌が錆で癒着したものである。1点は平面形長三角形で腸袂の付く大型のもの、もう1点は欠損が著しいため形状が判別しにくい、鎌身が柳葉形で関がナデ関になる大型のものと考えられる。後者は前者に対し約20°軸が右傾する。28～32は25号墳出土の鉄製品である。28・29は鎌身が残存し、28が柳葉形のナデ関b、29が柳葉形のナデ関aと考えられる。30・31は頸部片である。32は刀子である。刀身のみで茎は欠損する。第7図33はC古墳群3号墳出土の刀子である。茎を欠損する。

第7図34・35は直島町役場保管の鉄鎌及び鎌である。共に古墳群内からの出土であるが、出土位置等は不明である。鉄鎌は先端と茎を欠損する角関のものである。既知の各石棺からの出土品とは形状が異なる。また、鎌も出土地は不明である。

第7図36～43は直島町で保管されている資料で、「東大浜」の注記がある。正確な位置は不明であるが、葛島北浜遺跡もしくは葛島遺跡東浜遺跡のいずれかからの出土と考えられる。37は弥生土器甕である。讃岐東部産と見られる。36は土師器複合口縁壺である。東阿波型のものと考えられる。38～43は製塩土器である。備讃Ⅳ式と備讃Ⅵ式が認められる。後者は外面調整にバリエーションがある。

第18図1～第19図9は葛島遺跡の採取石器である。1は一側縁加工のナイフ形石器である。葛島遺跡の発掘調査報告書に掲載されたものを再図化した。2・3は石鎌である。4は横長剥片に分類した。5は石匙である。横長剥片を素材とし、剥片端部に表裏から二次加工を施し刃部を、対辺

正面右寄りに表裏から抉り込みにより摘みをそれぞれ作り出す。6は二次加工ある剥片である。背面に礫面を留めた寸詰まりの縦長剥片の両側縁の腹面側に二次加工を施す。7は尖頭器に分類した。先端を作り出していると思われるが、正面側右側縁に未加工部が残るほか、厚みを減じる加工がみられないことから、加工途上の可能性が高い。加工途上の折損品か。8は石核に分類した。正面右下半にポジ面がみられ、肉厚の剥片の腹面が分割礫の分割面が残存していると考えられる。表裏とも求心的な剥離で小形剥片を剥取していると思われる。9も石核に分類した。図上端に連続した小剥離を施して尖頭状に成形しているように見えるが、下端の表裏がやや大型の剥離で覆われるものの、かなり肉厚であり、これをもって完成品としたとは考えにくく、大型の剥片素材の石核を転用して尖頭状の石器に作り替える途上とも考えられる。

8 荒神島 (第8～12図)

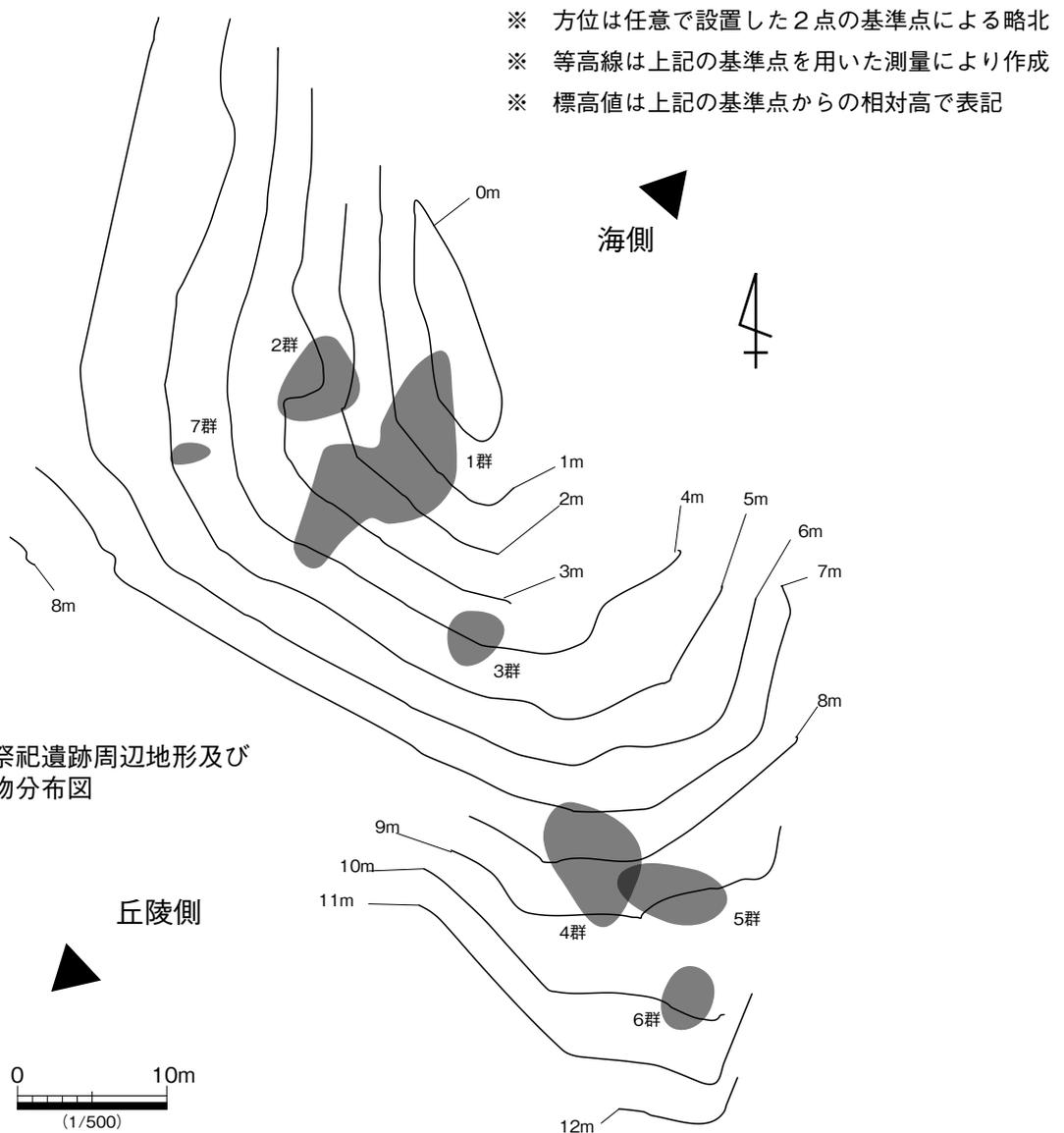
第9図1～20は瀬戸内海歴史民俗資料館から埋蔵文化財センターへ移管した資料である。昭和46(1971)年に直島町と香川県の両教育委員会が実施した祭祀遺跡である荒神島遺跡の発掘調査によるものが中心である。1～5は須恵器蓋坏で、1・2は蓋、3～5は身である。6は須恵器横瓶、7は須恵器甕である。蓋坏は1～3が6世紀前半頃のもの、4は6世紀中頃のもの、5は8世紀前半頃のものと考えられる。8は弥生土器高坏である。9～16は土師器甕である。また、17～20は製塩土器である。

第10図21～40は令和3年度分布調査により採取したものである。この一群については、トー

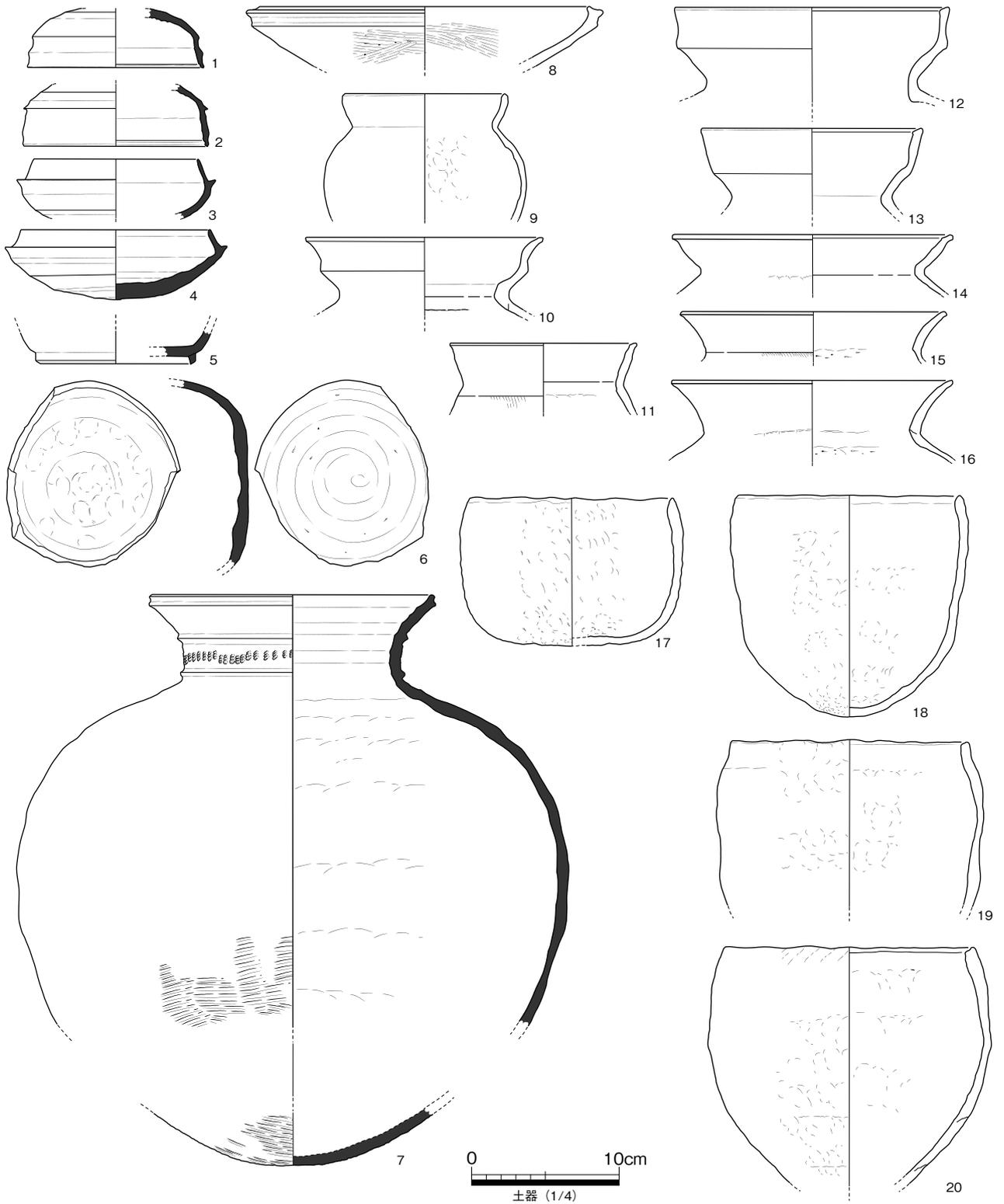


遺跡位置図 (S=1/12,500) 国土地理院発行 1/25,000「宇野」を改変して使用

B 地点 (拡大)



第8図 荒神島祭祀遺跡周辺地形及び遺物分布図

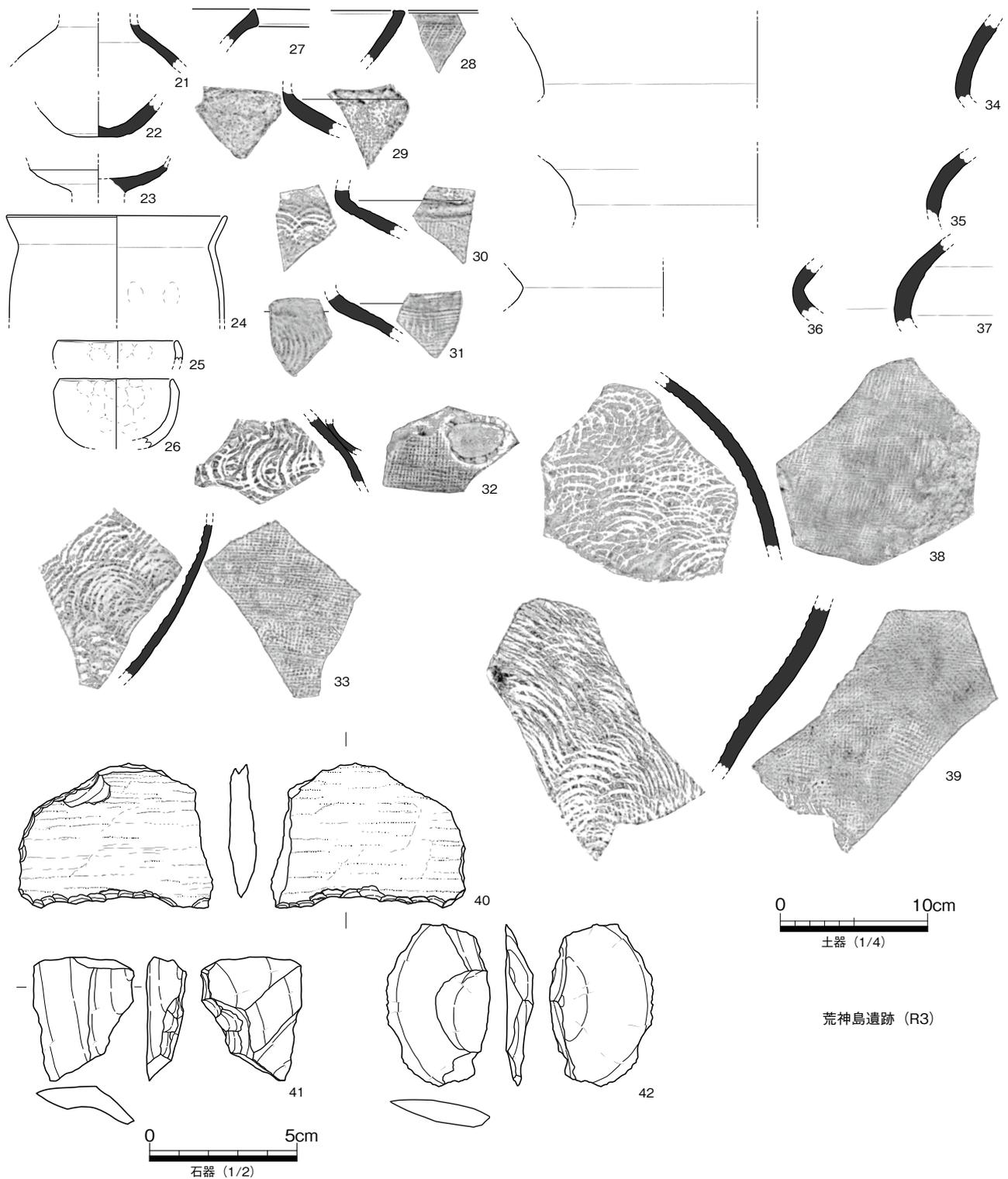


荒神島遺跡 (歴民)

第9図 荒神島遺物実測図

タルステーションを用い、任意の2点による座標系を基準として周辺の測量調査を行った上で、視覚的に認められる1～8群のまとまりの中から、ある程度形状の把握できる資料31点について地点を記録しながら採取した(第8図)。21～23

は第8図4・5群の境界付近から採取した須恵器壺、高坏である。(27・28・30～37)は1群から採取した須恵器甕である。29は2群、38は3群、39は6群からそれぞれ採取した須恵器甕である。各群ともに須恵器を主体としていたが、24～26

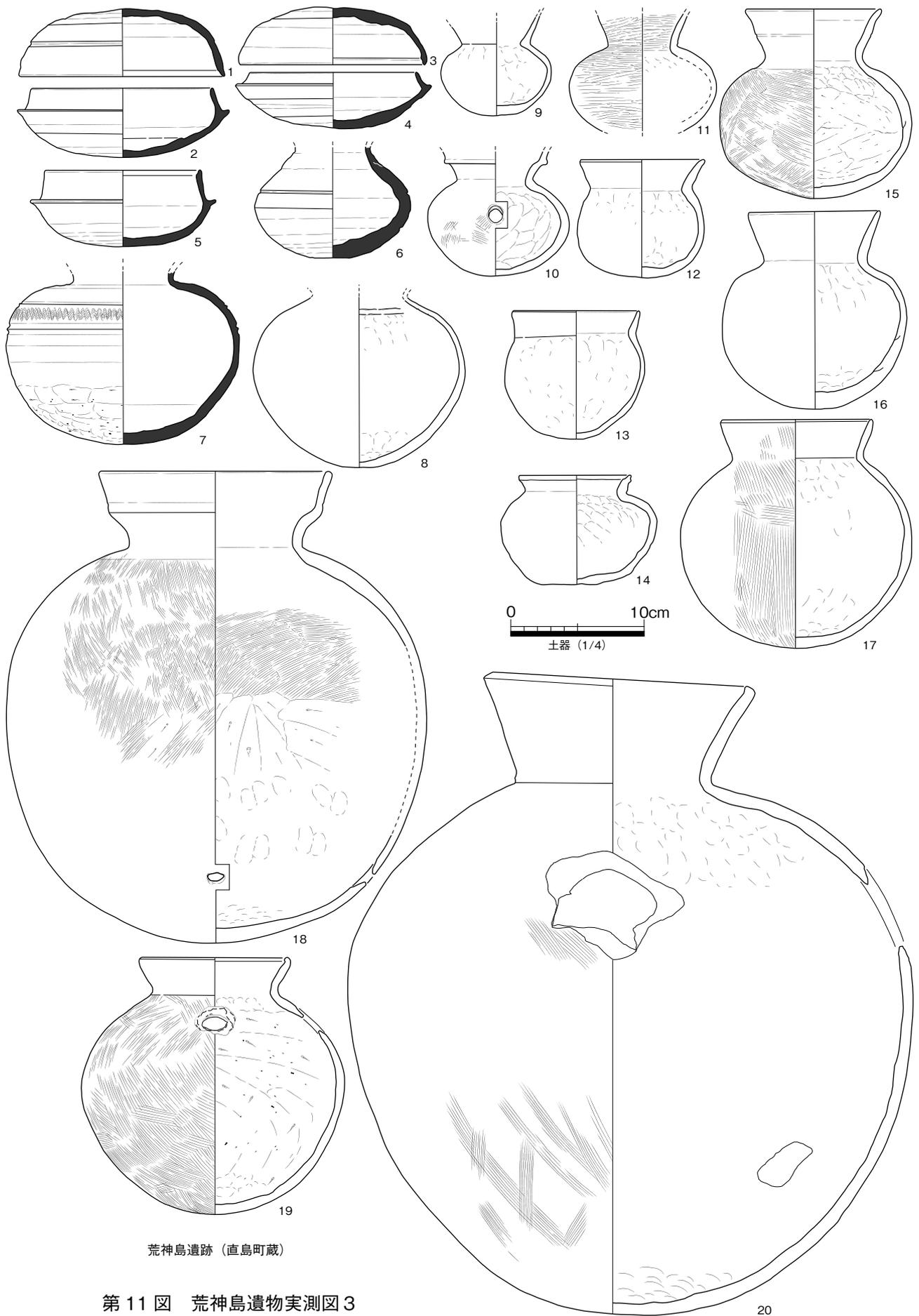


第10図 荒神島遺物実測図2

の7群のみ土師器が主体であった。全体的に見ると、6世紀後半～7世紀前半頃の須恵器が主体と見られ、過去の調査で見られた5世紀後半や6世紀前半頃のものは含まれていないようである。

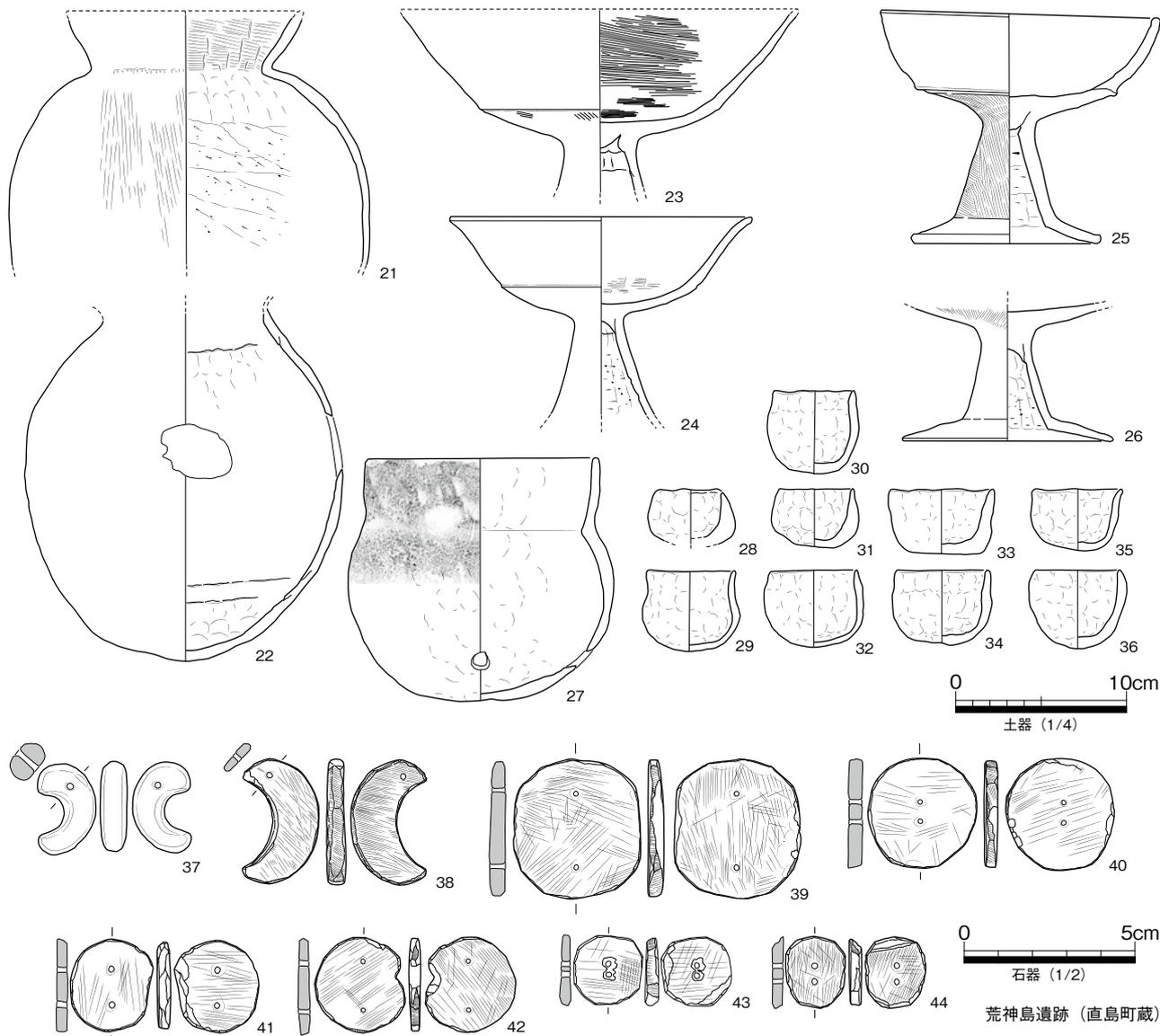
40は祭祀遺跡の1群の西側で採取した結晶片岩製の石包丁である。また、41・42は横長剥片である。荒神島西丘陵遺跡で採取した。

第11図1～第12図44は直島町が保管している資料である。先述の町・県が実施した発掘調査資料である。1～5は須恵器蓋坏で、形状から5世紀後半・6世紀中頃・6世紀後半の3時期に分かれそうである。6・7は須恵器壺である。9は土師器小型丸底壺、8・11・15・16は直口壺、14は無頸壺である。10は土師器ハソウである。



荒神島遺跡 (直島町蔵)

第 11 図 荒神島遺物実測図 3



第 12 図 荒神島遺物実測図 4

須恵器ハソウを模倣して作製した形状と見られる。18・20は土師器壺、19は土師器甕である。肩部ないし底部に焼成後の穿孔が認められる。23～26は土師器高坏である。27は製塩土器である。28～36は土師器手づくね土器である。

37は勾玉、38は勾玉型石製品、39～44は有孔円盤である。いずれも滑石製である。

9 直島 (第4・13・14・15・19図)

第4図14～19は倉浦で採取された資料である。昭和57年の分布調査では浜の西地点で土師器甕14、製塩土器15・16が採取されている。直島町で保管されている資料の中にも同時期の製塩土器17～19が認められる。

第4図20～22は琴反地で採取された資料である。備讃IV式製塩土器と見られる。第19図19は打製石斧である。基部側の大半を欠損し、刃部付近のみ残存する。刃部に摩滅痕が認められる。

第4図23～28は重石1号墳から出土した須恵器である。須恵器蓋杯のほか、短頸壺とその蓋

が出土している。概ね6世紀末葉頃のものと考えられる。

第4図29は横防出土の須恵器杯である。7世紀前半頃のものと考えられる。

第19図18は申山で採取された横長剥片石核である。肉厚な剥片もしくは分割礫を素材とし、打面と作業面を入れ替えながら長幅比が1:2～1:1の剥片を剥取する。作業面は石核前面後面の両側に設けられ、打点を左右に振りながら作業が進む。

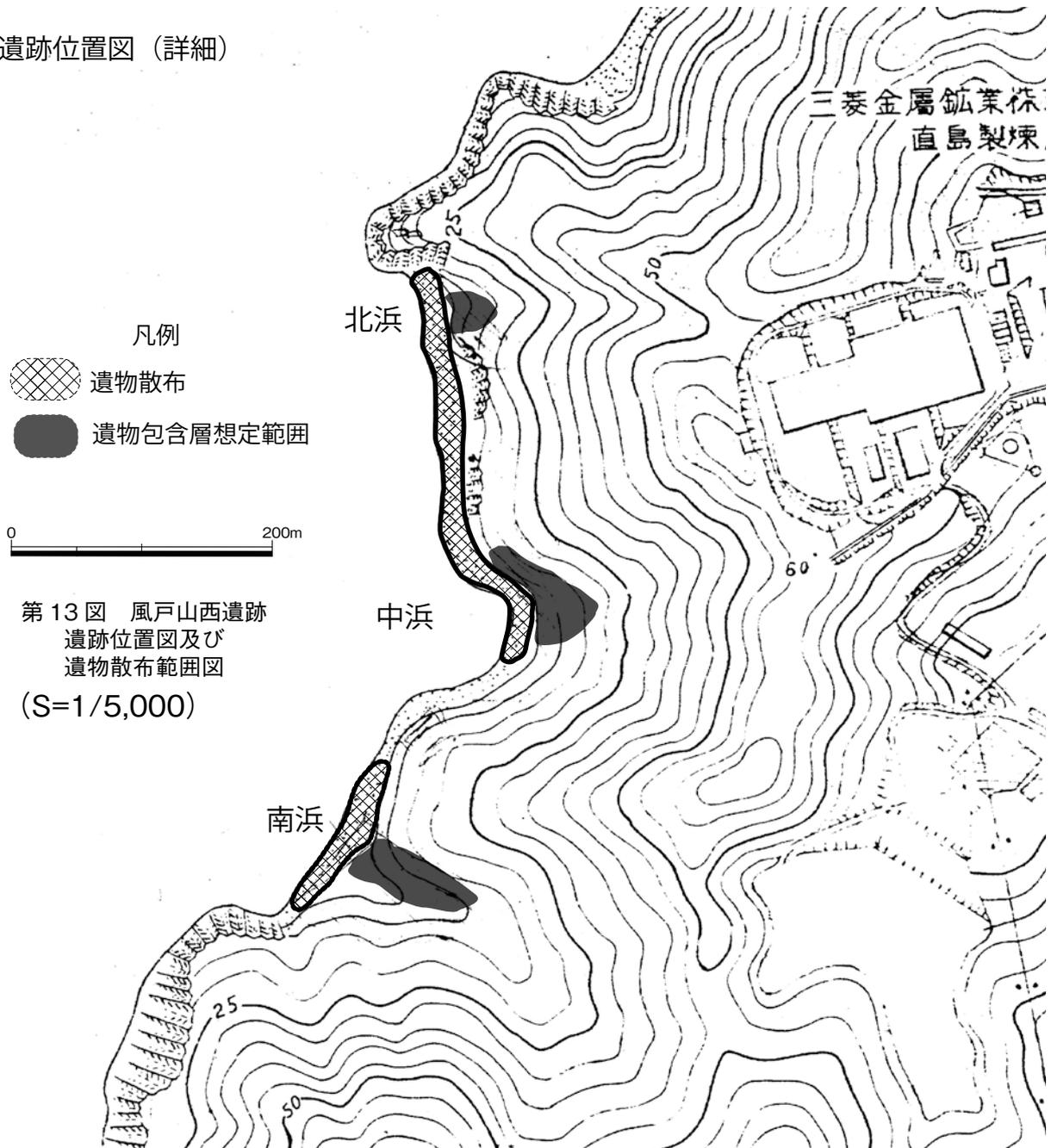
第14・15図は風戸山西遺跡で採取された資料である。直島本島西岸の北部に位置し、対岸に葛島を望む。大規模工場の敷地となっており、南北約500mにわたる浜は大きく北浜・中浜・南浜に分けられ、それぞれから採取したものを図示している。

第14図1～3、第15図100～105は北浜で採取した遺物である。昭和57年実施の分布調査時の資料1～3には須恵器蓋杯、須恵器甕が認め

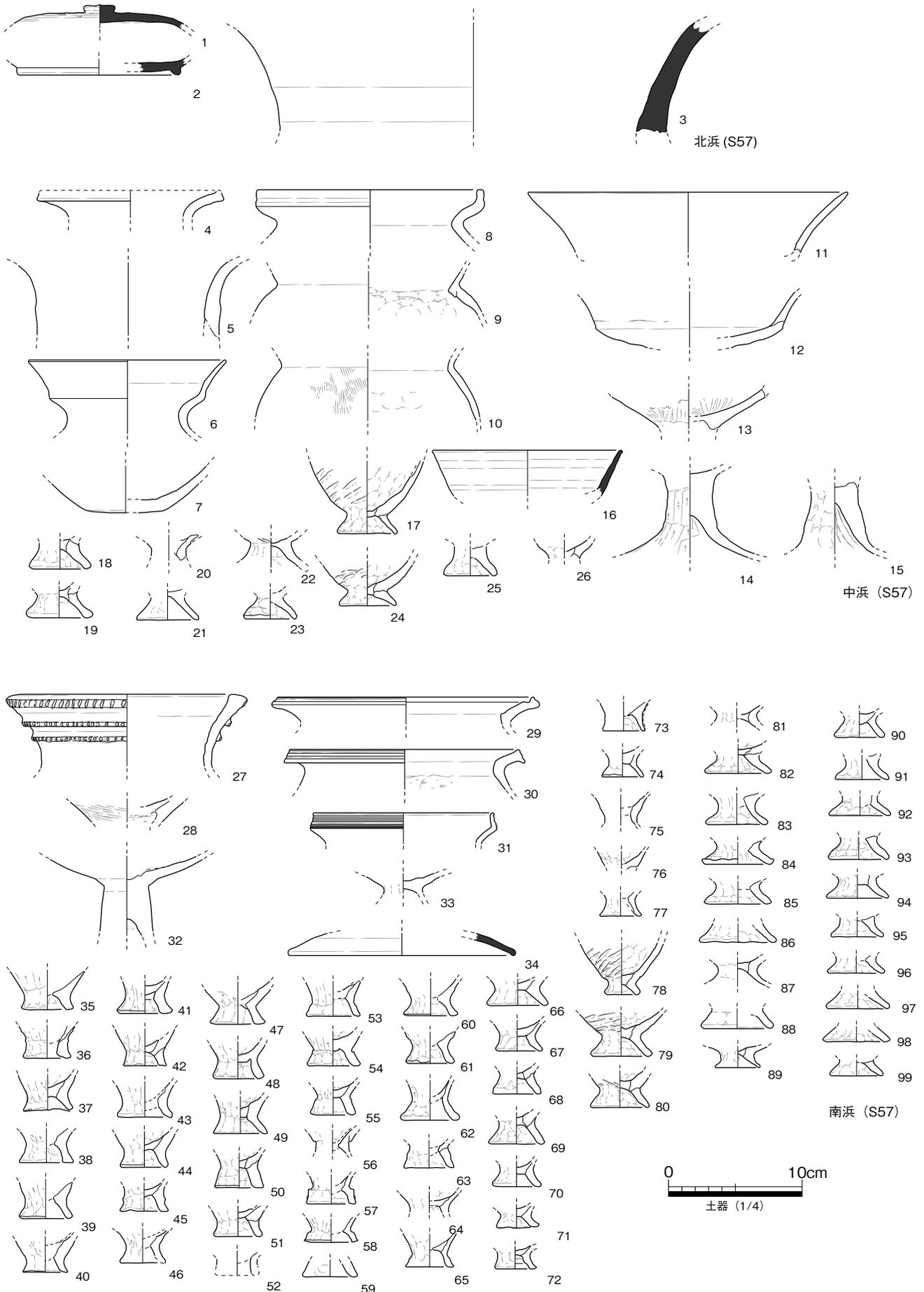


遺跡位置図 (S=1/25,000) 国土地理院発行 1/25,000 「宇野」を改変して使用

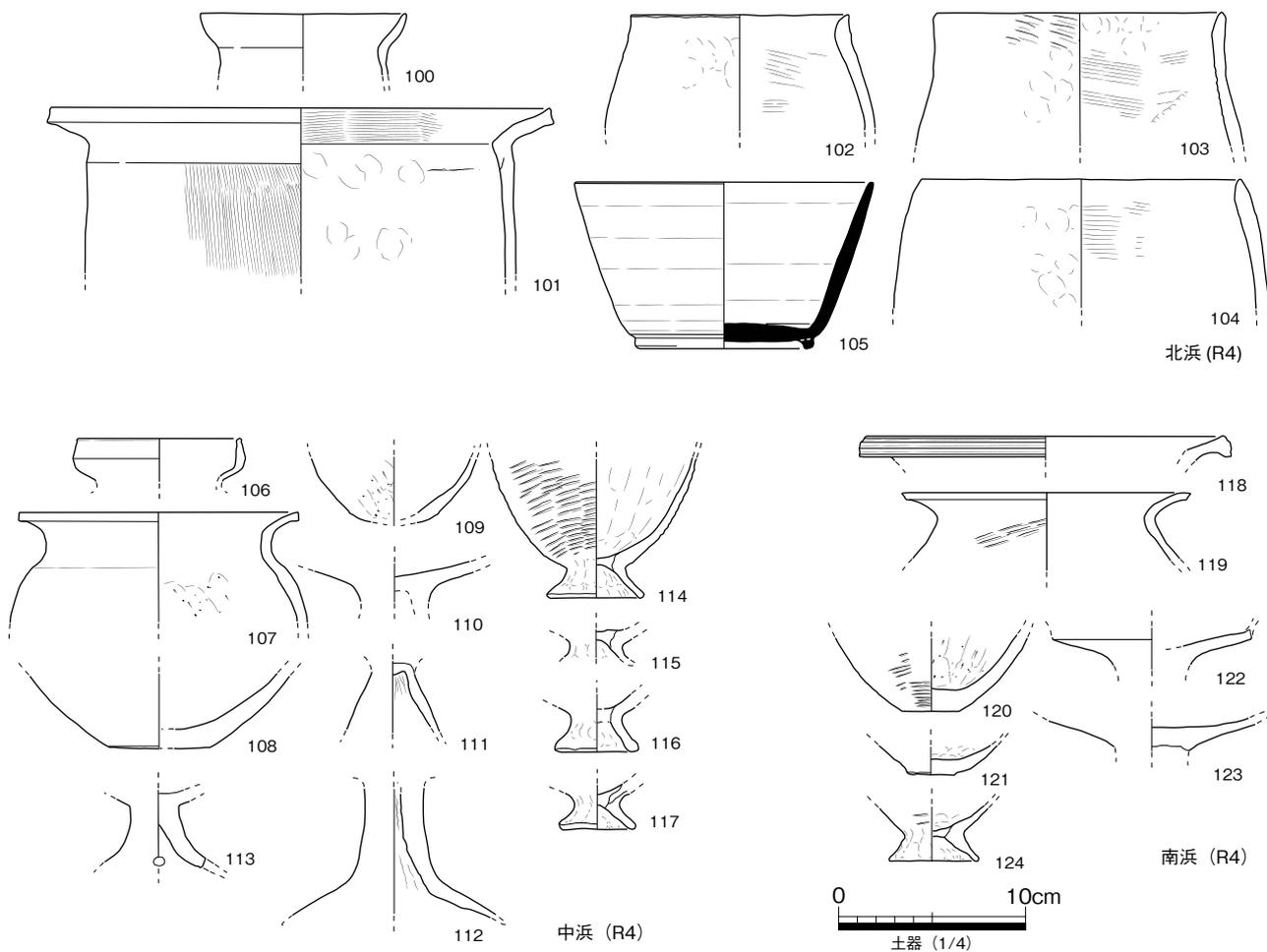
遺跡位置図 (詳細)



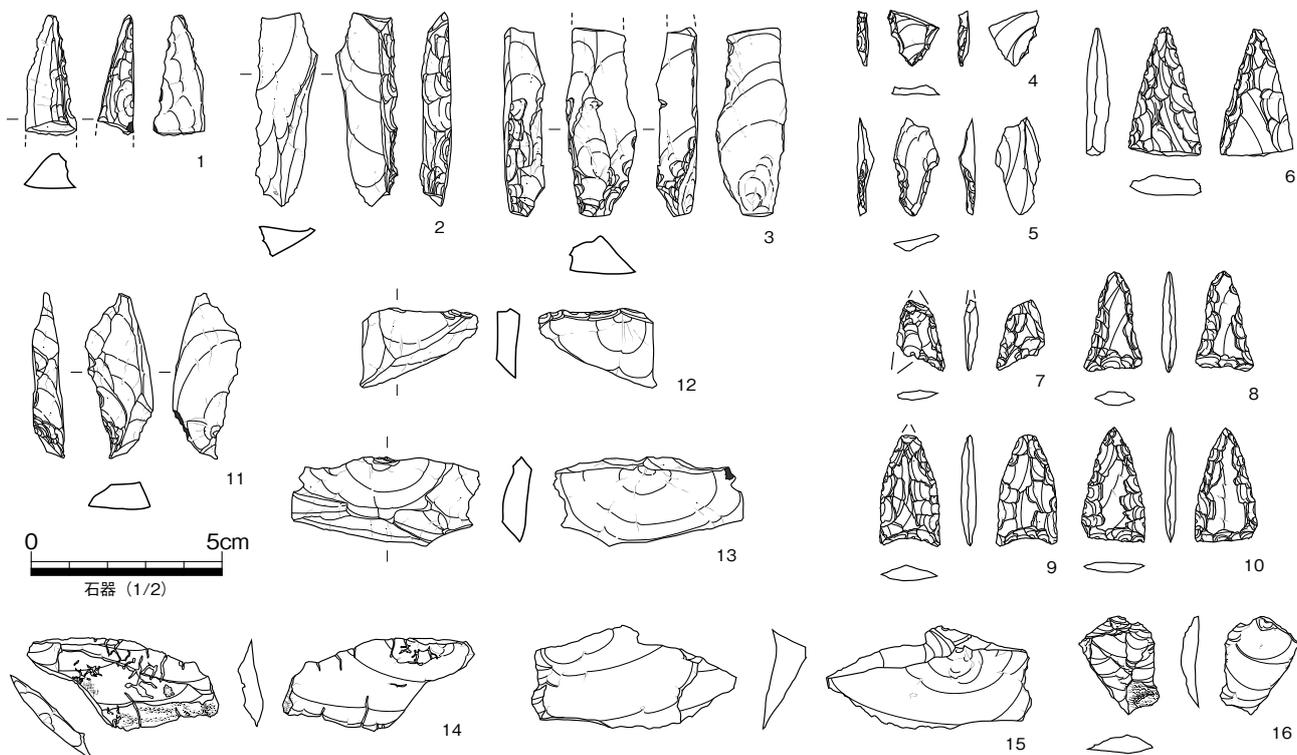
第13図 風戸山西遺跡
遺跡位置図及び
遺物散布範囲図
(S=1/5,000)



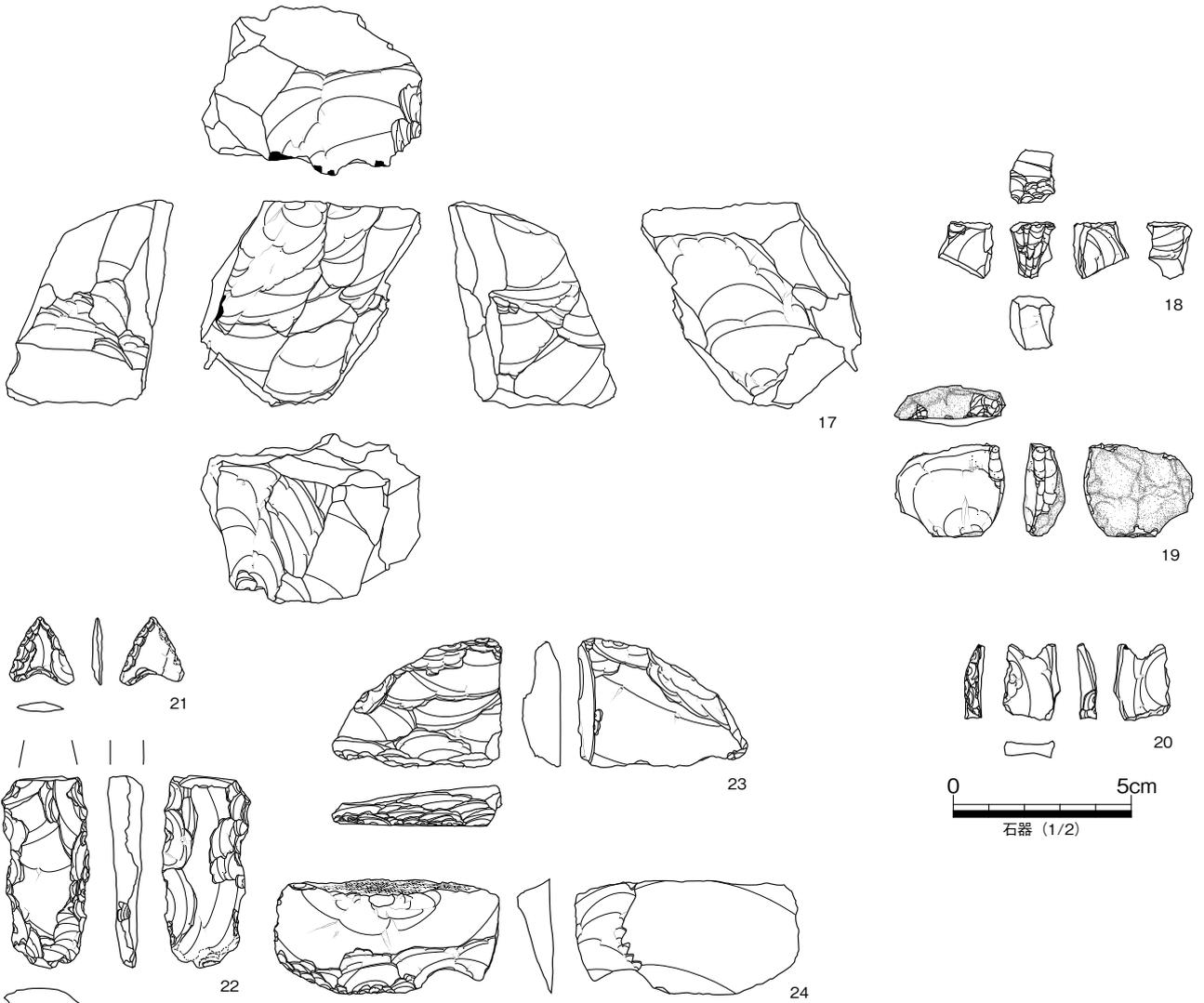
第14図 風戸山西遺物実測図1



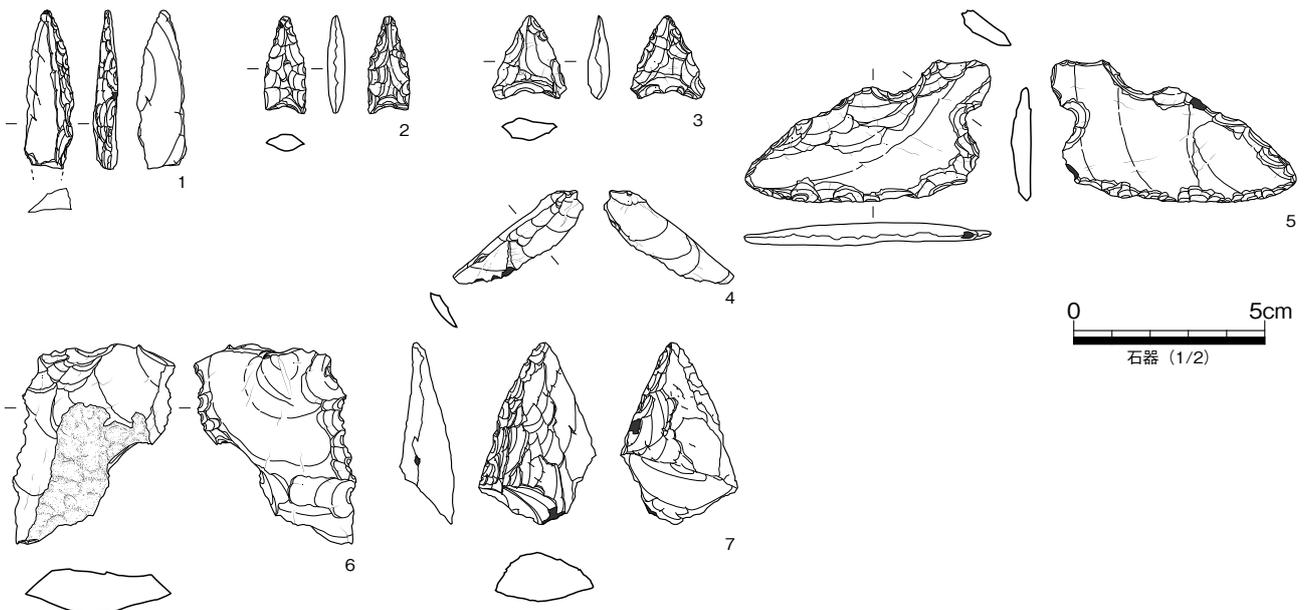
第 15 図 風戸山西遺物実測図 2



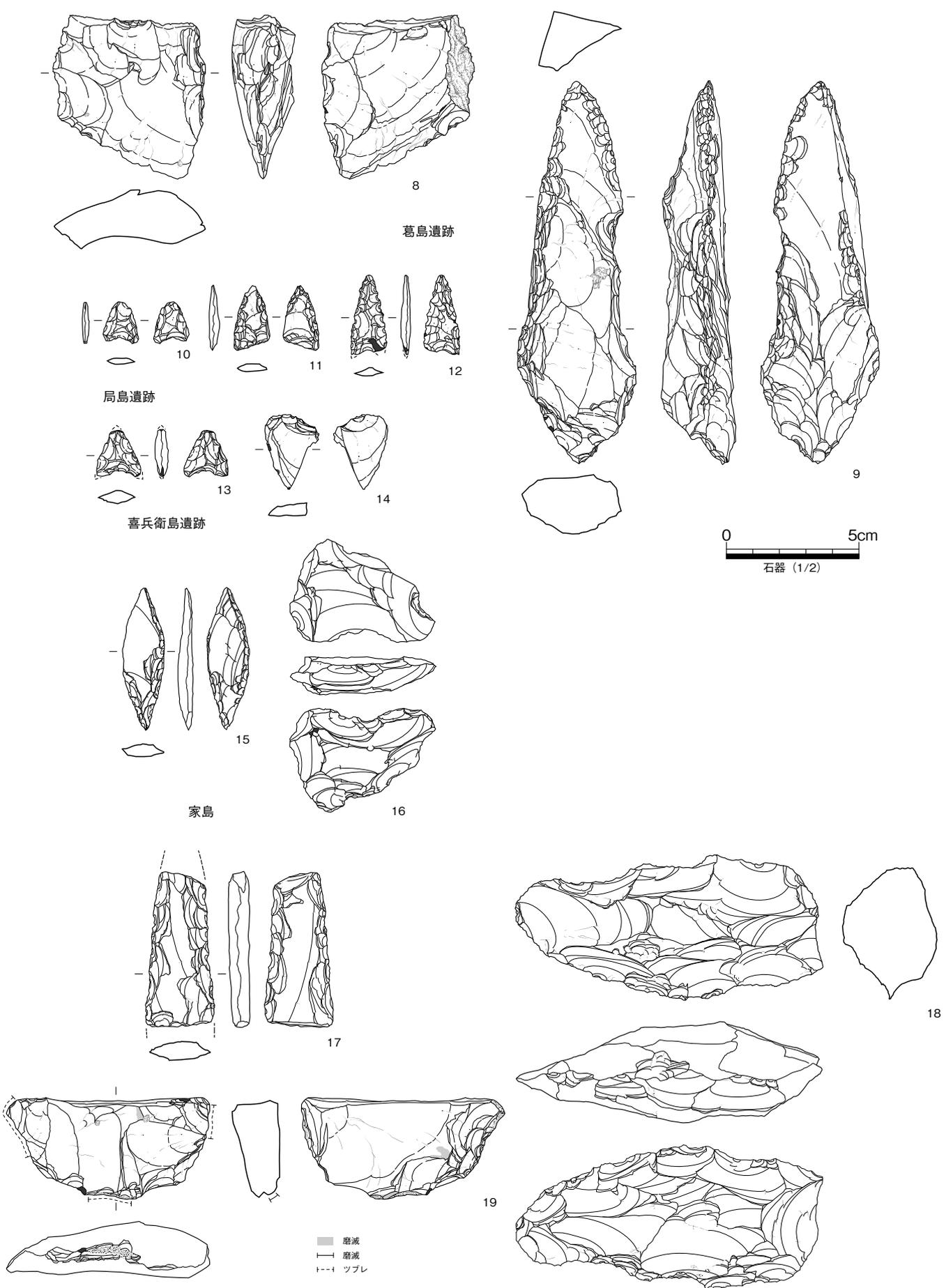
第 16 図 井島石器実測図 1



第17図 井島石器実測図2



第18図 葛島石器実測図1



第 19 図 各島石器実測図

られる。蓋坏は古代のもので、概ね8世紀後半のものと考えられる。令和4年度採取資料100～105は土師器甕・須恵器杯・製塩土器が認められる。

第14図4～26は昭和57年に中浜で採取した遺物である。4～7は土師器壺で、うち6は二重口縁壺である。8～10は土師器甕で、うちは吉備型と見られる。11～15は土師器高坏である。16は須恵器坏、17～26は製塩土器である。第15図106～117は令和4年度中浜採取資料である。106～108は弥生土器である。109～113は土師器、114～117は製塩土器である。

第14図27～99、第15図118～124は南浜で採取された土器である。27～99は昭和57年の採取である。27は弥生土器壺、28は弥生土器高坏である。29・30は弥生土器甕、33は弥生土器鉢である。また、31は土師器甕、32は土師器高坏、34は須恵器蓋である。35～99は製塩土器である。35～80までは弥生時代のもので、35～77が備讃Ⅱb式、78～80は備讃Ⅲ式のものと考えられる。81～99は古墳時代のもので、備讃Ⅳ式と考えられる。また、第15図118～124は令和4年度に採取した。118～121は弥生土器、122・123は土師器、124は製塩土器である。南浜で採取された資料の状況から、弥生時代中期に製塩が行われたことが想定できるほか、古墳時代前期・後期にも製塩が行われたようである。古代の土器については製塩土器が確認できておらず、どのような経緯で資料が残されたかは不明である。小規模な製塩が行われたのかもしれない。

第19図17はヘキで採取された尖頭器である。「吉野石膏」の注記がある。両面の器体中央に素材面が残置され、周縁の加工により成形される。先端及び基部を欠損する。18は串山で採取された横長剥片石核である。肉厚の剥片もしくは分割礫を素材とし、交互剥離により剥片を剥取している。作業面と打面の入れ替えのみでなく、正面並びに背面からも作業が行われる。

今回の調査は3次調査として報告する。以下、1・3次調査成果を報告する。

第3節 積浦遺跡の発掘調査

積浦遺跡は直島本島南東部の積浦地区に所在する遺跡である。姫泊山と京ノ山に挟まれた谷底平野の前面に概ね東西方向に形成された砂堆の上に位置し、周辺は現状では集落となっている。今回の調査以前にも、2回調査が行われている(第21図)。1次調査は昭和58年度に直島町史編纂に伴い行われ、今年度調査地の同筆内とその南西約100m付近の畑地において計3か所約10㎡のトレンチ調査により、炉跡1基、柱穴数基などが確認された(直島町役場1990)。2次調査は平成14年度に県道北風戸積浦線の建設に伴い行われ、中世の礫敷き遺構と石積み遺構が確認され、現状の地形から、今年度調査地西側にある砂堆を分断する河川の河口付近に設置された港湾施設の可能性が指摘されている。すでに報告書が刊行されており(香川県教委2003)、今回の報告で詳細は触れない。

1 1次調査

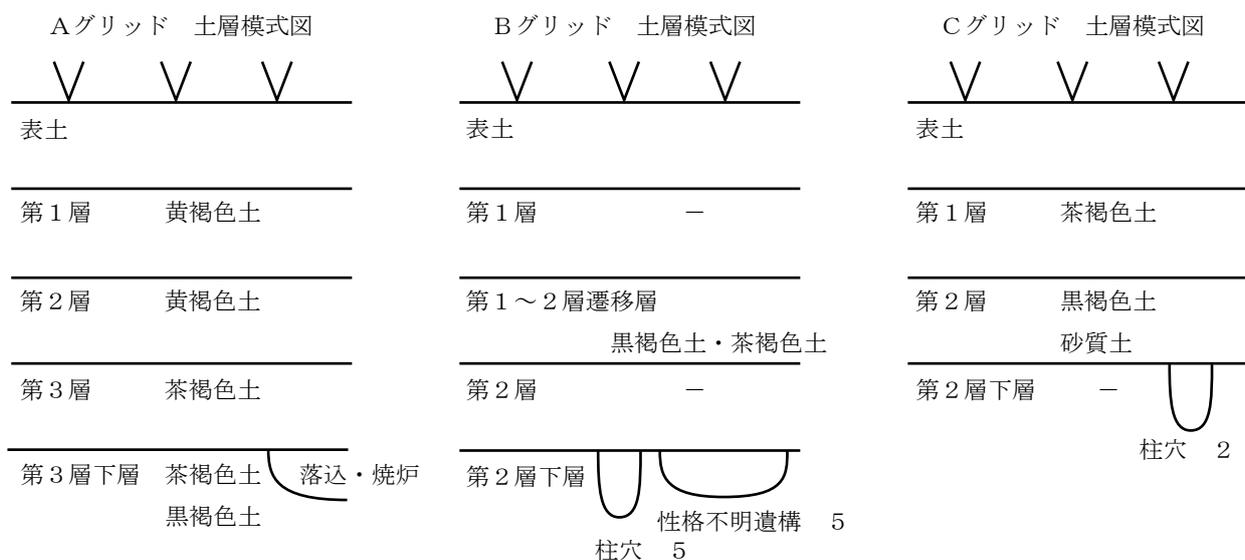
① 概要

当時の発掘調査に関する記録がほとんど残っておらず、町史に記載された内容と調査時に出土した遺物につけられたメモ、町で保管されていた調査中のメモ写真を元に、内容を整理しておく。まず、町史の記載は以下のとおりである。

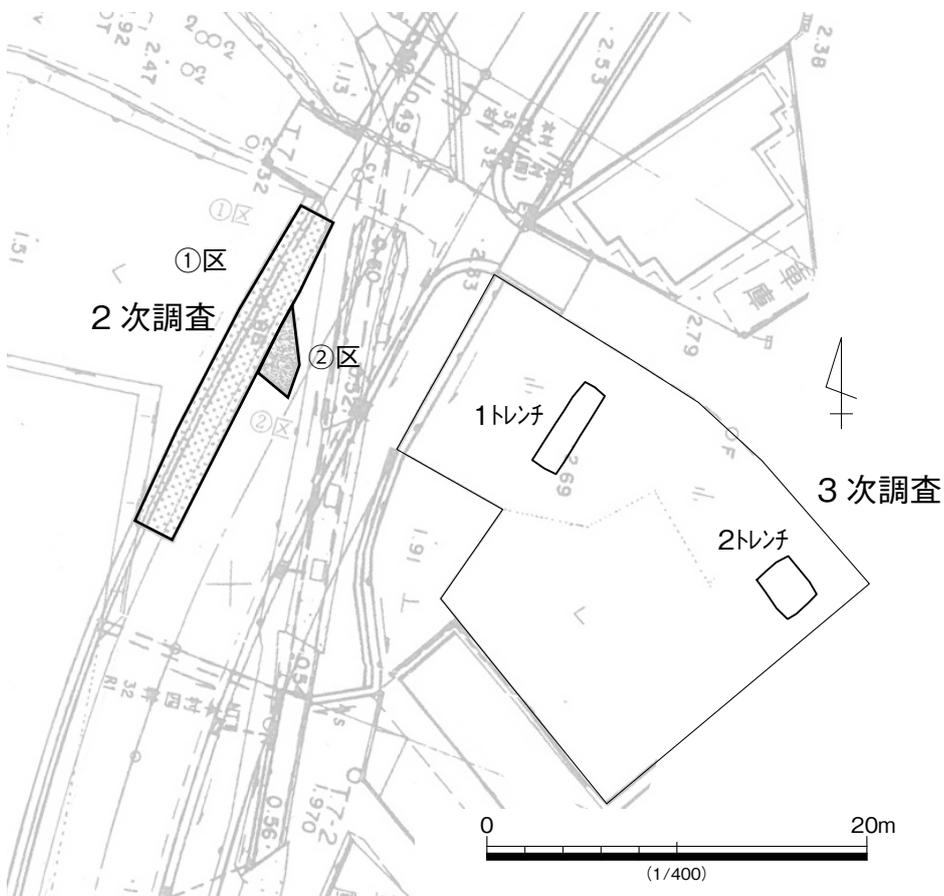
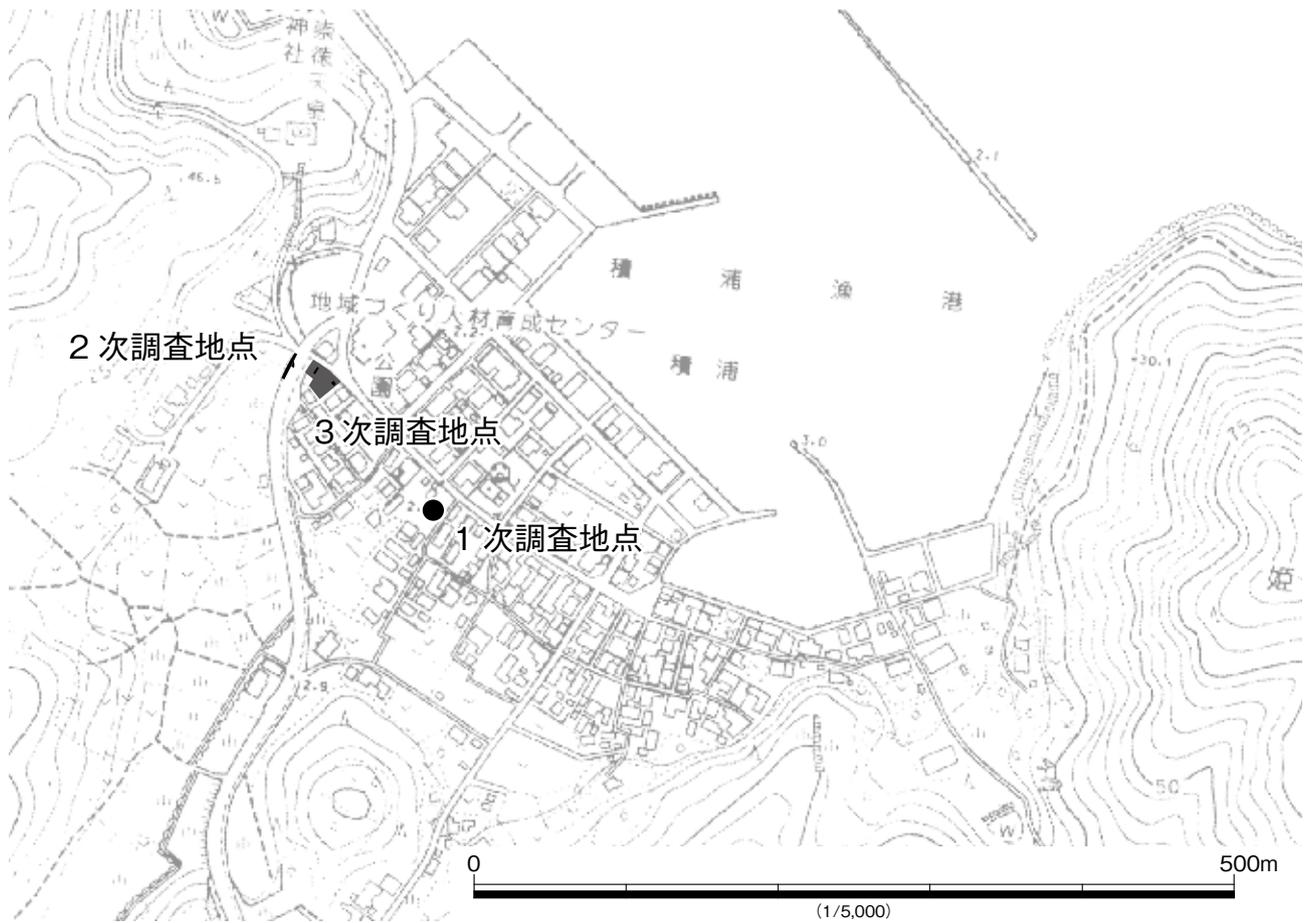
- 調査面積 10㎡
 - 検出遺構 炉跡1、柱穴?数基
 - 出土遺物 瓦器片・備前焼片・土錘(多数)、輸入陶磁器(白磁碗)片1、宋銭(数枚)鯛釣針1、鹿骨、焼炭(13~14世紀)
- なお、周辺に製塩土器・須恵器(平安時代)・鎌倉~室町時代の瓦器・土錘などが多数散布。
上記の遺物に関する記載については、以下の内容が根拠となっていると考えられる。

第2表 1次調査コンテナ内容

	コンテナ内容	収納遺物	備考
1	オバタケ<小畑>付近表採資料	土錘・中近世土器	足釜あり
2	Aグリッド 第3層黄褐色土層出土遺物	須恵器(古墳・古代)・土師質土器小皿・碗(吉備型?)・備前焼・土錘(有溝・管状)・青磁・白磁など。	焼炉周辺'の記載有り。
3	Aグリッド 第3層下層黒褐色土層出土遺物	須恵器・土師器・瓦器碗・土師質土器碗・小皿・土鍋?・製塩土器・灰釉陶器碗(美濃産?10c?)、備前・吉備型小皿?	
4	Aグリッド 第3層下層	Aグリッド 第3層下層骨類(獣骨系・鹿角有)	
5	Aグリッド 第3層落込茶褐色土・黒褐色土	茶褐色土・黒褐色土それぞれから銅銭・土師質土器・備前焼・土錘など	布留系甕あり
6	Aグリッド第3層下層落込	土師質土器・瓦器・備前焼など	土師質土器足釜・白磁碗底部あり。
7	A・BグリッドAグリッド第1・2層黄褐色土Bグリッド 2層下	(柱穴)P-2 土師質土器・黒色土器・有溝土錘	Bグリッドに柱穴(最低5基)あり
8	Bグリッド 第2層下	土師質土器・瓦器・備前焼 等 小片	樟葉型黒色土器?骨・カキ等あり大型の脚台付製塩土器若干含む
9	Bグリッド	土師質土器・瓦器・備前焼など	性格不明遺構(SX)5基遺物小片多し。
10	Cグリッド	第2層 黒褐色土層 樟葉型黒色土器?・土師質土器・須恵器・瓦器	全体 13~14c?一部12c?



第20図 1次調査 土層堆積状況図



第 21 図 積浦遺跡調査地位置図

出土遺物を収納したコンテナは10箱あり、内容は第2表のとおりである。

② 堆積状況と遺構

各グリッド出土遺物取り上げ札の記載から、それぞれのグリッドの堆積状況を模式化した(第20図)。表土若しくは耕作土を最上位とし、3～4層程度の堆積が想定できる。なお、各グリッドとも一番大きな数字の層名に「下」・「下層」という表現の付く層がある。「○層を上層・下層に分けた時の下」の意とも、○層の「下の層」の意とも解釈できるが、「上層」の表記が認められないことから、後者の「○層の下の層」として統一して解釈した。また、この層で柱穴・性格不明遺構・落ち込み・「焼炉」など遺構を伴うことから、この層が遺構面ベースと考えられる。Aグリッドでは1・2層目に黄褐色土が、3層目に茶褐色土が、第3層下層に茶褐色土と黒褐色土が確認でき、Cグリッドでは第1層に茶褐色土、第2層に黒褐色土が確認できる。Bグリッドについては第1層・第2層の土色が不明で、その間に遷移層が設定され「黒褐色土・茶褐色土」の色調が与えられる。遷移層の状況は想像の域を出ないが、A・Cグリッドの層順から上位に茶褐色土、下位に黒褐色土が優位となる堆積と想定した。また、2層下位にSX1～5及びP5が認められるが、これらは2層下層を開削して築かれた遺構と解釈した。黒褐色土の下位に相当する土については記載がなく、直島町保管の調査中のメモ写真から黄褐色系の砂質土が相当するものと考えられる。

各グリッドの位置関係、面積、遺構の規模は不明であるが、Bグリッドが比較的遺構密度が高い可能性がある。各グリッドの底部で遺構やその可能性を持つものが確認でき、Aグリッドでは焼炉と落ち込みが3層下層上面で、Bグリッドでは柱穴5基と性格不明遺構5基が2層下位上面で、Cグリッドでは柱穴2基が2層下位上面で、それぞれ確認できている。各グリッド出土遺物の分量はA・Bグリッドがやや多く、Cグリッドは若干少ない。

③ 出土遺物

i) Aグリッド(第22図)

2層からは土師質土器小皿1と、破損して著しく錆びた銅銭39が出土している。図示し得るものが限られるが、形状から中世のものと考えられる。3層からは吉備系土師質土器碗4・5、瓦器碗3のいずれも底部片が出土している。3層下層からは須恵器水瓶24・蓋杯28・甕36、土師質土器小皿(6・7)・皿(8～19)・杯(21～23)・碗27・足釜(29～32)・鍋(33・35)、黒色土器碗25、山茶碗26、常滑焼甕34、銅銭37・38が出土している。土師質土器皿は底部と体部の境が比較的明瞭で、斜め上方へやや直線的に伸びる薄手の体部を持つもの8～13と、底部と体部の境が若干不明瞭で、体部がやや内湾気味に立ち上がるもの14～19が認められる。後者は所謂「口縁部→体部ナデ」手法(佐藤2000)のものを含み、外面の回転ナデの単位が細かく口縁外面に面を持つものが多い。なお、1点京都系土師器20が認められる。山茶碗は積浦遺跡全体で

1点の出土である。胎土はきめの細かい均質なもので、古式のものとして想定できるが、産地不明である。全体的にみると10世紀以前のものが若干混じるが、主体は足釜や常滑焼甕の形状から13～14世紀頃のものであると考える。

3層下層落ち込みからは土師質土器小皿40・41、土師質土器皿42～48、土師質土器杯49、土師質土器碗55、西村型黒色土器碗51～54、和泉型瓦器碗50、白磁皿56、白磁碗57、土師質土器足釜(61・62・65)、土師質土器羽釜68、土師器甕(58・60・66・67)、製塩土器59、須恵器鉢63、十瓶山窯系須恵器鉢64、常滑焼甕71、備前焼甕72～74が出土している。倒杯形の脚台を持つ製塩土器片59と共に布留式甕58が出土しており、関連遺構の存在は不明であるが古墳時代前期における砂堆上での製塩活動が想定できる。

ii) Bグリッド(第23図)

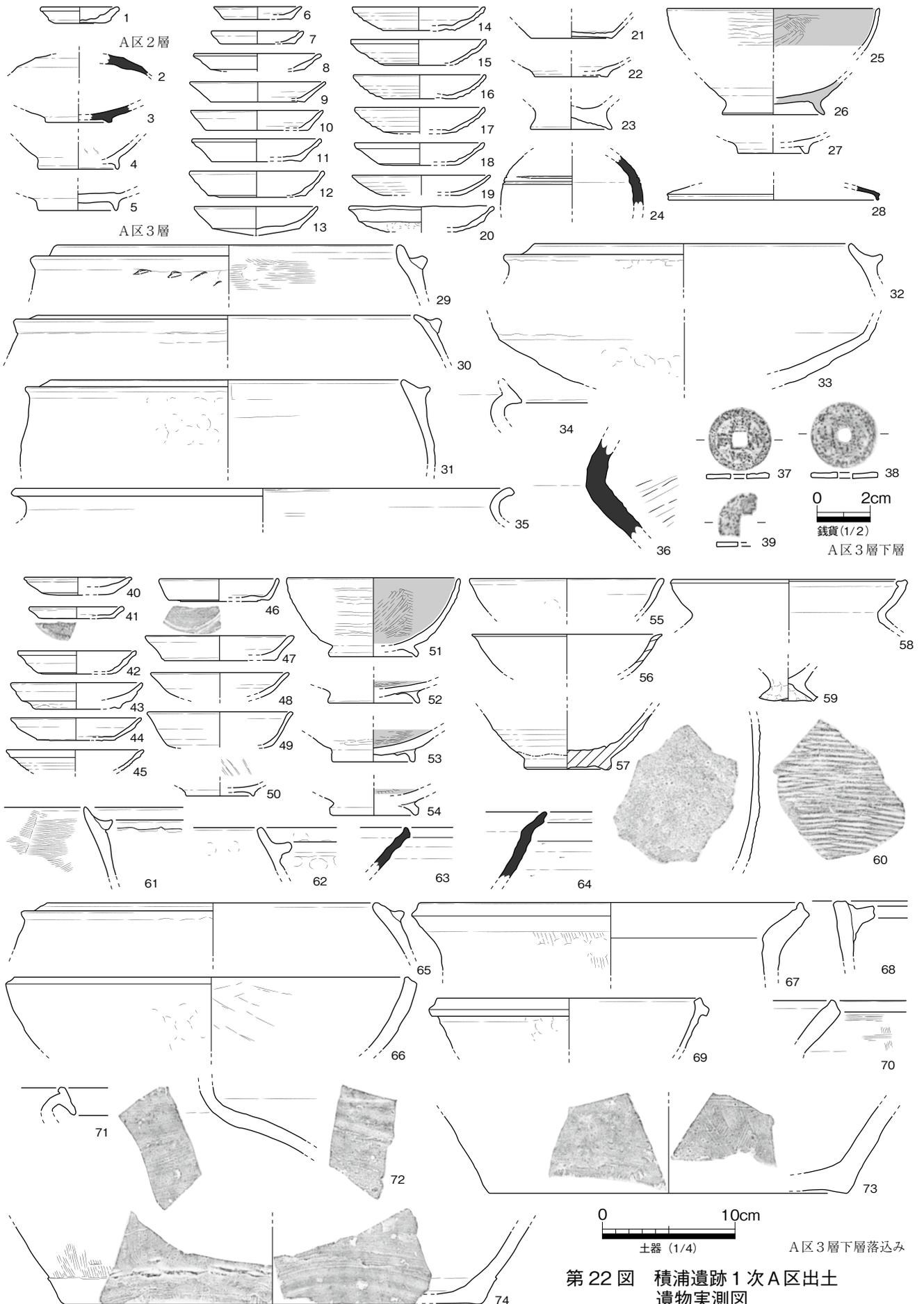
表土からは播磨産と思われる須恵器碗75が出土している。1～2層で取り上げられた遺物には土師質土器小皿76、和泉型瓦器碗78、黒色土器碗80、青磁皿77、製塩土器片79がある。製塩土器は外面にタタキ調整を持つ体部で周辺から出土している脚部の状況から備讃IV a式のものと考えられる。

2層下位帰属の遺構を見ると、SX1からは土師質土器皿123～126、製塩土器127が出土しているが、後者は混入品である。SX2からは土師質土器皿128・129、縄文土器深鉢の底部130が出土している。やはり後者は混入品である。SX3からは乗岡編年中世3期の備前焼播鉢131や瓦器碗132が、SX4からは土師質土器皿133、瓦質土器鍋135、東播系須恵器碗134、和泉型瓦器碗136、土師器鉢137が、SX5からは土師質土器皿138が出土している。SX4の瓦質土器鍋は2次調査事例を参考に分類した。畿内からの搬入が想定されている。遺構の帰属はいずれも中世のものと考えられるが、SX3の備前焼すり鉢の形状から14世紀代のものと考えられる。

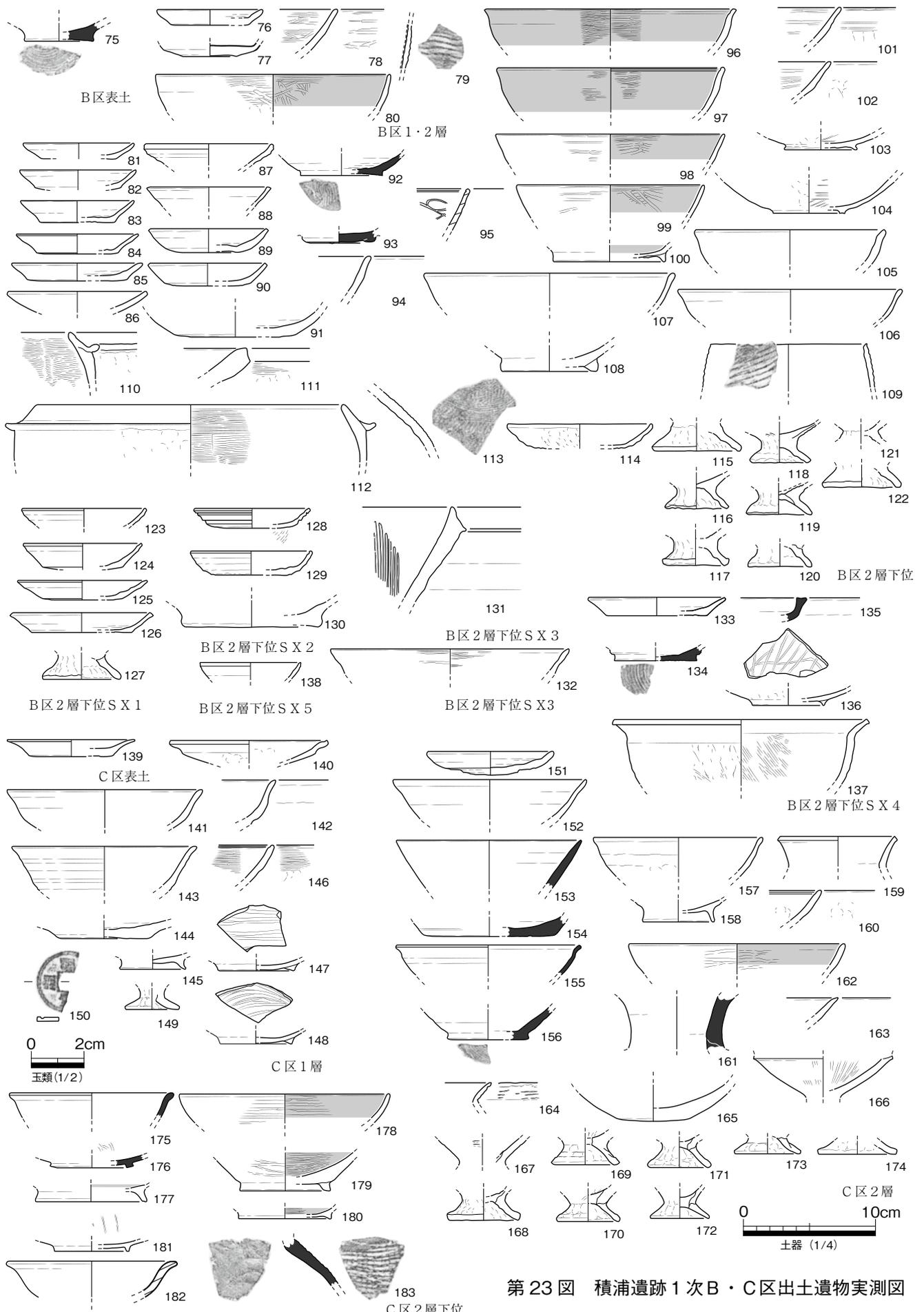
また、これらの遺構のベースとなる2層下位からは土師質土器皿81～90、土師質土器碗(94・105・106)、吉備系土師質土器碗157・158、東播系須恵器碗92、十瓶山窯系須恵器碗93、青磁碗95、黒色土器碗98～100、楠葉型瓦器碗96・97、和泉型瓦器碗101～104、土師質土器足釜110・112、土師器甕111、弥生土器壺113、土師器壺91、土師器小形鉢114、製塩土器115～122が認められる。

iii) Cグリッド(第23・24図)

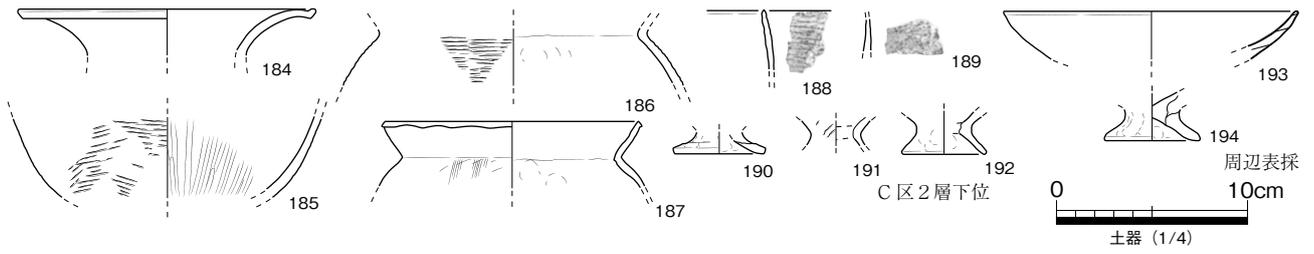
表土からは土師質土器皿第23図139が出土している。1層からは京都系土師器皿140、土師質土器杯143、土師質土器鉢144、土師質土器碗(141・142・145)、楠葉型瓦器碗146、和泉型瓦器碗147・148、製塩土器149、銅銭150が出土している。2層からは土師質土器皿151、土師質土器杯152、吉備系土師質土器碗157・158、須恵器杯153・154、東播系須恵器碗155・156、須恵器壺161、瓦器碗160、黒色土器碗162、土師器甕159・164、土師器壺165、土師器高坏166、製塩土器167～174が



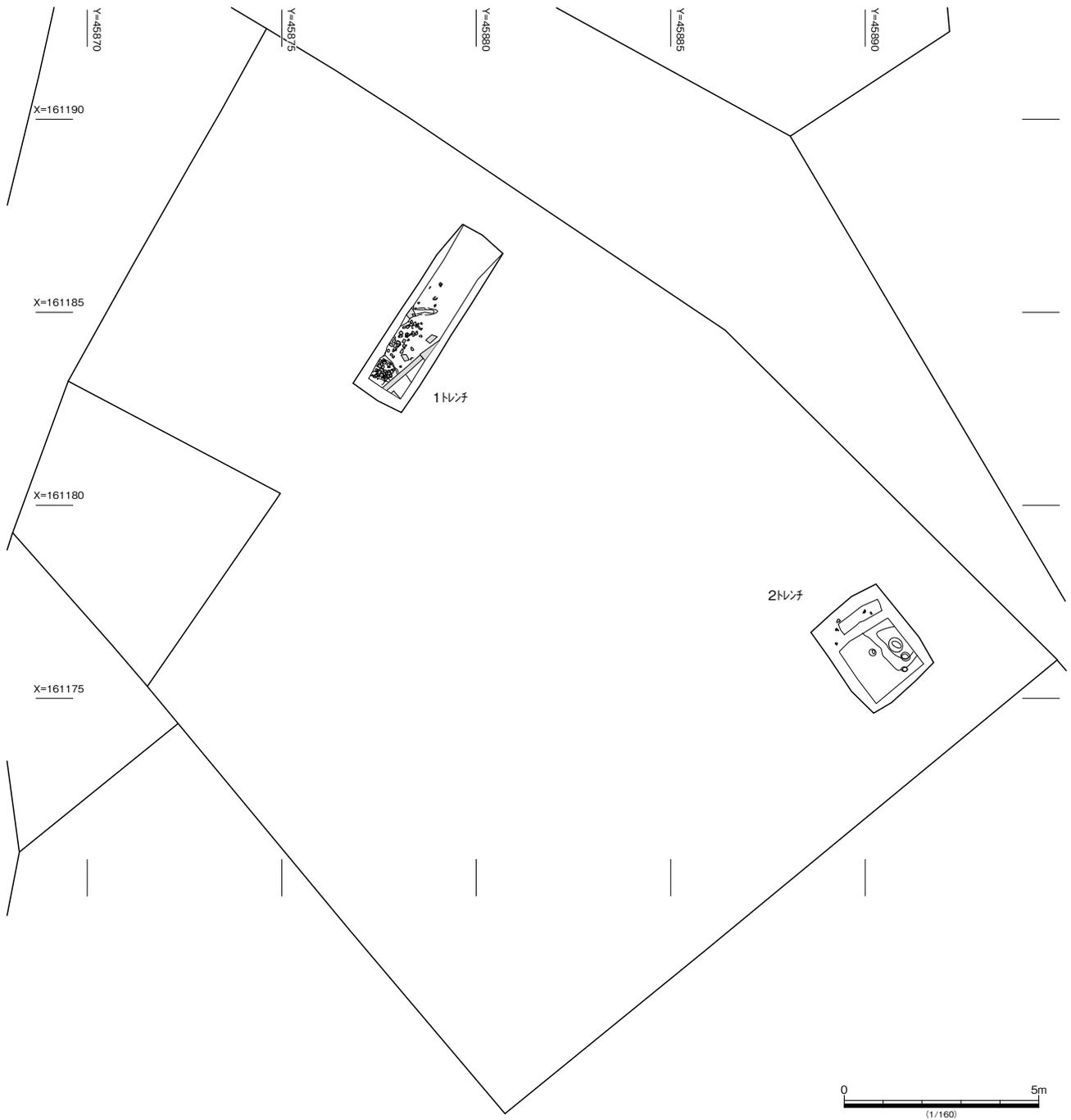
第22図 積浦遺跡1次A区出土
遺物実測図



第23図 積浦遺跡1次B・C区出土遺物実測図



第24図 積浦遺跡1次C区出土・表採遺物実測図



第25図 3次1・2トレンチ配置図

出土している。2層下位からは吉備系土師質土器碗 175、黒色土器碗 177～180、和泉型瓦器碗 176・181、青磁皿 182、須恵器甕 183、土師器壺（第24図 184）、土師器鉢 185、土師器甕 186・187、製塩土器 188～192が出土している。180は古代（9～10世紀）の所産、183は胎土や内面の当て具痕から亀山焼の可能性はある。

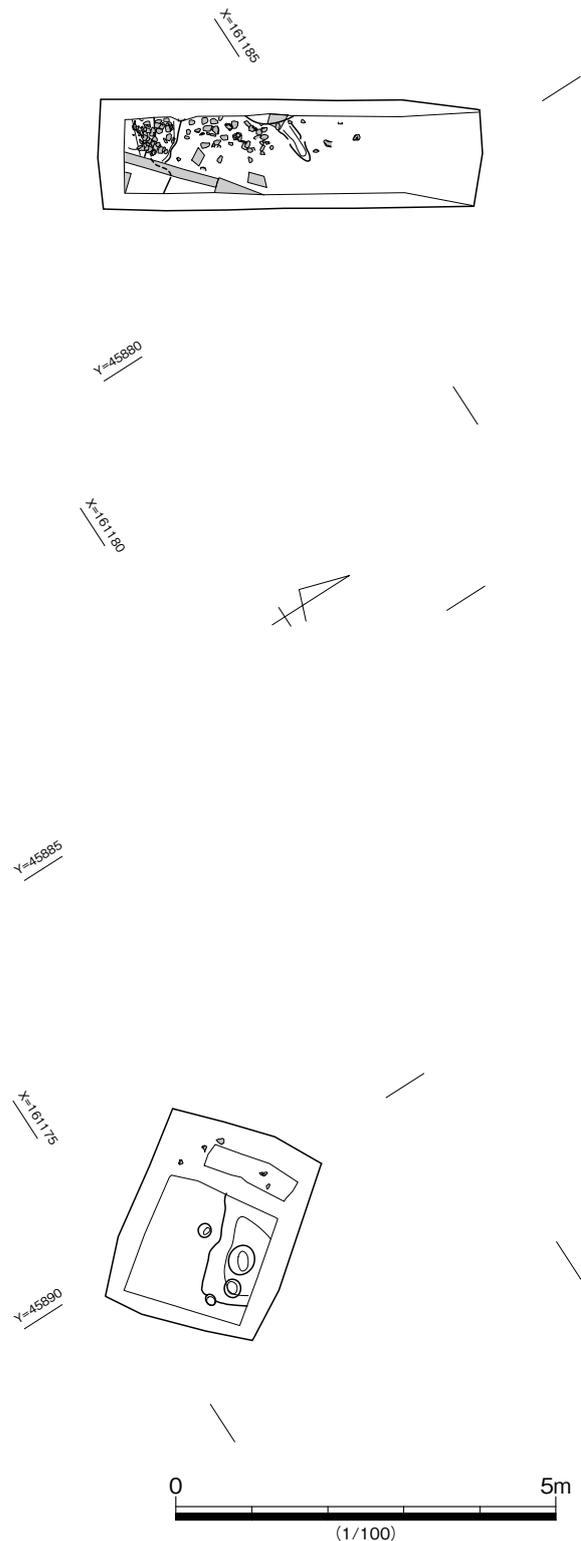
iv) 地点不明

表採資料として、「オバタケ（小畑）付近」の注記があるものが少量認められ、白磁皿（第24図 193）、製塩土器 194が確認できる。

遺物を通じて1次調査地点全体を概観すると、遺物の時期と出土量から各グリッド・層位とも12～14世紀代に帰属するものを主体としていることが確認できる。各グリッドの遺構面は、Aグリッドでは3層下層上面、Bグリッド及びCグリッドでは2層下位上面が相当すると考えられ、その上位の層が後世の包含層であると考えられる。Aグリッドでは13～14世紀の遺物を含む3層下層に落ち込みが形成されているが、B・Cグリッドでは遺物を含まない2層下層に柱穴や性格不明遺構が形成される。遺構出土遺物は限られており、Aグリッドの落ち込み出土遺物は、ベース土に含まれるものを巻き上げている可能性があるため、時期決定が困難である。遺物の組成を見ると、破片数計測を行っていないため、残存状況が良好なものの特徴的なものをもとに類推したが、讃岐的なものや非讃岐的なものが認められる。例えば、西村型黒色土器碗（第8図 51～54、第9図 162・178）がある一方で、それとは異なる黒色土器（第8図 80、98～100）が、また須恵器も十瓶山窯系と東播系が認められるなどである。さらに、吉備系土師質土器碗が一定量認められるほか、楠葉型瓦器碗・和泉型瓦器碗、京都系土師器皿、山茶碗、備前焼、亀山焼、常滑焼といった搬入品が含まれるといった点の特徴となる。

また、具体的な内容が不明であるが、Aグリッドで「焼炉」と評される遺構があり、A・Bグリッドから鉄滓や形状不明鉄片（製品か?）、焼土塊が出土していることから、鍛冶炉の存在が想定でき、集落内で小鍛冶が行われていたと思われる。また、図示しえなかったが鉄製釣針が出土している他、A・Bグリッドからまとまった数の管状土錘と有溝土錘が出土しており、漁労が生業の一端にあったことが伺える。なお、土錘の出土点数はAグリッドでは管状土錘が52点、有溝土錘が56点、またBグリッドでは管状土錘が13点、有溝土錘が22点である。

また、各グリッドから脚台付の製塩土器（備讃IV式）が若干量出土しているほか、同時期の布留系甕や高坏、小型鉢の存在から、小規模ながら古墳時代前期には砂堆上における製塩活動が行われていることが伺えるほか、付近で弥生土器片の採取事例があることから、少なくとも弥生時代には砂堆上が利用されていると考えられる。ただ、古墳時代前期並びに弥生時代の遺物出土量は、中世のそれと比較しわずかであり、1次調査地点での集落の形成は想定しづらい。近接した位置に集落域があり、そこから遊離したものが残ったものか、砂堆上が定住の場としては利用されていなかった



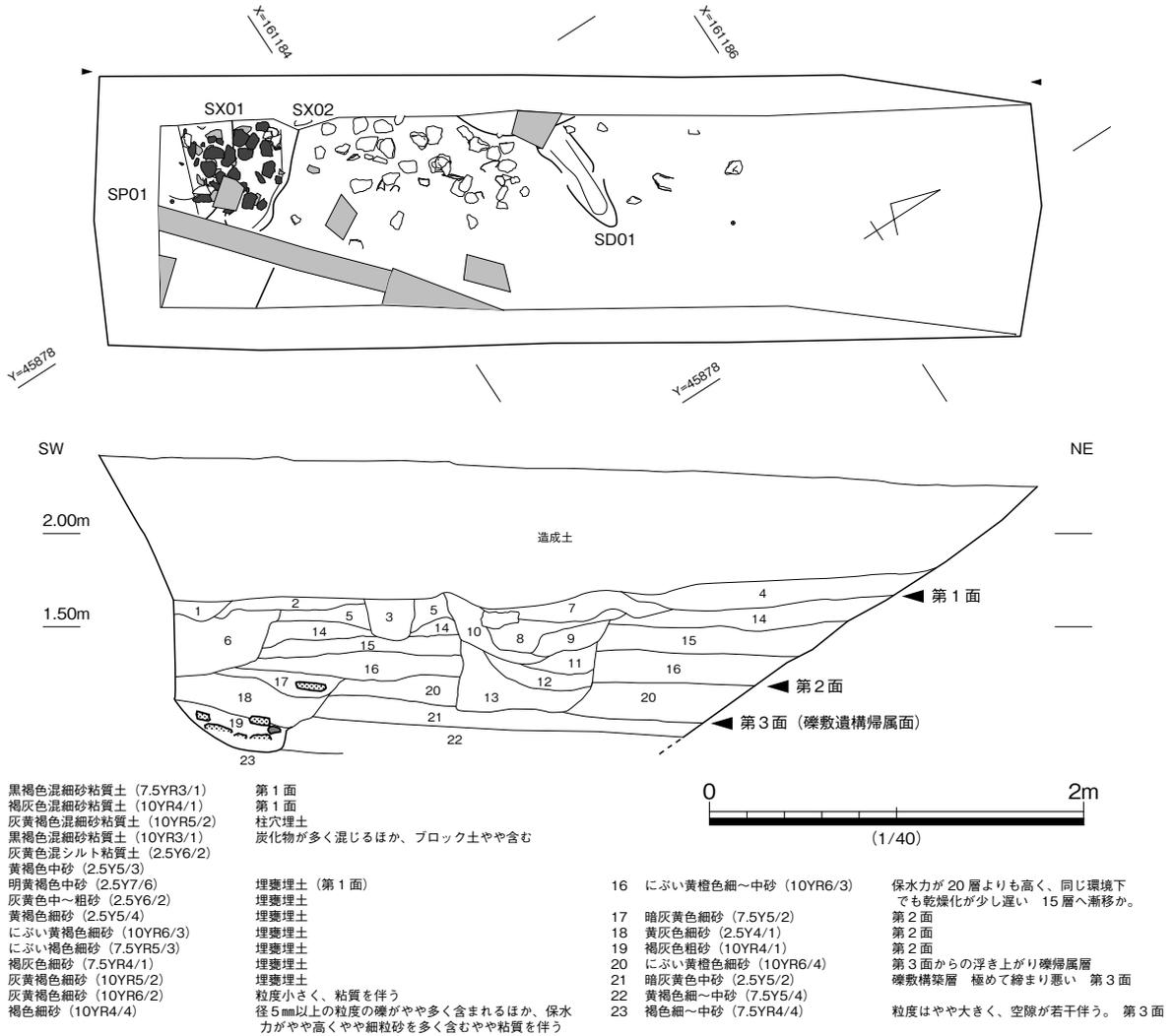
第26図 3次1・2トレンチ平面図

ものと考えておきたい。

2 3次調査

① 概要

調査対象地は直島町518-1で、現況の地目は畑である。調査期間は令和4年6月13日～6月24日で実働は5日間である。機械掘削と人



第27図 3次1トレンチ平・断面図

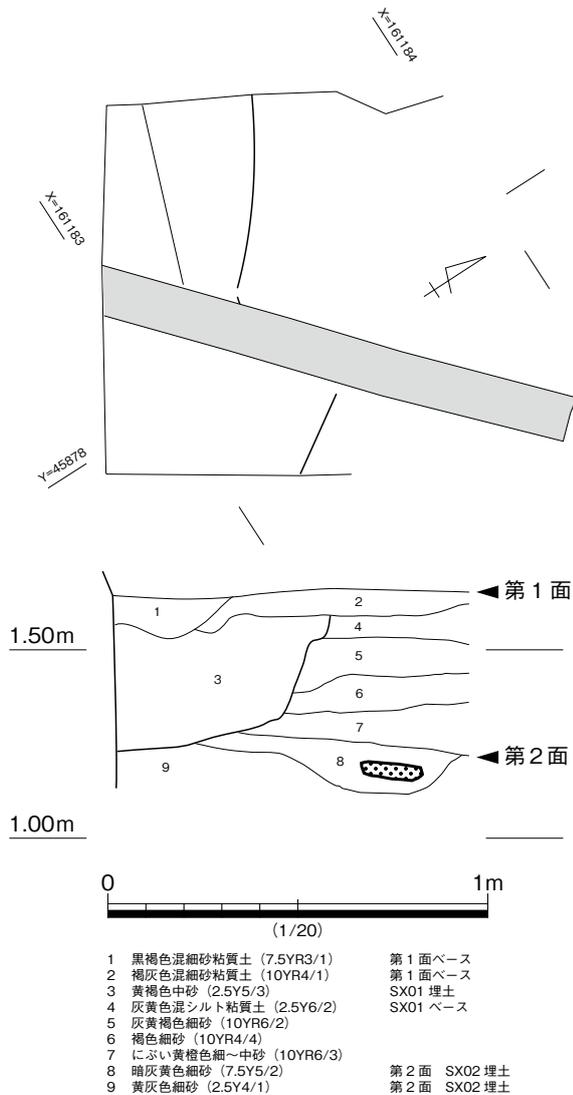


第28図 3次1トレンチ SP01・SP02 平・断面図

力掘削を併用し、特に造成土以下は人力による調査を行った。対象地に1トレンチ (1.5 m × 5 m) 及び2トレンチ (2 × 2.6 m) を設定した (第25・26図)。調査面積は12.7㎡である。

○1トレンチ (第27図)

調査地西半側に設定した南北方向のトレンチである。溝状遺構1条、柱穴2基、性格不明遺構3基を確認した。土層序は厚さ約0.5～0.8mの造成土があり、その下に近現代の面を確認した。なお、造成土以下はトレンチ西壁際で側溝を掘削し、状況を確認しながら作業を進めたが、堆積が水平であると想定して掘削するなどしたため、最終的な断面観察の結果得られた面の理解と若干齟齬が生じている。近現代面上では、花崗岩の角礫及び角柱石が確認できた。角礫は平坦面を上にして概ね等間隔に並ぶ他、角柱石の軸と平行に配置されることから建物の基礎としておかれた布石と束石であると考えられる。この設置面を掘り込んで埋甕が設置されているが大半が掘削範囲外へ出たため、形状・機能は不明である。西壁土層で柱穴と思われる



第29図 3次1トレンチ SX01 平・断面図

れるピットが観察できるが、平面で確認ができていない。第1面に帰属する遺構として調査したのはSP01・SP02・SD01・SX01である。

SP01 (第28図)

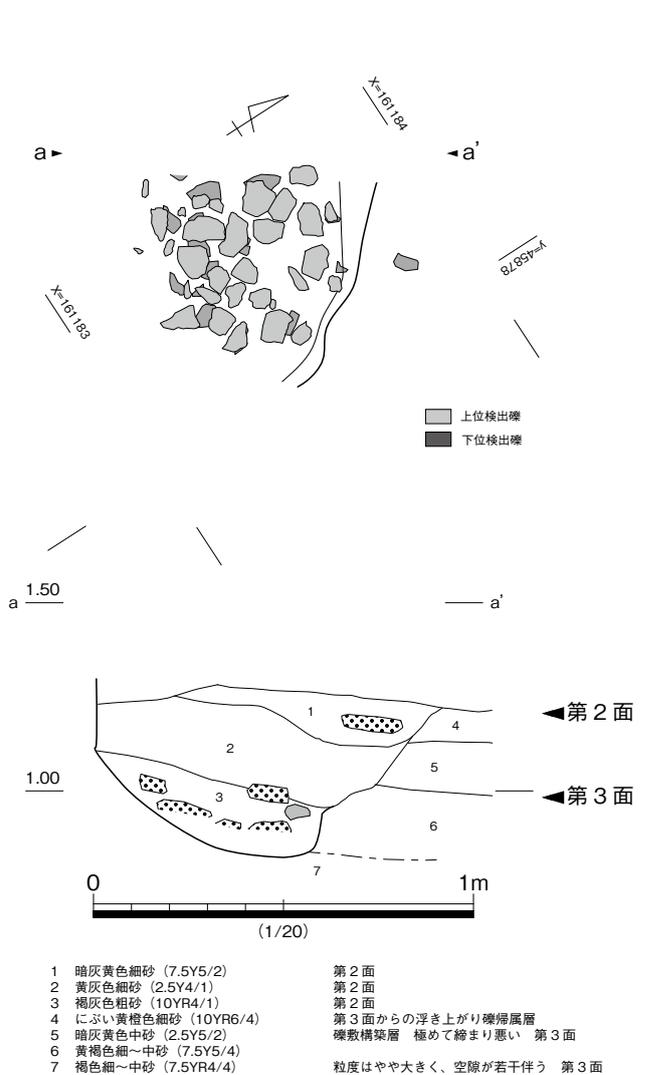
トレンチ南端で確認した。SX01の上から掘り込まれており、西壁1層に類似した埋土を持つ。途中までSX01として掘削したため、完全な平面形は不明である。深さは約0.1mを測る。遺物は比較的平滑な面を有する砂岩片が出土しているが、明確な時期を示すものがなく、遺構の帰属時期は不明である。

SP02 (第28図)

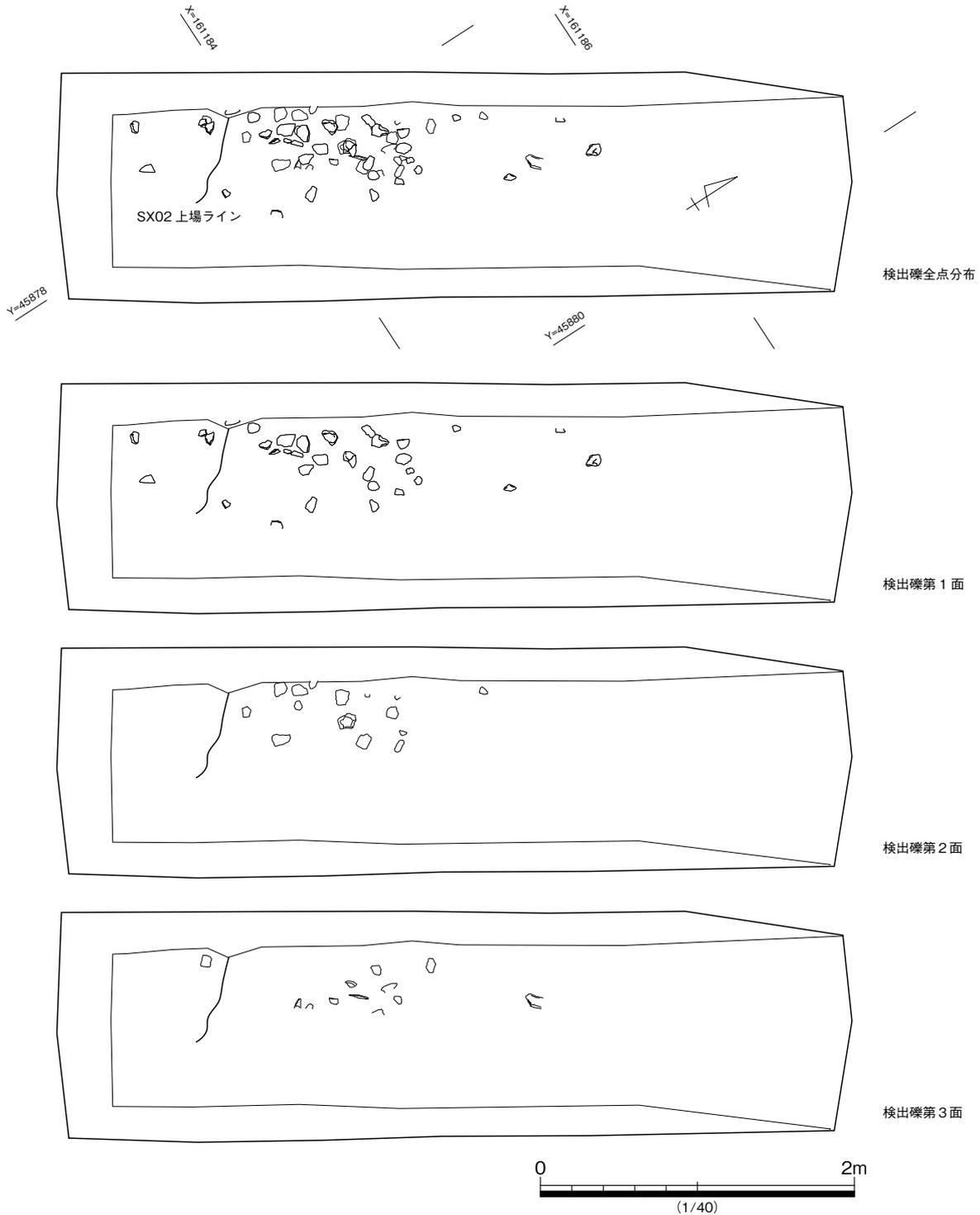
トレンチ南で確認した。平面の記録前に崩落し、十分な記録が取れていない。

SD01 (第27図)

トレンチ南端中央で確認した。埋甕の掘方により西側が削剥され、残存長は約0.6m、残存深度約0.04～0.28mを測る。溝底部は東側に比べ、西の埋甕側が大きく下がる。樹木根などの生物擾乱の可能性はあるが、出土遺物中にガラス片を含むため、近代以降に帰属すると考えられる。黒色の施



第30図 3次1トレンチ SX02 平・断面図



第31図 3次1トレンチ SX03 平面図

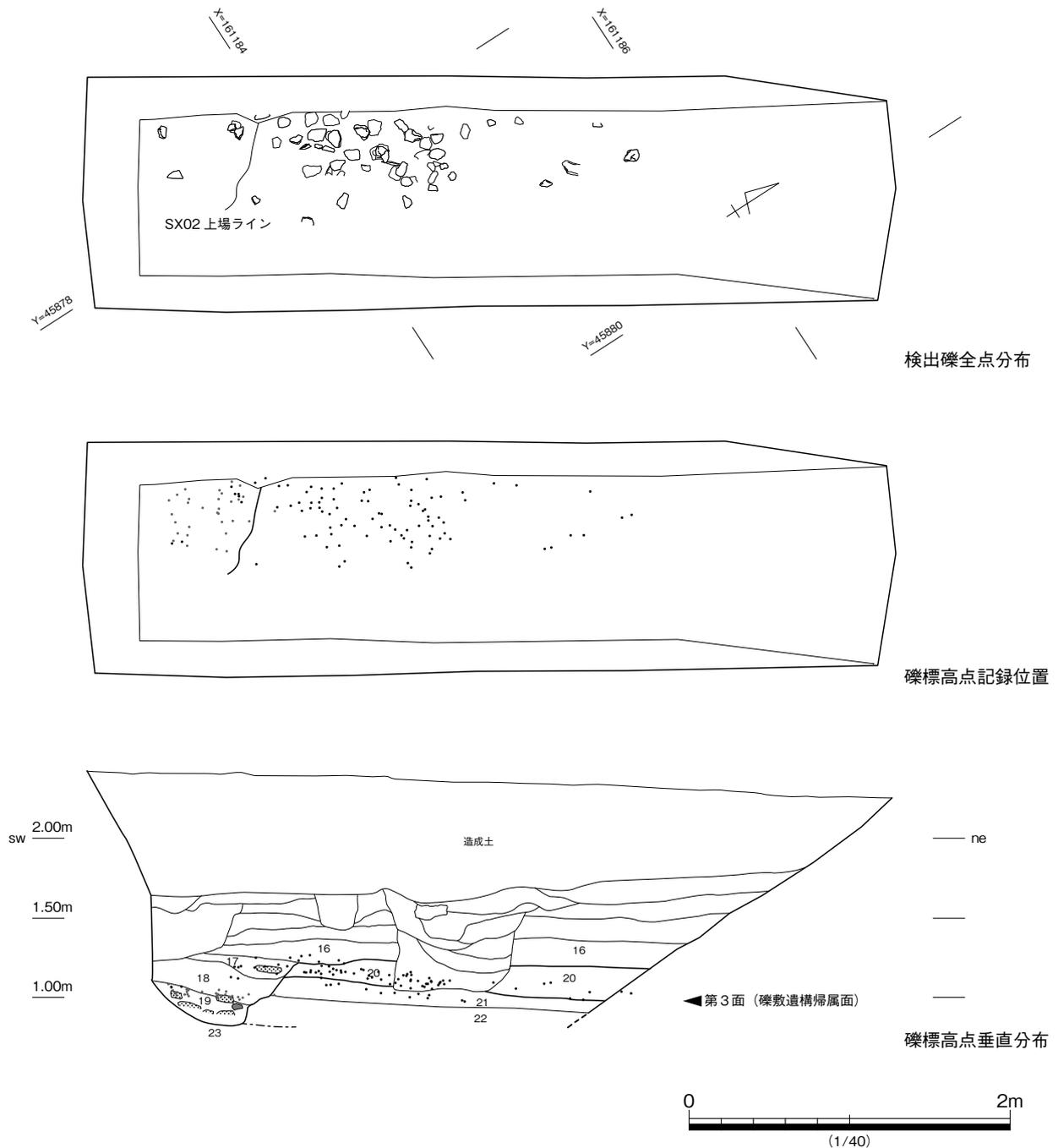
釉陶器碗（第37図1）を含む。
SX01（第29・37図）

トレンチ南端で確認した。検出した規模は長軸1 m以上、短軸最大約0.6 m、残存深度約0.35 mを測る。埋土は黄褐色中砂の単層である。出土遺物は微量で、近世以降のものと考えられる磁器の碗（第37図2）が出土しているが、埋土中にビニール片が含まれるため、近代以降に帰属すると考え

られる。

第2面は14～16層を除去した20層上面と判断した。

14～16層は細砂を中心とした埋土であるが、その下位の20層と比較して乾燥の進行が遅く、やや粘質を呈することから、粘土を混ぜて保湿力が上げられた旧耕作土層と判断した。この面ではSX02を確認した。

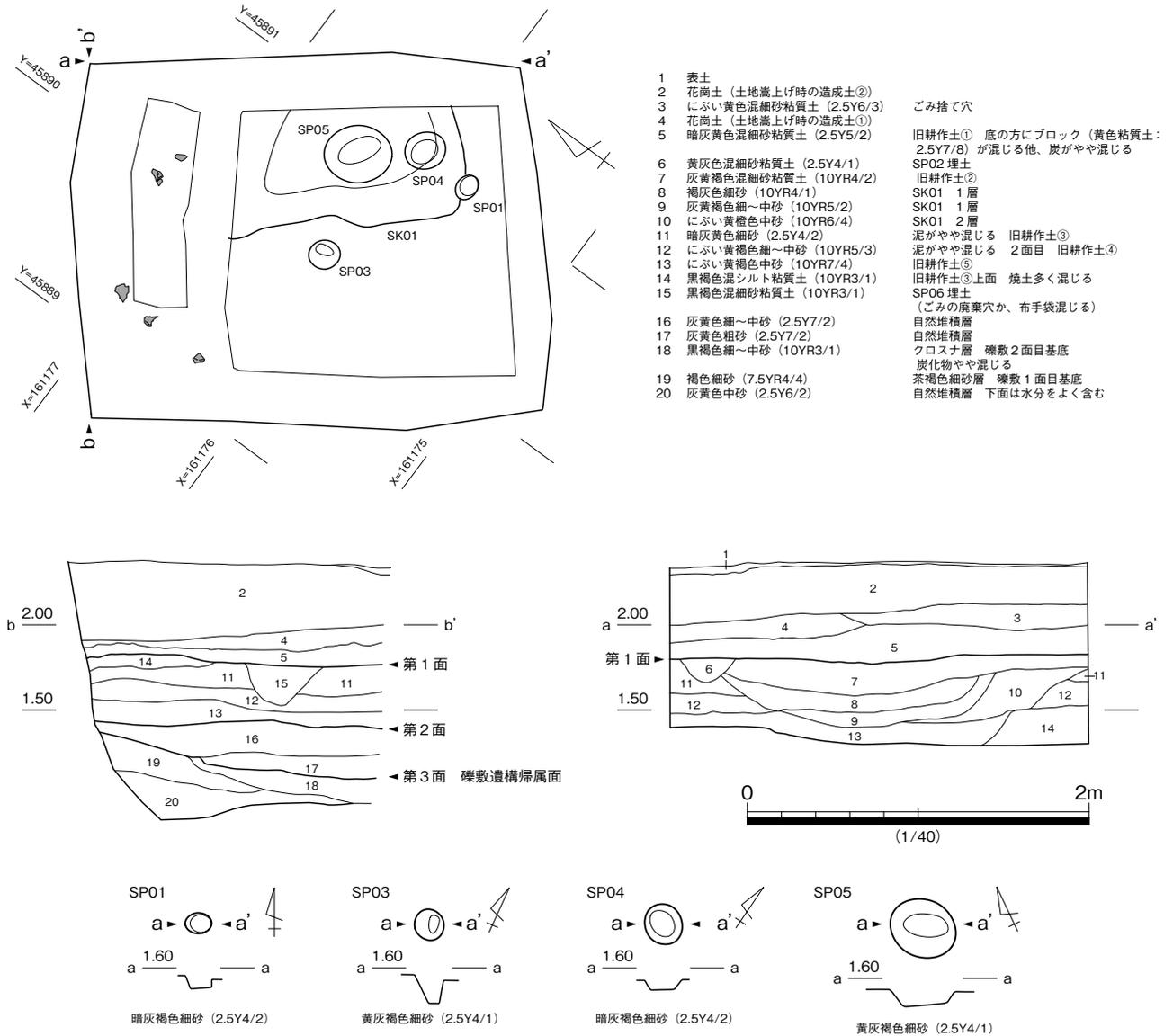


第32図 3次1トレンチSX03平面・礫垂直分布図

SX02 (第30・37図)

トレンチ南端で確認した。検出規模は長軸約0.7m、短軸約0.5m、残存深度は約0.45mを測る。後述するSX03の上位の礫の記録後、全体的に掘り下げる過程で、南端でSX03構成礫と同様な礫の集中を確認、密度やその周辺の埋土が異なることから再度精査した結果、SX03とは別遺構と判明し、SX02として調査を行った。SX02及びSX03の完掘後、トレンチ西壁で相互の関係を確認した結果、SX03を被覆する20層を切り込んでSX02埋土の17～19層が堆積することを確認し、SX03の南端はSX02を誤って掘削していた

ことになる。18層を除去した時点で検出した礫はSX03と比較すると密度が高く、比較的礫の標高もそろそろ。記録後、礫を取り除き19層を除去中に底部を覆うように礫が面的に出土した。南端と東西両端は確認できず、トレンチ外へ広がると想定できる。出土遺物は僅かで、埋土中からは瓦器椀(第37図3)、土師質土器杯、古墳時代のものと考えられる須恵器甕4が出土している。3は内外面に受熱に伴うと考えられる器壁の剥落が認められ、調整の観察がやや困難であるが、内面口縁端部から下方へ横位のヘラ磨き痕が観察できる。第3面は21層上面と判断した。この面の遺構



第33図 3次2トレンチ平・断面図

はSX03である。

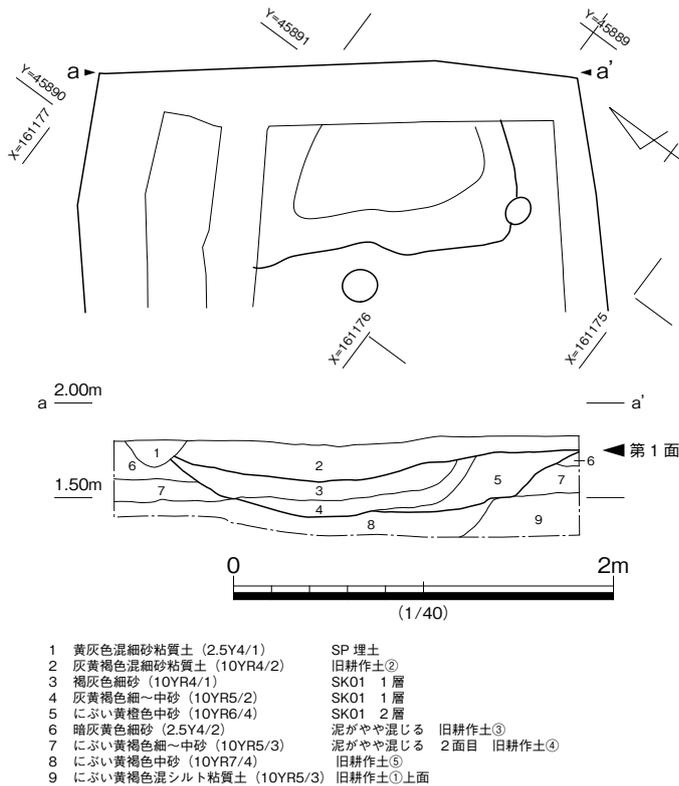
SX03 (第31・32・37図)

16層を掘削中、標高約1.2～1m付近で、主に赤色を呈する板状礫の散布を確認したため、礫を残しつつ周辺の砂を掘り下げた。約0.1m掘削した時点である程度のまとまりが確認できたことから一旦平面図を作成し、各礫の上面の高いところで標高を記録した後取り上げる作業を合計3回繰り返した。作成した平面図を重ね合わせると、礫の分布は、概ねトレンチの南半分に集中することが分かる。また、礫の標高点を立面にして土層断面に転写すると、概ね20層の中に集中するほか、21層の上面が北へ向けて緩やかに勾配を持つ(約4～6°)状況と概ね合致する。礫の帰属については、上層の16層及び下層の21層にも若干分布が認められるが、本来21層上面付近に敷き詰められたものが主体としてあり、上下層に分布するものは埋没過程で上下へ遊離した結果と考える。また、使用された石材は2次調査で確認さ

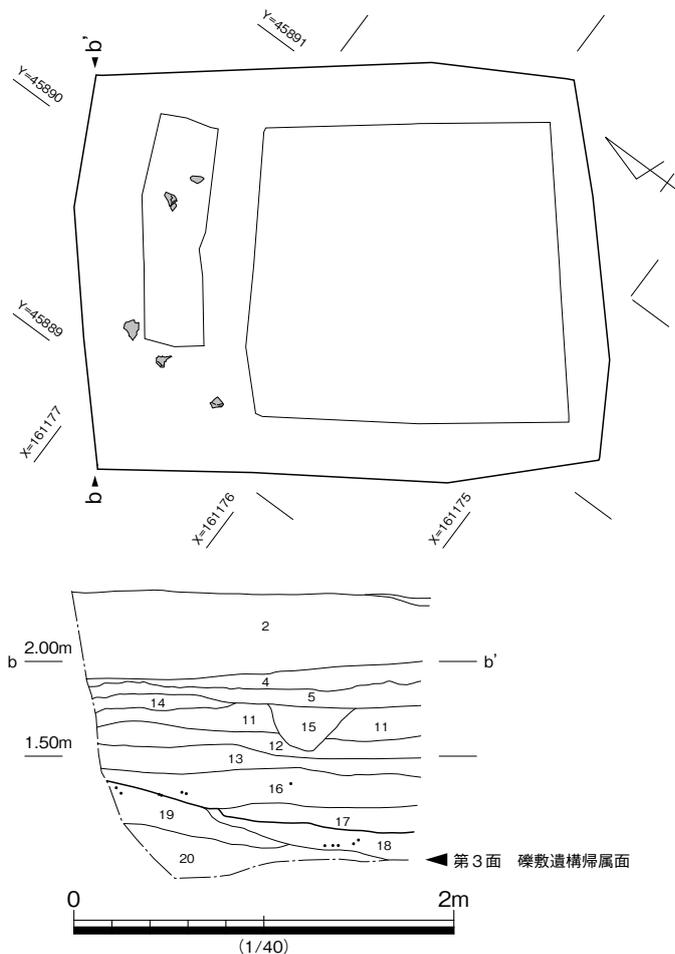
れた礫敷き遺構SX03を構成するものと同質と考えられる。これらの状況からSX03は、2次調査で確認された礫敷き遺構SX03と同様の遺構である可能性が考えられる。礫敷直上からは黒色土器椀(第37図5)、土師質土器椀6～8、須恵器椀9、土師質土器鍋10、礫敷遺構中から土師質土器杯11、器壁が著しく剥落した須恵器甕13、礫敷のベース土掘り下げ時に土師器甕12などが出土している。いずれも小片化しており、帰属時期を決定しかねるが、概ね12～13世紀頃の遺構であると考えておきたい。

○2トレンチ (第25・26・33・37図)

調査地東半側に設定したトレンチである。土坑1基、柱穴6基を確認した。土層序は0.4～0.5mの花崗土を主体とする造成土の下に旧耕作土があり、その下約0.1～0.2mで第1面に至る。この面で柱穴の可能性を持つピットが確認できるが、軍手などが含まれており現代の攪乱と判断



第34図 3次2トレンチSK01平・断面図



第35図 3次2トレンチ礫出土平・断面図

した。ほかの柱穴並びに土坑については標高1.50m付近で検出しているが、埋土の状況から見て本来は第1面に帰属していたものをだいぶ掘り下げた時点で認識したと考える。出土遺物は柱穴からは確認できていないが、SK01からは江戸時代末の瓶(第37図14)が出土しており、近世以降に帰属すると考えられる。ほかに土師質土器杯や瓦器碗の小片がみられるが、図示しえなかった。

西壁土層11～13層は1トレンチ14～16層に対応すると考えられる旧耕作土で、これを除去した16層上面を第2面とした。旧耕作土中には若干遺物が含まれ、土師質土器足釜18を確認した。

16層以下は西壁際で深掘りトレンチとして掘削した。基本的に自然堆積層と考えられる。16層で1トレンチ同様に安山岩の板状礫が少量出土したほか、18層下部からも微量出土している。これらは大半が19層上面(北側では20層)に概ね相当し、地形の勾配にも概ね合致する。ただ、1トレンチSX03のように礫敷として現位置に近い位置にあるものではなく、現位置を遊離したものの可能性が高い。

礫の検出の過程で出土した遺物については、土師質土器杯16、19層から須恵器甕15、土師質土器器種不明19・20、20層から国分寺楠井産の足釜底部と思われる格子目タタキを持つ土師質土器17などが出土している。

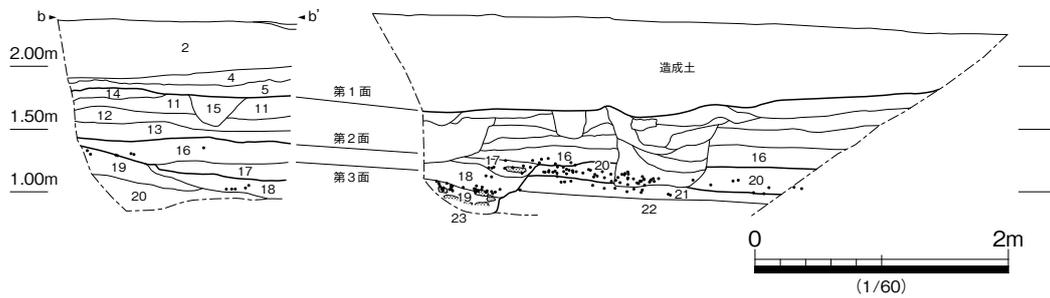
○小結

3次調査地では、中世前半期に帰属する可能性がある礫敷遺構SX03(以下SX303とする)が確認できる最も古い遺構となる(I期)。隣接する2次調査地において確認された礫敷遺構SX03(以下、SX203とする 香川県教委2003)と関連するものと考えられる。このSX203は報告書によると、北から北東へ緩やかに傾斜する灰色砂礫層からなる斜面上に、平坦面を上面に向けた礫によって構築されており、礫は砂礫層の凹凸を緩和させつつ斜面を被覆するように敷設されていた。礫敷の上面は部分的に薄い灰色中砂を介在しつつ、全体的には暗黒褐色粘質土が堆積する。検出面の標高は約0～0.2mであり、SX303よりも約1m低い。礫敷を構成する礫は赤色を呈するものが多く、SX303の構成礫に類似する。相互の距離は約15m離れており、相互の連続性についての確証は得られないが、SX303とSX203の比高差約1mと両者の距離約15mを元に、両者が連続するものと仮定し、礫敷上面の勾配を推定すると概ね4～6°となり、SX303の敷設面である21層上面の角度と類似する。このことから標高の低いSX203が汀線付近に構築されたもので、SX303は汀線からやや離れた位置に構築されたものである可能性がある。いずれ

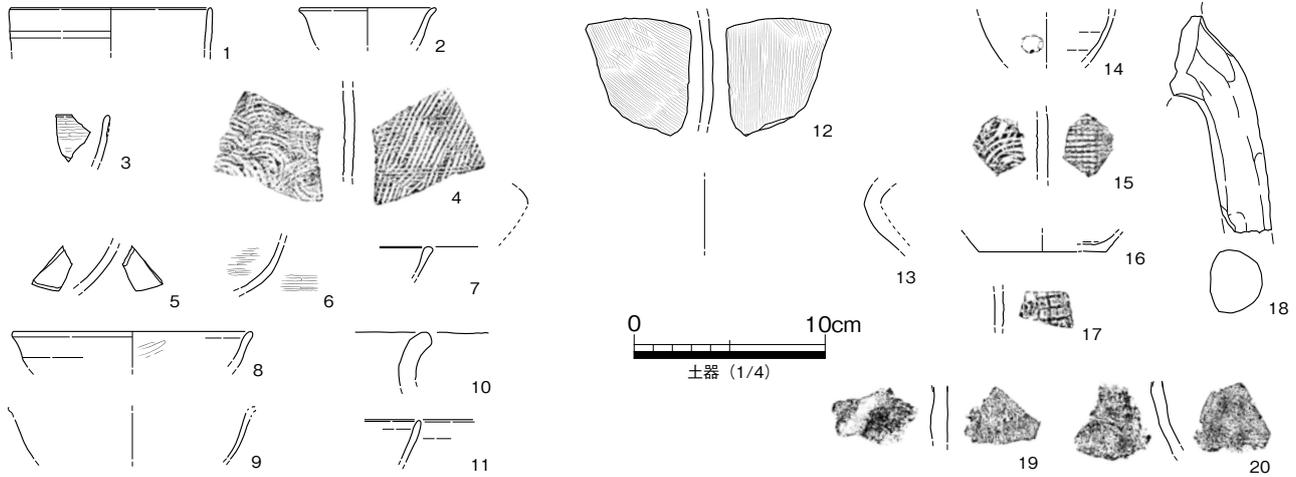
も砂碓の先端若しくは前面に構築された、足場の悪い砂地をいわば舗装のように扁平礫を付設して覆い、荷上場として使用するためのものと考えられる。同様の遺構は高松城跡（西の丸町B・C地区第7面）でも検出されているほか、島根県益田市所在の中津西原遺跡・中津東原遺跡などで確認されている。なお、2次調査の報告で礫敷き遺構を構成する安山岩礫は島外から搬入されたと想定されている（香川県教委2003）。

I期の礫敷遺構SX303廃絶後、これを壊して開削されたSX02をII期の遺構とする。耕作地化する時に周辺に遊離したSX303の構成礫を集積し

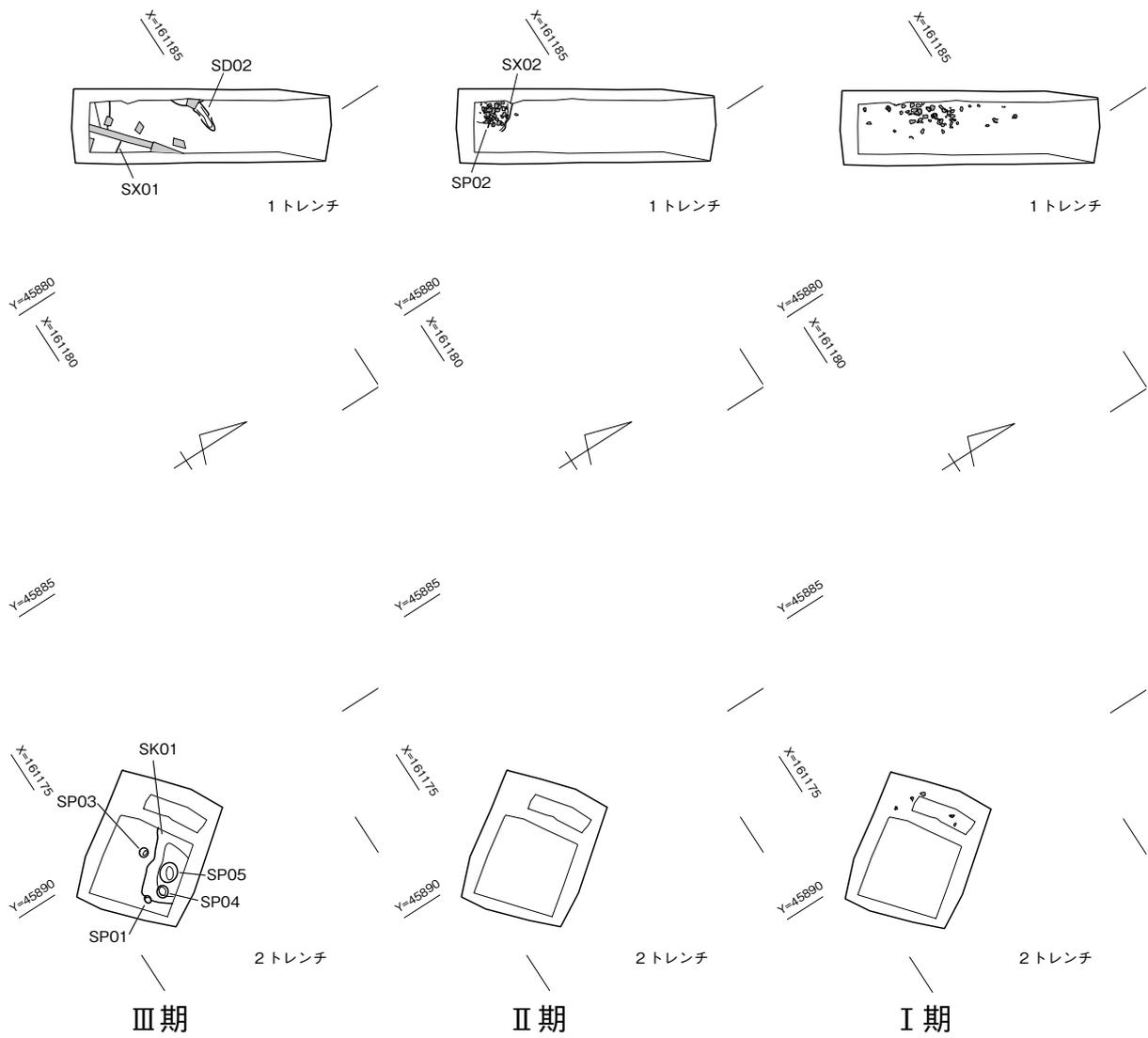
たものと考えられる。遺構の規模が不明であるが、比較的大きな穴に耕作の障害となる礫を集積し、廃棄したものと考えられる。瓦器碗や土師質土器杯の小片を含むが、礫敷を被覆する土の中に含まれることから、SX303より後出すると考えられ、遺構の時期を直接示さない可能性がある。その後、敷かれた耕作土の上に1トレンチではSX01・SD01が、2トレンチは検出遺構すべてが掘り込まれる。時期は近世より新しい時期と考えられ、これをIII期とする。



第36図 3次1・2トレンチ礫垂直分布図



第37図 3次調査出土遺物実測図



第 38 図 3 次調査遺構変遷図



写真 4 積浦遺跡調査前風景 (西から)



写真 5 1 トレンチ土層 (東から)

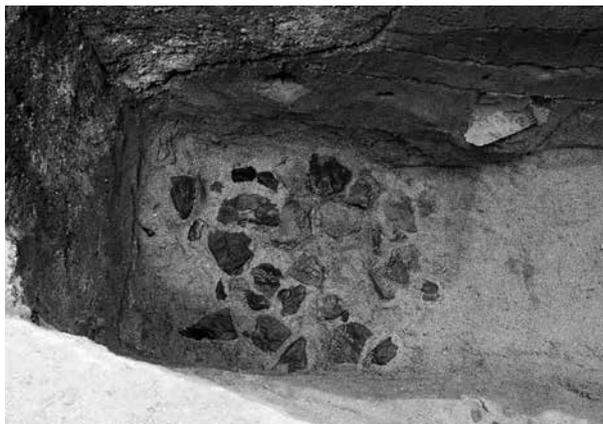


写真6 1トレンチ SX02 礫検出状況 (東から)



写真9 1トレンチ SX03 検出状況
2面目 (東から)



写真7 1トレンチ SX03 検出状況1 (北から)



写真10 1トレンチ SX03 検出状況
3面目 (北から)



写真8 1トレンチ SX03 検出状況2 (東から)



写真11 1トレンチ SX03 検出状況
3面目 (西から)



写真12 2トレンチ西壁土層（東から）

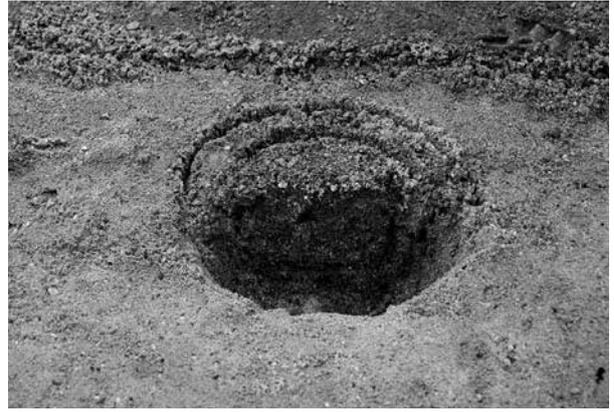


写真16 2トレンチ SP03 土層（南から）



写真13 2トレンチ北壁土層（南から）



写真17 2トレンチ SP04(西)・05(東)土層（南から）



写真14 2トレンチ SP01 土層（南から）



写真18 2トレンチ礫敷遺構検出状況（東から）



写真15 2トレンチ SP02 土層



写真19 2トレンチ礫敷遺構検出状況（西から）

第4章 総括

① 遺跡の立地と分布

2か年の踏査を経て町内の遺跡数は80件から99件まで増えた。遺跡の分布する島は従来通りであるが、井島・京ノ上臈島・家島・直島本島でその数が増加した。遺跡の帰属する時代は旧石器時代から近世にわたる。以下、各時代の状況を見てゆく。

旧石器時代の遺跡は井島・葛島・荒神島などで確認できる。遺跡の立地は丘陵頂部周辺で平坦面が広く確保されている部分である。この立地は備讃瀬戸の島しょ部に見られる状況と類似する。後期旧石器時代後半期から終末期に帰属するもので、代表例としては井島の鞍掛鼻遺跡が挙げられる。かつて発掘調査が実施され、「井島遺跡」として学史上に名が残し、サヌカイトを主体的に用いた小型剥片を素材とする「井島I型ナイフ形石器」やハリ質安山岩を使用した細石刃関連資料が出土している。今回の踏査でも、かつての調査地やその周辺から地表において同質の散布資料を認める。その散布には粗密があり、包含層の流出に伴う原位置を遊離した資料を差し引いても、比較的安定した平坦面の地表下には石器ブロックの残存が予測できる。また、特筆する点として、個人による収集資料で「典型的な湧別技法による細石核削片」と評価される玉髓を用いた湧別技法関連資料の存在が近年公表された（菅・光石 2023）。湧別技法は北海道や東北日本で使用された細石刃生産のための技術だが、これを携えた集団が直接中国地方へ来訪して定着している。旧石器時代人の行動には、石器石材産地等を移動ルートに取り込みながら、狩猟対象動物の移動などに合わせて行動する「遊動」と、本拠地を離れてそこへ回帰しない「植民」（稻田 2010）の大きく2パターンが想定されている。中国地方へ「植民」した集団は、玉髓の原産地である島根県花仙山を經由して中国山地に新たに拠点を設け、そこを中心に黒曜石原産地の隠岐やサヌカイト原産地の五色台などをルートに取り込んだ「遊動」により各地に足跡を残したと考えられる。香川県内では唯一、羽佐島遺跡に関連資料が出土しているが、これは使用石材をサヌカイトに置き換えた集団が残したものである。今回鞍掛鼻遺跡で確認できた資料は、中国山地へ植民した集団が直接井島を含めた備讃瀬戸を植民先とした結果残されたものか、中国山地を拠点に遊動する中で残したものにとらえるか、現在把握できている資料のみでは結論を出せない。羽佐島遺跡に残された資料は細石核2点と複数の削片が把握されているが、羽佐島遺跡以外の資料はサヌカイトを用いた資料を残した人々に先行する可能性がある。なお、直島群島ほぼ全体の丘陵頂部に立地する他の遺跡や未周知の地点においても風化の進んだサヌカイト片の散布が確認できる。今回の踏査で定型石器が確認できなかったため時代の判別が困難であるが、過去の個人採集資料などに旧石器～縄文時代の遺物が認められることから、当該期の遺跡が分布する可能性が高い。

これらの遺跡に残された遺物は、この地域を遊動した人々の足跡で、少なくとも鞍掛鼻遺跡は、旧石器時代研究史のうえで再び脚光を浴びる遺跡だろう。その他の島を含め、この地域の資料についての更なる研究が望まれる。

縄文時代の遺跡分布は、旧石器時代の分布と重なる部分に加え、直島本島南岸部、京ノ上臈島、荒神島南岸部で確認できる。土器を明確に伴うことが確認できているのは比較的まとまった資料が確認されている縄文時代早期の大浦台遺跡並びに中期から後期の資料が確認できる外が浜遺跡で、それ以外は石鏃などの石器の存在から類推しているが、構成資料に時期判別が困難な剥片や碎片を含むことから、旧石器時代から縄文時代の遺跡として幅を持たせている。荒神島や井島では有舌尖頭器の採取が報告されており（菅 2020）、土器は伴わないものの縄文時代草創期からその痕跡が確認できる。続く早期は先述した大浦台遺跡のほかに、琴反地の東側丘陵部で縄文時代早期の土器が採集された記録がある。前者は遺跡が立地する丘陵上で、発掘調査や分布調査により当該期の土器・石器の他、ヤマトシジミやカキの貝殻などがまとめて出土することが確認されており、一定期間の滞在が想定できるが、遺物の量からみると長期滞在ではなかった可能性がある。後者については現地での資料確認が出来なかったため、遺跡登録に至っていない。今後、資料増加を待つ必要がある。前期は明確に判断できる資料がない。続く中期・後期は外ヶ浜遺跡で確認できる。晩期の資料についても明確なものが確認できない。縄文時代にはヒトの活動は断続的に確認できるのみで、長期にわたる定住はなかった可能性が高い。

続く弥生時代の遺跡の分布は直島本島・荒神島・葛島・井島などで確認できる。くらは遺跡・おかもめ鼻遺跡・外が浜遺跡・横防遺跡・荒神島遺跡・風戸山西遺跡・戸尻鼻遺跡が該当するが、少量の遺物散布を確認するのみで実態が不明である。弥生時代前期のものは、直島町史に掲載されている海揚がりの資料の壺が確認できるが、陸上では確認できない。踏査資料中では風戸山西遺跡で中期中葉から後期の資料が出土しているほか、積浦遺跡や家島のはしもと畑遺跡並びに家島港東浜遺跡でもわずかながら遺物が認められる。弥生時代後期中葉の製塩土器を伴う例が多く、土器製塩に関する遺跡である可能性が高いが、製塩土器を除き全体的に確認できる遺物量は少なく、長期に継続する集落ではなく、小規模で存続期間が極めて短いものであったと考えられる（信里 2022）。

古墳時代の遺跡は前期から後期まで確認できる。古墳の埋葬施設は箱式石棺を伴うものが多く、前期の荒神島古墳、風戸山西古墳、中期の葛島古墳群等がある。後期～飛鳥時代前半にかけて築造された横穴式石室を埋葬施設として持つ古墳は、牛ヶ首古墳・喜兵衛島のキヘエ1～16号墳、京ノ上臈島1～5号墳、井島の一本松古墳が挙げられる。京ノ上臈島1～5号墳は現地を確認でき

ていないが、過去の記録を見ると他のもの比べて墳丘も石室も規模が小さく、比較的大型の石材を用いる他の横穴式石室墳とは様相が異なるようだ。立地の特徴としてはいずれも丘陵の先端や頂部など、海が視野に入る位置に築造される。井島の北岸や喜兵衛島南岸、牛ヶ首島南岸、喜兵衛島北西岸、葛島東～南岸、荒神島北岸といった古墳が立地する場所は、現在でもその前面では特に干満で潮が動く際、潮流が早く、古墳時代においても同様であったと考えられる。その立地上、製塩に関する集団の首長墓として考えられることが多いが、各時期の古墳築造時期と主たる製塩遺跡の操業時期に差があり、喜兵衛島製塩遺跡を例に挙げると、古墳の築造の方が製塩遺跡の操業時期よりも早い。盗掘されたものが多く、副葬品などから母体となる集団を想定するのは困難であるが、海上交通や漁労等を生業とした集団の首長墓の集合体の可能性が想定できる（信里 2022）。

古代についてはいくつかの遺跡で遺物の散布が確認できる程度である。ただし、前代から引き続き製塩関連遺跡が確認できる。今回の踏査ではくらは遺跡・局島遺跡A地点・はしもと畑遺跡などで当該期の備讃Ⅶ式と考えられる製塩土器の小片が確認できた。現況では小片が少量散布するにとどまることが、かつてはくらは遺跡・はしもと畑遺跡などで土器層が観察されており、ある程度の規模の土器製塩が営まれていたと考えられる。はしもと畑遺跡では8世紀代のものと考えられる須恵器坏がわずかに出土しており、土器製塩を担う人間が一定期間生活する空間があったとみられる。また、当該期の製塩土器片の確認は出来なかったが風戸山西遺跡でも8～9世紀代のものと見られる須恵器坏などが出土しており、同様の空間が存在した可能性が想定できる。

中世の遺跡は限られていたが、過去の調査成果等を踏まえ精査すると、やや数が増加した。新規確認遺跡の家島北西浜遺跡や京ノ上嶋島東浜遺跡で中世のものと考えられる土師質土器類が確認できた他、喜兵衛島において、喜兵衛島遺跡調査団による調査で確認された、9号墳出土の和泉型瓦器碗（13世紀前半・中葉）及び土師質土器鍋や、南東浜1区テラスでの吉備系土師質土器碗（13世紀中葉）（『喜兵衛島』刊行会 1999）、また、今回の踏査における北西浜の東半での瓦器碗片や、西側の浜での土師質土器足釜の確認事例がある。喜兵衛島の南東浜を除き、遺物の散布が確認できる場所は浜の後背地が狭く、居住に向かないと考えられ、浜の利用について別の形態を考える必要がある。漁労の簡易な拠点や小型船舶の風待ち・汐待ちなどによる一時的な滞在の場が想定できる。また、積浦遺跡については、遺跡が立地する東西に延びる砂堆の中央から西にかけての3地点で過去の事例も含め、発掘調査が行われたことで地下に包蔵される遺構・遺物の状況が確認できた。詳細については後述する。

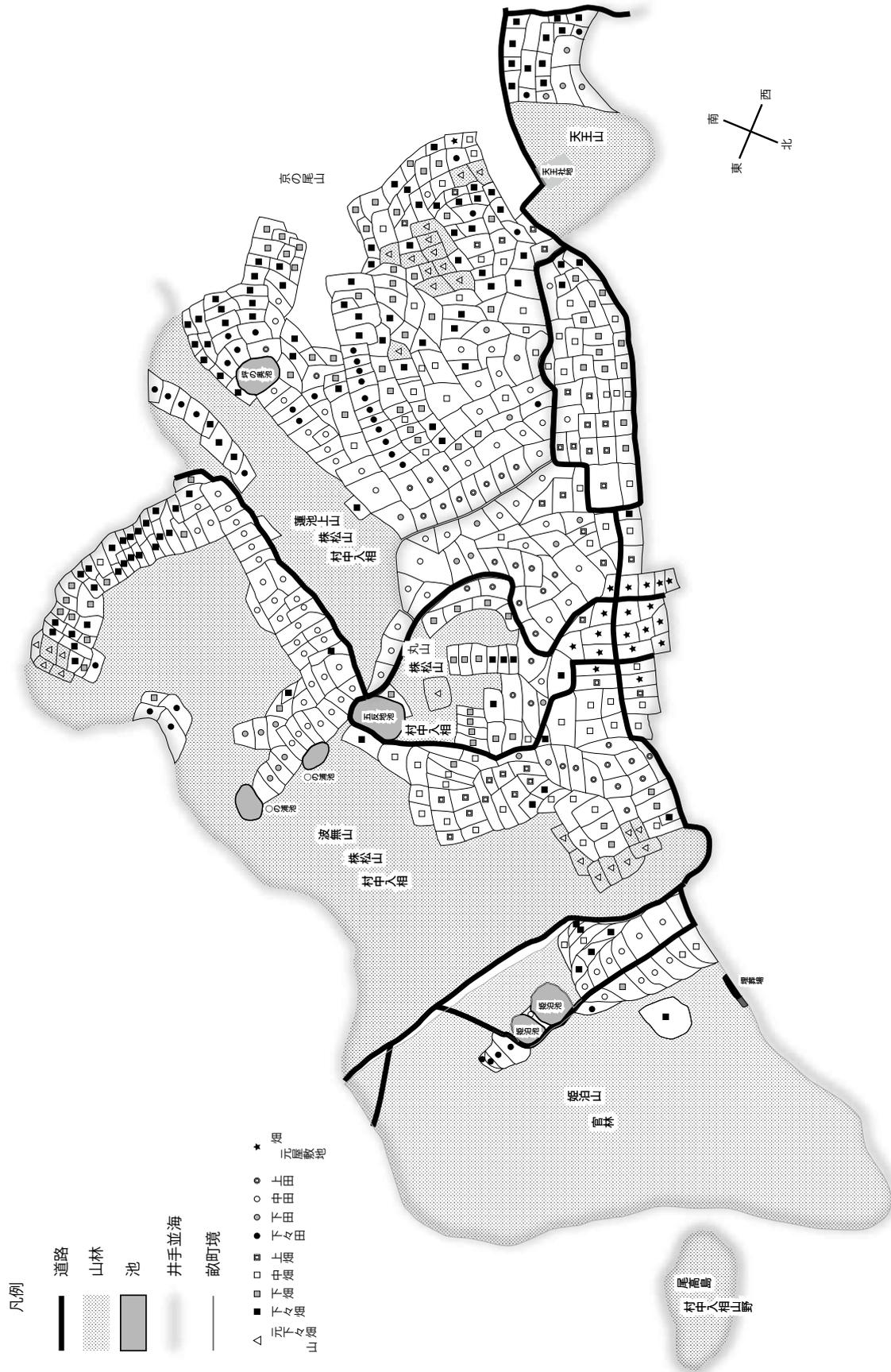
近世については今回の調査では目立った成果は得られなかったが、本村集落内で18世紀遺構の土器・陶磁器類が採取されている（佐藤 2023b）。

② 積浦遺跡について

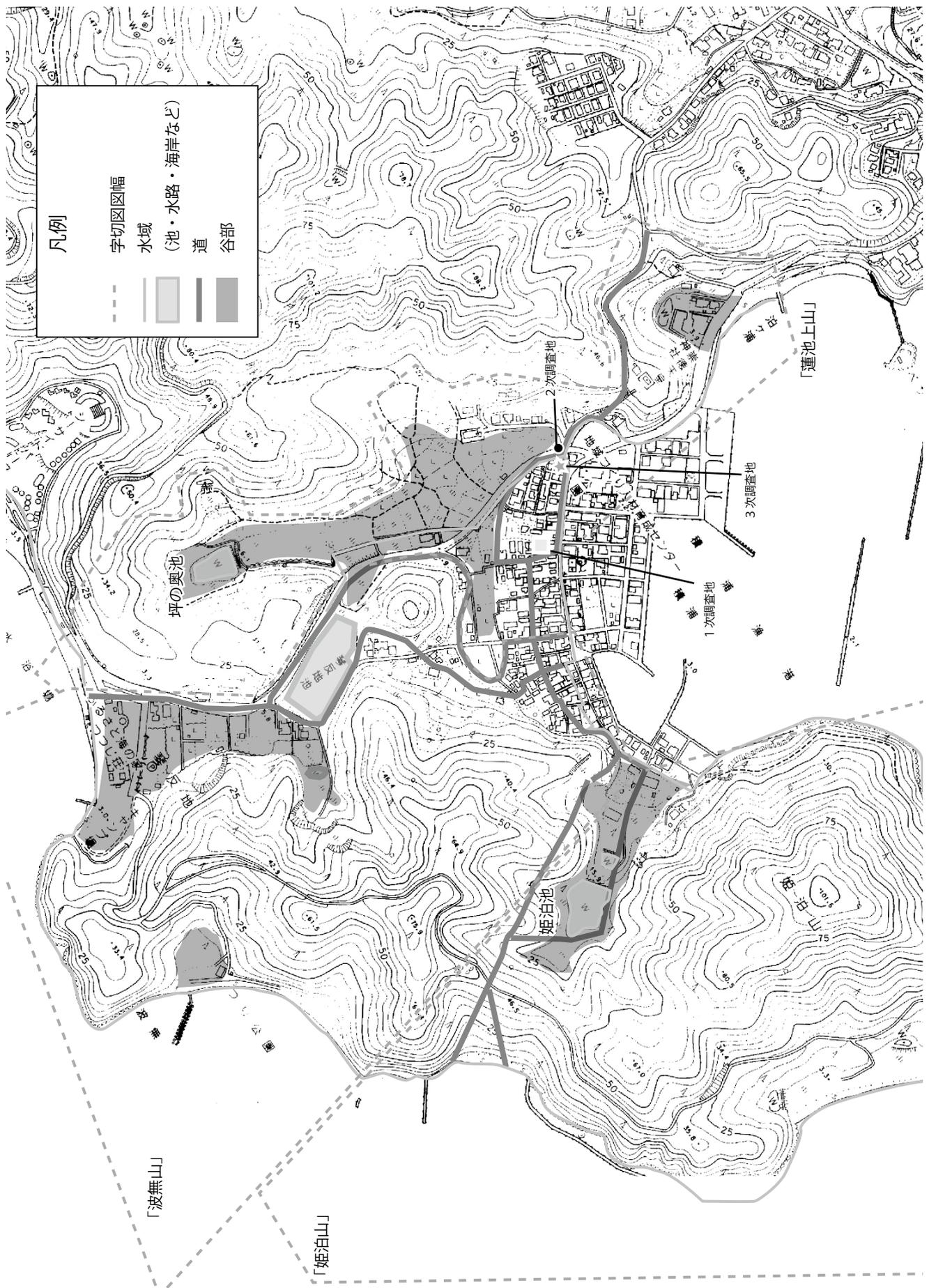
先に触れたとおり、本遺跡は東西に延びる長さ

約300m、幅約100mの砂堆上やや西寄りに立地する。遺構についてはすでに触れたとおり、1次調査で確認できた柱穴や性格不明遺構から想定される12～14世紀の集落と、2次調査で確認できた15～16世紀の石積み遺構とその下位にある12～13世紀の礫敷き遺構SX203、3次調査で確認できた12～13世紀の礫敷き遺構SX303から想定される砂堆先端部に形成された港湾施設である。1次調査地点は調査地の中で最も東に位置するが、想定される砂堆の中央からはやや離れた位置にある。確認された遺構の規模や密度、標高などが十分把握できないが、各グリッドの下位に黒褐色土が確認できる。これは砂堆が安定した結果、砂堆上面に形成された腐植土層と考えられる。量的には少ないが弥生時代のものをはじめ、古墳時代前期以降中世までの遺物が含まれており、長期にわたり生活面として安定して使用されていたことが伺える。この黒褐色土層は2次・3次調査では確認できない。これについては、2次調査地点が、潟湖の出口付近に位置し、礫敷き遺構構築から石積み遺構構築に至るまでに地形の傾斜面の方向が北から南のものから西から東へ変化するなど、その部分の堆積環境から一定しない環境下であったため、また、3次調査地点は、礫敷きの上下面の堆積状況から、当時の砂堆先端の海水面から離水していたと想定しているが、潮位の上下動により黒褐色土層が流失する環境であったためと想定される。しかし、その頻繁な地形変化に対応しながら、施設が維持されていると言える。

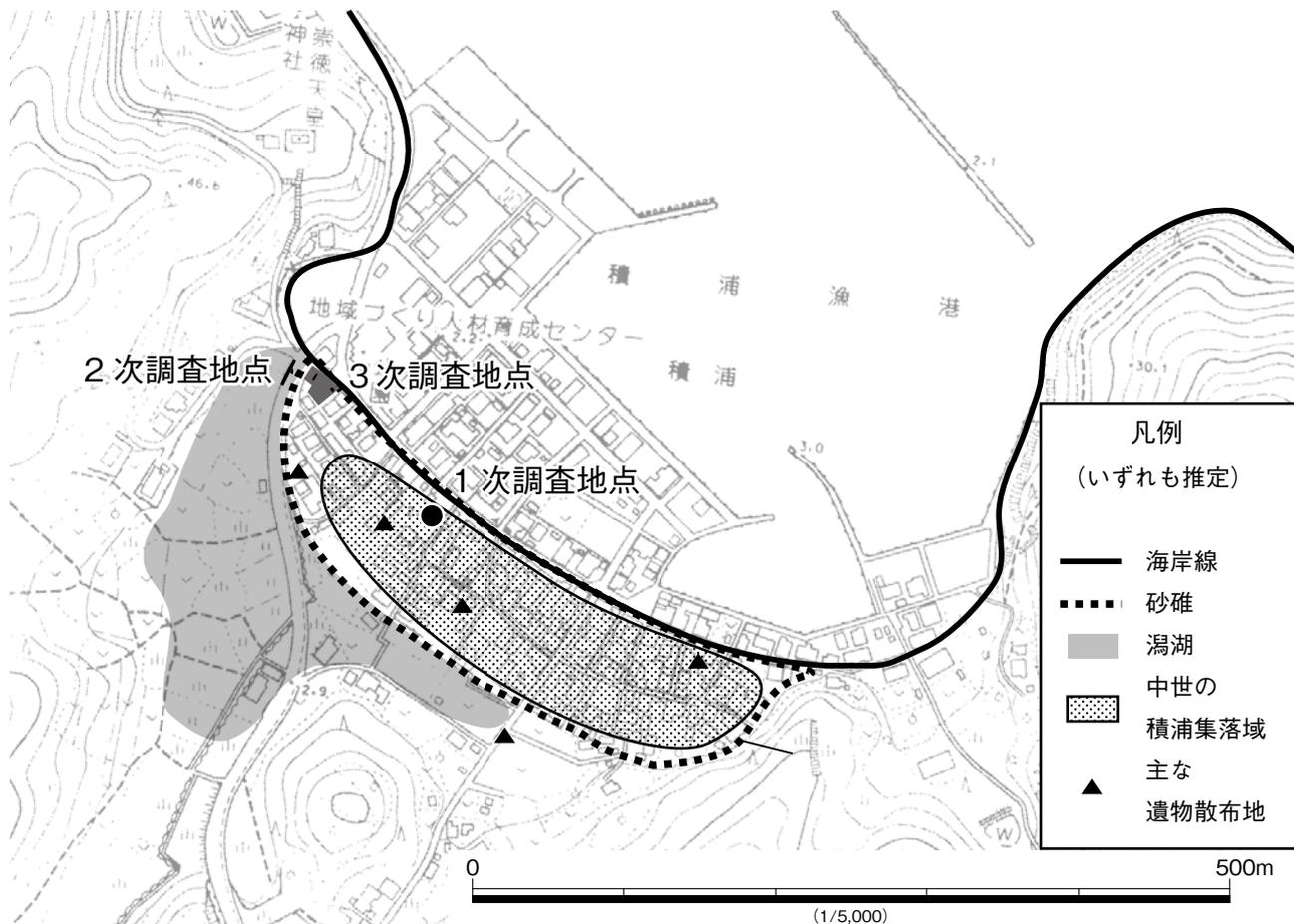
遺物量については、最も東に位置する1次調査地点の遺物量が圧倒的に多く、次いで西側の2次調査地点、遺物量が最も少ないのが3次調査地点である。1次地点が比較的安定した環境にあったことを裏付けるといえる。2次調査の遺物は多くが水成堆積層に含まれるものと考えられ、1次調査の遺物の残り方とは異なると考えられる。3次調査で遺物がほとんど確認できなかったのは、集落域がそこまで及んでいない他、SX303の廃絶後、長期にわたり潮の干満などで流失するなど遺物が残存しにくい環境であったためと考えられる。1次調査の遺物には楠葉型瓦器碗や和泉型瓦器碗、山茶碗、東播系須恵器、京都系土師器、常滑産甕等、近畿以東からの搬入品が認められるほか、青磁・白磁などの輸入陶磁も若干確認でき、2次調査で指摘された傾向と合致する。分布調査成果からみると、現在の積浦集落のうち、砂堆上に立地する部分では12世紀後半～16世紀にかけての遺物が散見される。1次調査地点の南東約70m程の地点は、想定される砂堆のほぼ中心付近に相当するが、古墳時代～中世にかけての遺物が多数採取されているほか、五輪塔の残欠が祀られているのを確認できる。この南側直近でも弥生時代中期後半の土器が採取されており（佐藤 2023b）また、西約30mの地点の畑からは、図示していないが、出土状況が不明であるが、脚部を欠くもののほぼ完形の足釜や完形の皿が数点出土している。一括出土であれば埋納遺構に伴う物とも考えられる。また、積浦の集落から琴弾地池の東を抜けて浜へ通じる道の脇、標高約4m付近にある畑でも白磁碗を採取しており、砂堆上のみならず、砂堆の付け根付



第 39 図 名東県時代字切図（写真トレース後、記載内容を記号化して掲載）



第 40 図 現在の地形図へ反映させた名東県時代字切図



第 41 図 中世期の積浦遺跡想定範囲

近の標高のやや高い丘陵裾にも集落が展開していた可能性が想定できる。また、近代初頭の史料になるが、瀬戸内海歴史民俗資料館に保管される文書に長く直島の庄屋を務めた三宅家に伝わる『三宅家文書』がある。その中に、村政に関わる文書として明治6(1873)年2月20日から明治8(1875)年9月5日にかけての名東県時代下にあった直島の字切図がある。これには土地所有者名や土地の用途が記入されており、近代初頭の直島における各地区の土地利用状況を把握するための参考になる。積浦周辺については(姫泊山-官林、尾高嶋-村中入相)、(波無山・丸山-村中入相)、(蓮池上山-村中入相、天王山)の3幅が相当する。これらを写真トレースし、その土地の利用状況を記号に置き換えたのが第41図である。また、この中の池や道を現在の地図と対比させたものが第42図である。なお、原本の図中の凡例は「道路」「山林」「池」「井手並海」「町畝境」のみで、田畑や宅地の別はいずれもその区画の中に文字により表記される。田畑はともに上~下々の4つの等級に区分される。表記は「地番・地目・面積・所有者名」の順で記載されるのが基本だが、これとは別に地番表記の後に「元下々畑・面積・山・所有者名」の記載があるものと、「畑・面積・所有者名・元屋敷地」とあるものが認められる。「元屋敷地」の表記があるものはいずれも地目が畑とある。これを文字通りとらえると宅地が存在しなくなる。

同時期の本村の図も記載方法は共通しており、戸長を務めた三宅頼吾の屋敷も同様の表記を用いていることから、「元屋敷地」は宅地として解釈した。以上をもとに改めて第41図を見てみると、1次調査地点付近は、第41図の西寄りにある島状に道で囲まれた区画のうち「上畑」が集中するあたりと想定している。周辺は畑地として利用されており、地盤がやや高く安定したところであったと想定できる。また、2・3次調査地点は島状の区画の西端に相当すると考えられるが、この一帯は「下々畑」となっており、土地条件があまり良くなかったと想定できる。これはこの南側にあるかつての濁湖の開口部に相当すると考えられる。島状の区画の南側には「五反地池(琴弾地池)」並びに「坪の奥池」から流れ出る水路が海へ出てゆく位置にある。この図中では、砂堆と想定される部分は概ね畑として、濁湖が想定できる部分は水田としてそれぞれ利用されている。図中左(東側)には★印が集中する箇所が認められ、「元屋敷地」、つまり、宅地が集中していたことを示すと考える。これは現在の積浦集落の東寄りの位置に相当し、昭和30年代頃まではこの一帯に人家が集中し、島状の区画は農地であったことがこの頃の航空写真から観察できる。このことから、1次から3次調査地のある砂堆西半部は、12世紀以降15~16世紀頃までは環境の変化に対応しながら港湾施設が維持され、近接した位置に集落が営まれたと考

えられる。その後、19世紀半ばまでの間に耕地化されたと考えられる。この間の砂堆東部の動向は不明で、西半部と一体として集落地として機能し、16世紀以降に集落の規模が縮小し東半部に偏ったのか、集落の中心が東へ移ったのかは現状で判別は困難である。遺物の散布状況から考えると前者であったと考えておきたい。この時期までは明確な規模は不明だが、物流の拠点的な性格を持っていたと思われる。

次に、物流の拠点として機能したであろう、積浦遺跡の港湾施設について若干検討する。直島町内の海浜部では直島の琴反地や倉浦、外が浜、ヘキ、御恵ヶ浜、喜兵衛島の北西浜、京ノ上臈島の北側浜、家島の西側浜、向島の北側浜が比較的遠浅であり、積浦と同じような海底地形であると考えられる。こういった地形を利用した大小の港が形成されていたと考えられるが、その多くが漁業等の生業に関わると同時に、臨時の風待・汐待の港として機能していたのではないかと考えられる。例えば、喜兵衛島の北西浜東半では浜の後背部に浅い幅広の谷があるが、踏査時に谷の出口で雨水等を起源とすると思われる湧水を確認した。満潮時には海水面下に沈む浜であるため、常時浜が使えるわけではないが、給水などで立ち寄り場所としての利用なども想定できる。なお、本村の高田浦については協働した四国村落遺跡研究会が実施した略測（佐藤 2023a・b）により、急勾配で深い港域をもつことが確認されている。慶応2（1866）年に記された『直嶋旧跡順覧図会』では本村の高田浦について、「九州地は素々北國東國の大船、晨に夜に錠を下」す、「當國第一の湊」と評され、周囲を島影に囲まれ大風が遮られる立地から、風待のため大型船が停泊できる港であったことが伺える。一方、同書における積浦については「田畑人家数多あり」の記載があり農村として開けていたことが伺えるが、港湾施設については触れられていない。むしろ、丘を越えた南側の五反地（琴反地）が鯛網の市で栄えた記載の方が目立つ。少なくとも天正10（1582）年以降、直島・男木島・女木島の領主であった高原氏の居城である高原城の存在、17世紀中葉には直島で廻船業が盛んであったこと、延宝8（1680）年成立の「海瀨舟行日記」の記載に記された高田村と積浦の家の件数（高田村120軒、積浦7軒）など（以上、直島町役場1990）から少なくとも17世紀頃には物流の拠点としての機能は積浦から本村へ移っていたと考えられる。直島の港湾施設の在り方を伺う良好な記録であろう。

③ 積浦遺跡の土錘について

最後に積浦遺跡で得られた資料から、もう一つの性格を書き出しおきたい。今回図示しえなかったが、各調査地点から漁網の錘として用いられた土錘が出土している。特に1次調査での出土数が多く、各グリッドから出土した土錘の内、概ね原形を保つものは112点ある。大きく分けると管状を呈する管状土錘と、平面楕円形を呈し両側面に溝を持つ有溝土錘が認められる。前者は46点、後者は76点確認できる。前者は弥生時代前期から、後者は古墳時代中期からそれぞれ出現し、ともに近現代まで使用され、単体で使用時期の決定

は困難である。比較的まとまって出土しているのはAグリッドの第3層下層である。得られた資料が限られるため、柱穴や性格不明遺構などの遺構はあるが、いずれも時期を決定しにくく、遺構外資料も多いことから、全ての資料を遺物の主体を占める中世前半期のものと仮定しておく。土錘から得たい情報は、その用途にある。真鍋によると土錘の重量及び孔径（溝幅）が分類の指標となることが指摘されている（真鍋1993）。錘を装着する網の径は網の強度と関連があり、網の強度は操業人数とも関わることから、網の強度を示す抗張力が網の直径の2乗に比例する関係にあることを用い、土錘の孔径（溝幅）を網の太さに置き換え、この2乗値を網の操業単位の指標とした。さらに土錘の長さを最大幅で除した数値（P）が、民俗例などから漁網の用途に関連することを元に、以下のように土錘の分類の基準とした。

刺網 Pの数値幅 大（投網も含まれる） a類
その他 Pの数値幅 小（曳網） b類

これらの基準を元に、出土した土錘についてグラフ化した（第44図）。

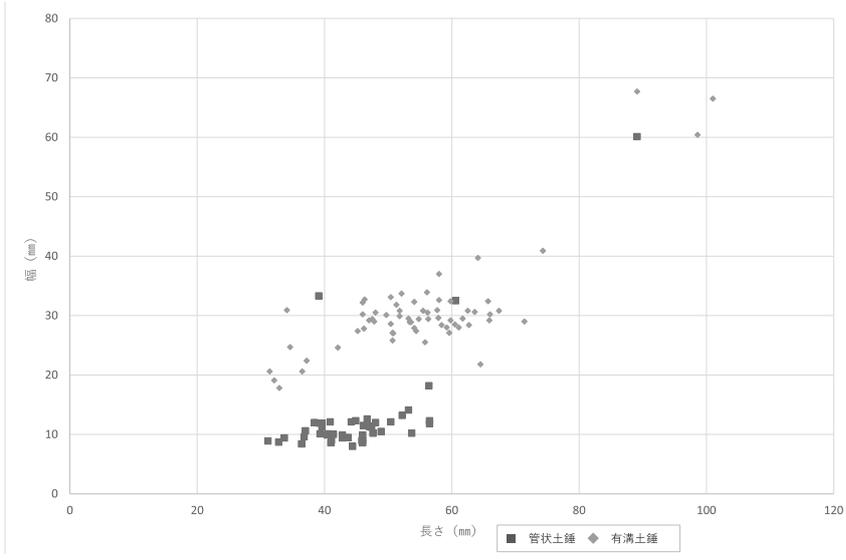
管状土錘は大半が真鍋の分類による $L \leq 0.25$ のA a類がほとんどで、 $L > 0.25$ のA b類は4点のみである。また、P値はA a類が3.2～5.3、 $L > 0.25$ は1.1～3.1の幅があり、刺網用のものが主体で曳網用のものは少量であると考えられる。なお、A a類の重さは9g以下であるのに対し、A b類は重さ18g以上となり、うち1点は280gを越す。

一方、有溝土錘は $L \leq 0.25$ のC a類が13点、 $L > 0.25$ のC b類が52点である。P値についてはC a類が1.1～2.2、C b類は1.3～2.9となり、形態的にはあまり差が見られないものの、刺網用が若干ありつつ、大半が曳網用のものとなると考えられる。重さについてはC a類では約9g～54gの幅があり、大半が30g未満であるのに対し、C b類は30g未満が1点あるほかは30g以上116g未満の幅があるうえ、250g以上350g未満のものが3点ある。P値とL値の相関を見ても、概ね0.06～0.16と近似したL値を持ちながら長幅比3:1～6:1の幅を持つ管状土錘と、0.09～0.72とやや幅を持つL値を持ちながら、長幅比2.3:1～1.4:1の幅を持つ有溝土錘がそれぞれ有意にまとまる傾向にあることが分かる。

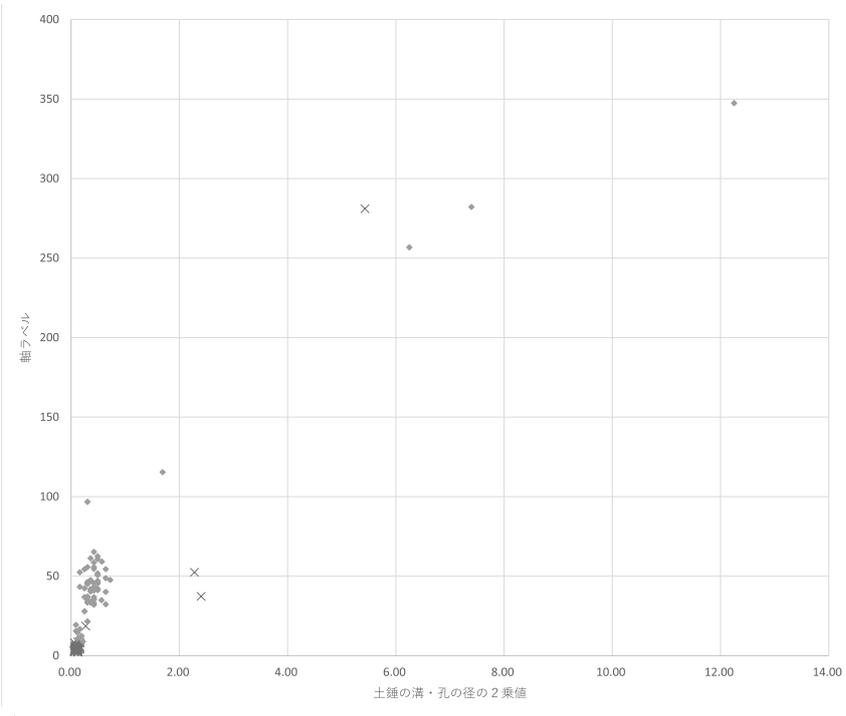
これらからは主に0.5cm以下の沈子網を用いた刺網や1cm未満の沈子網を用いた曳網による小規模な操業形態が想定できる。一方で、管状土錘・有溝土錘ともに少量ながらL値が1以上、特に5以上を示し、P値が1～2の幅に収まる250gを超える大型品が認められることから、2cmを超える太い沈子網と重さを必要とする大規模な操業形態の存在も想定できる。近世の事例にはなるが、延宝5（1677）年の直島の浦毎の漁船の数が記録にあるようで、総数37隻のうち、高田浦の20隻に次いで11隻が積浦にあったようで（直島町役場1990）、積浦の漁村としての機能は高かったと見られる。

④ おわりに

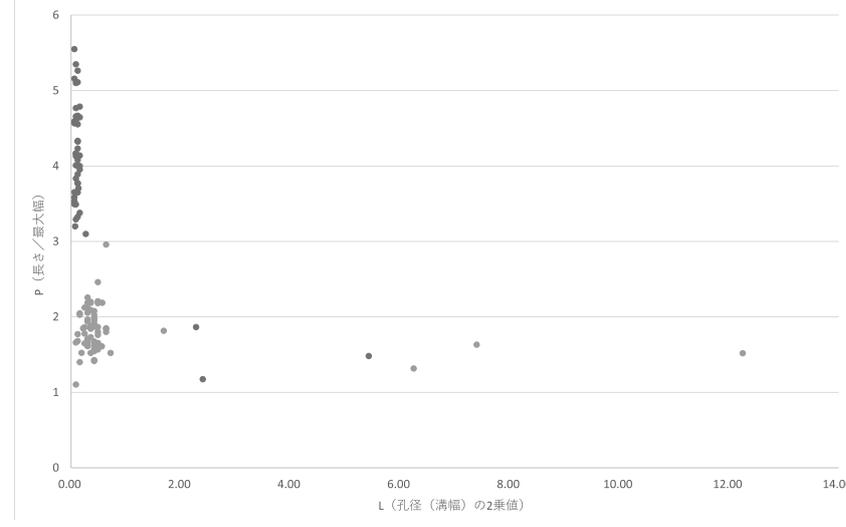
全体を通じてみると、積浦地区全体の面積に対し、これまでの調査で地下の情報が得られたのは



長幅比による形態差



網の径と2乗値と重量の相関



土錘の長幅比 (P) と
孔径 (溝幅) (L) の相関

第 42 図 土錘の諸要素

1%に満たないが、主に中世の積浦地区の様相の一端を知ることが出来た。引き続き調査事例や資料の増加が望まれる。また、今回の調査では着手できなかったが、他の地区での調査事例の増加も望まれる。

文献一覧

喜兵衛島調査団	1956	「謎の師楽式—瀬戸内海喜兵衛島の考古学的調査—」『歴史評論』1月号
鎌木義昌	1957	「香川県井島遺跡 —瀬戸内における細石刃文化—」『石器時代』4
近藤義郎	1958	「師楽式遺跡における古代鹽生産の立證」『歴史学研究』第223号
香川県編	1972	「直嶋旧跡順覧図会」『香川叢書』第三
香川県教育委員会	1974	香川県埋蔵文化財調査報告『葛島』
瀬戸内海歴史民俗資料館	1978	『歴史収蔵資料目録三 三宅家文書目録』
瀬戸内海歴史民俗資料館	1979	『瀬戸内の海上信仰調査報告（東部地域）』
松本敏三	1979	「第二章第二節 備讃瀬戸の祭祀遺跡」『瀬戸内の海上信仰調査報告（東部地域）』瀬戸内海歴史民俗資料館編
間壁忠彦	1981	「香川県直島町井島大浦の押型文遺跡」『倉敷考古館研究集報』第16号
香川県	1987	『香川県史』第13巻 資料編 考古
香川県教育委員会	1988	「高原城跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度～昭和62年度
平凡社	1989	日本歴史地名大系第38巻『香川県の地名』
直島町役場	1990	『直島町誌』
大久保徹也	1992	「古墳時代以降の土器製塩」『吉備の考古学的研究』（下）近藤義郎編
真鍋篤行	1993	「付論 瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書（Ⅱ）』瀬戸内海歴史民俗資料館編
藤澤良祐	1994	「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第3号』
『喜兵衛島』刊行会	1999	『喜兵衛島 一師楽式土器製塩遺跡群の研究一』
佐藤竜馬	2000	「第5章第1節 高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか
香川県教育委員会	2003	「積浦遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成14年度
香川県教育委員会	2003	「県道関係埋蔵文化財発掘調査報告 村黒遺跡・積浦遺跡」平成14年度
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター	2003	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊『高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター	2003	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊『高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』
岡嶋隆司・竹内信三・西田和浩	2003	「香川県直島町荒神島遺跡採集の旧石器」『古代吉備』24
香川県教育委員会	2004	「史跡 喜兵衛島製塩遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成15年度
乗松真也	2004	「第3章第5節 土錘」「3節 中世の土錘と漁業について」サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊『浜ノ町遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財センター	2004	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊『浜ノ町遺跡』
近藤義郎	2005	シリーズ「遺跡を学ぶ」18『土器製塩の島 喜兵衛島製塩遺跡と古墳』
水野敏典	2013	「⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学4 副葬品の形式と編年』同成社
三枝健二	2014	「中部備讃瀬戸採集の旧石器資料」『広島県立歴史博物館 研究紀要』第16号
菅 紀浩	2020a	「直島諸島採集の旧石器時代から縄文時代草創期の尖頭器」『半田山地理考古』8
菅 紀浩	2020b	「瀬戸内海東部、直島諸島採集の旧石器～縄文時代草創期の資料—井島・荒神島を中心として」『備讃瀬戸島嶼部の旧石器時代～縄文時代草創期資料—新発見資料の検討を中心に—』第37回中・四国旧石器文化談話会予稿集
菅 紀浩・光石鳴巳	2023	「香川県井島遺跡採集の湧別技法関連資料」『旧石器研究』第19号
佐藤竜馬	2023a	「地域総合調査研究2021 直島 四国村落遺跡研究会の成果」『令和3年度地域総合調査研究事業 成果報告会』資料
佐藤竜馬	2023b	「中世の港湾施設をめぐって—技術の観点から—」『中世学研究会 第4回シンポジウム 中世・港の景観』資料集
信里芳紀	2023	「製塩と古墳 弥生・古墳時代の直島」『直島の歴史を解き明かす 令和4年度地域総合調査研究 事業成果報告会』資料

遺物観察表

積浦遺跡 1次

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
22	1	積浦遺跡 1次	Ag	第2層下層黄褐色土層	土師質土器	小皿	S58 積浦 1次
22	2	積浦遺跡 1次	Ag	第3層茶褐色土層	須恵器	蓋杯	S58 積浦 1次
22	3	積浦遺跡 1次	Ag	第3層茶褐色土層	須恵器	椀	S58 積浦 1次
22	4	積浦遺跡 1次	Ag	第3層茶褐色土層	土師器	椀	S58 積浦 1次
22	5	積浦遺跡 1次	Ag	第3層茶褐色土層	土師器	椀	S58 積浦 1次
22	6	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	小皿	S58 積浦 1次
22	7	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	8	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	9	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	10	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	11	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	12	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	13	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	14	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	15	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	16	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	17	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	18	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	19	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	20	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	京都系土師器	皿	S58 積浦 1次
22	21	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	22	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	23	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	24	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	須恵器	ハソウ	S58 積浦 1次
22	25	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
22	26	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層	山茶碗	椀	S58 積浦 1次
22	27	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師器	椀	S58 積浦 1次
22	28	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層	須恵器	蓋	S58 積浦 1次
22	29	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	30	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	31	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	32	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	33	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	鍋	S58 積浦 1次
22	34	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	常滑焼	甕	S58 積浦 1次
22	35	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	鍋	S58 積浦 1次
22	36	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層	須恵器	甕	S58 積浦 1次
22	37	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層茶褐色土層	銅銭	不明	S58 積浦 1次
22	38	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	銅銭	不明	S58 積浦 1次
22	39	積浦遺跡 1次	Ag	第2層黄褐色土層	銅銭	不明	S58 積浦 1次
22	40	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	41	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	小皿	S58 積浦 1次
22	42	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	43	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	44	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	44	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	44	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層焼炉周辺	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	45	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	45	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層黒褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	46	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	47	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	48	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	皿	S58 積浦 1次
22	49	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
22	50	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	瓦器	椀	S58 積浦 1次
22	51	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
22	52	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
22	53	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
22	54	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
22	55	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	椀	S58 積浦 1次
22	56	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	白磁	皿	S58 積浦 1次
22	57	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	白磁	碗	S58 積浦 1次
22	58	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	甕	S58 積浦 1次
22	59	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
22	60	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	甕	S58 積浦 1次
22	61	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	62	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	63	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	須恵器	鉢	S58 積浦 1次
22	64	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	須恵器	鉢	S58 積浦 1次
22	65	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	足釜	S58 積浦 1次
22	66	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	捏鉢	S58 積浦 1次
22	67	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	甕	S58 積浦 1次
22	68	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	羽釜	S58 積浦 1次
22	69	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師質土器	羽釜	S58 積浦 1次
22	70	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	土師器	甕	S58 積浦 1次
22	71	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	常滑焼	甕	S58 積浦 1次
22	72	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	備前焼	甕	S58 積浦 1次
22	73	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	備前焼	甕	S58 積浦 1次
22	74	積浦遺跡 1次	Ag	第3層下層落込み	備前焼	甕	S58 積浦 1次
23	75	積浦遺跡 1次	Bg	耕作土	東播系須恵器	椀	S58 積浦 1次
23	76	積浦遺跡 1次	Bg	1～2層遷移層黒褐色土層、黄褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦 1次
23	77	積浦遺跡 1次	Bg	1～2層遷移層黒褐色土層、黄褐色土層	青磁	皿	S58 積浦 1次
23	78	積浦遺跡 1次	Bg	1～2層遷移層黒褐色土層、黄褐色土層	須恵器	椀	S58 積浦 1次
23	79	積浦遺跡 1次	Bg	1～2層遷移層黒褐色土層、黄褐色土層	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次

插图No	報文No	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
23	80	積浦遺跡1次	Bg	1～2層遷移層黑褐色土層、黃褐色土層	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	81	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	82	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	83	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	84	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	85	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	86	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	87	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	88	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	89	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	90	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	91	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	壺底部	S58 積浦1次
23	92	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	束播系須惠器	碗	S58 積浦1次
23	93	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	須惠器	碗	S58 積浦1次
23	94	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	95	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	青磁	碗	S58 積浦1次
23	96	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	樽葉型黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	97	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	樽葉型黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	98	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	99	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	100	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	101	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	102	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	103	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	104	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	105	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	碗	S58 積浦1次
23	106	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	碗	S58 積浦1次
23	107	積浦遺跡1次	Bg	第2層下層 P5	土師器	碗	S58 積浦1次
23	108	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	碗	S58 積浦1次
23	109	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	110	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	足釜	S58 積浦1次
23	111	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	甕	S58 積浦1次
23	112	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師質土器	足釜	S58 積浦1次
23	113	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	弥生土器	壺	S58 積浦1次
23	114	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	小型鉢	S58 積浦1次
23	115	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	116	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	117	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	118	積浦遺跡1次	Bg	第2層下層 P5	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	119	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	120	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	121	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	122	積浦遺跡1次	Bg	第2層下	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	123	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX1	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	124	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX1	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	125	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX1	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	126	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX1	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	127	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX1	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	128	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX2	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	129	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX2	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	130	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX2	繩文土器	底部	S58 積浦1次
23	131	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX3	備前焼	摺鉢	S58 積浦1次
23	132	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX3	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	133	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX4	須惠器	皿	S58 積浦1次
23	134	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX4	束播系須惠器	碗	S58 積浦1次
23	135	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX4	須惠器	皿	S58 積浦1次
23	136	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX4	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	137	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX4	土師器	鉢	S58 積浦1次
23	138	積浦遺跡1次	Bg	第2層下 SX5	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	139	積浦遺跡1次	Cg	表土層	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	140	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	京都系土師器	皿	S58 積浦1次
23	141	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師器	碗	S58 積浦1次
23	142	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師器	碗	S58 積浦1次
23	143	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	144	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師質土器	鉢	S58 積浦1次
23	145	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師器	碗	S58 積浦1次
23	146	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	樽葉型瓦器	碗	S58 積浦1次
23	147	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	148	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	149	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	土師器	製塩土器	S58 積浦1次
23	150	積浦遺跡1次	Cg	第1層茶褐色土層	銅錢	不明	S58 積浦1次
23	151	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	土師質土器	皿	S58 積浦1次
23	152	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	土師質土器	杯	S58 積浦1次
23	153	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	須惠器	碗	S58 積浦1次
23	154	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	須惠器?	鉢	S58 積浦1次
23	155	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	束播系須惠器	碗	S58 積浦1次
23	156	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	束播系須惠器	碗	S58 積浦1次
23	157	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	碗	S58 積浦1次
23	158	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	碗	S58 積浦1次
23	159	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	甕	S58 積浦1次
23	160	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	瓦器	碗	S58 積浦1次
23	161	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	須惠器	壺	S58 積浦1次
23	162	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	黑色土器	碗	S58 積浦1次
23	163	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	高杯	S58 積浦1次
23	164	積浦遺跡1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	甕	S58 積浦1次
23	165	積浦遺跡1次	Cg	第2層黑褐色	土師器	壺底部	S58 積浦1次

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
23	166	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	高杯	S58 積浦 1次
23	167	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	168	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	169	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	170	積浦遺跡 1次	Cg	第2層黒褐色	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	171	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	172	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	173	積浦遺跡 1次	Cg	第2層黒褐色	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	174	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
23	175	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	東播系須恵器	椀	S58 積浦 1次
23	176	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	須恵器	椀	S58 積浦 1次
23	177	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
23	178	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
23	179	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
23	180	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	黒色土器	椀	S58 積浦 1次
23	181	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	瓦器	椀	S58 積浦 1次
23	182	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	青磁	皿	S58 積浦 1次
23	183	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	須恵器	甕	S58 積浦 1次
24	184	積浦遺跡 1次	Cg	第2層砂質直上	土師器	広口壺	S58 積浦 1次
24	184	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下	土師器	広口壺	S58 積浦 1次
24	184	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	広口壺	S58 積浦 1次
24	185	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P2	土師器	鉢	S58 積浦 1次
24	186	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	甕	S58 積浦 1次
24	186	積浦遺跡 1次	Cg	第2層黒褐色	土師器	甕	S58 積浦 1次
24	187	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下	土師器	甕	S58 積浦 1次
24	188	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
24	189	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
24	190	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
24	191	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
24	192	積浦遺跡 1次	Cg	第2層下 P1 付近	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次
24	193	積浦遺跡 1次	0	オバタケ (小畑家) 付近表採	青磁	皿	S58 積浦 1次
24	194	積浦遺跡 1次	0	オバタケ (小畑家) 付近表採	土師器	製塩土器	S58 積浦 1次

積浦遺跡 3次

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
37	1	積浦遺跡 3次	1Tr	SD01	陶器	椀	R4 積浦 3次
37	2	積浦遺跡 3次	1Tr	SX01 西	磁器	小坏	R4 積浦 3次
37	3	積浦遺跡 3次	1Tr	SX02埋土	瓦器	椀	R4 積浦 3次
37	4	積浦遺跡 3次	1Tr	SX02埋土	須恵器	甕	R4 積浦 3次
37	5	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷直上	黒色土器	椀	R4 積浦 3次
37	6	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷直上	黒色土器	椀	R4 積浦 3次
37	7	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷直上	土師質土器	椀 (吉備系)	R4 積浦 3次
37	8	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷直上	黒色土器	椀	R4 積浦 3次
37	9	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷直上	須恵器	椀	R4 積浦 3次
37	10	積浦遺跡 3次	1Tr	西壁裾 礫敷ベース砂	土師質土器	鍋	R4 積浦 3次
37	11	積浦遺跡 3次	1Tr	礫敷遺構 2～3 面目間	土師質土器	杯	R4 積浦 3次
37	12	積浦遺跡 3次	1Tr	礫敷遺構 (3 面目) ベース	土師器	甕	R4 積浦 3次
37	13	積浦遺跡 3次	1Tr	礫敷遺構 P-3	須恵器	甕	R4 積浦 3次
37	14	積浦遺跡 3次	2Tr	SK01 1層	陶器	瓶	R4 積浦 3次
37	15	積浦遺跡 3次	2Tr	P2 (茶褐色細砂層)	須恵器	甕	R4 積浦 3次
37	16	積浦遺跡 3次	2Tr	深堀り トレンチ内清掃	土師質土器	杯	R4 積浦 3次
37	17	積浦遺跡 3次	2Tr	21 層	土師質土器	鍋	R4 積浦 3次
37	18	積浦遺跡 3次	2Tr	P1 (灰黄色細～中砂層)	土師質土器	足釜	R4 積浦 3次
37	19	積浦遺跡 3次	2Tr	礫敷検出	土師質土器	不明	R4 積浦 3次
37	20	積浦遺跡 3次	2Tr	礫敷検出	土師質土器	不明	R4 積浦 3次

喜兵衛島

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
2	1	喜兵衛島	喜兵衛島 西岸中央付近 (未周知)		弥生土器	甕	R3 分布調査
2	2	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	杯身	R3 分布調査
2	3	喜兵衛島	喜兵衛島 西岸中央付近 (未周知)		土師器	足釜	R3 分布調査
2	4	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		土師器	甕	R3 分布調査
2	5	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	杯蓋	R3 分布調査
2	6	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	高杯	R3 分布調査
2	7	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	ハンソウ	R3 分布調査
2	8	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	提瓶	R3 分布調査
2	9	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	高台付杯	R3 分布調査
2	10	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	皿	R3 分布調査
2	11	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 西半		須恵器	杯	R3 分布調査
2	12	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		瓦器	椀	R3 分布調査
2	13	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		黒色土器	椀	R3 分布調査
2	14	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		黒色土器	椀	R3 分布調査
2	15	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		土師器	蜻壺	R3 分布調査
2	16	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		瓦器	皿	R3 分布調査
2	17	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		土師器・土器	小皿	R3 分布調査
2	18	喜兵衛島	キヘエ北西浜遺跡 東半		須恵器	高坏	R3 分布調査
2	19	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	20	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	21	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	22	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	23	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	24	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	25	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	26	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	27	喜兵衛島	喜兵衛島東南浜表採 S54.07.11		土師器	製塩土器	R3 歴史
2	28	喜兵衛島	南東浜東尾根斜面		土師器	甕	S57 分布調査
2	29	喜兵衛島	南東浜背後尾根上		土師器	製塩土器	S57 分布調査

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
2	30	喜兵衛島	南東浜背後尾根上		土師器	製塩土器	S57 分布調査
2	31	喜兵衛島	南東浜背後尾根上		土師器	製塩土器	S57 分布調査
2	32	喜兵衛島	浜の東部分～東端にかけて		土師器	壺	S57 分布調査
2	33	喜兵衛島	浜の東部分～東端にかけて		土師器	製塩土器	S57 分布調査
3	34	喜兵衛島			須恵器	提瓶	R4 直島役場保管遺物

京ノ上臈島 屏風島 向島ほか

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
4	1	京ノ上臈島	京ノ上臈島 東浜(北)(未周知)		須恵器	甕	R3 分布調査
4	2	京ノ上臈島	京ノ上臈島 東浜(北)(未周知)		磁器	椀	R3 分布調査
4	3	京ノ上臈島	京ノ上臈島 東浜(北)(未周知)		土師器	椀	R3 分布調査
4	4	京ノ上臈島	京ノ上臈島 東浜(中央)(未周知)		磁器	椀	R3 分布調査
4	5	京ノ上臈島	京ノ上臈島 東岸 東浜北部(満潮時汀線下位)		石器(サヌカイト)	石核	R3 分布調査
4	6	屏風島	屏風島南東浜遺跡 東半		須恵器	蓋	R3 分布調査
4	7	屏風島	東北端		須恵器	甕	S57 分布調査
4	8	屏風島	東石楯群北から三番目		土師器	製塩土器	S57 分布調査
4	9	向島	アババ浜		縄文土器	底部	S57 分布調査
4	10	向島	アババ浜		施釉陶器	壺	S57 分布調査
4	11	向島	アババ浜		須恵器	甕	S57 分布調査
4	12	向島	船着場の南の浜		土師質土器	杯	S57 分布調査
4	13	向島	西岸 浜		土師器	甕	R4 分布調査
4	14	倉浦	倉浦の浜西地点		土師器	甕	S57 分布調査
4	15	倉浦	倉浦の浜西地点		土師器	製塩土器	S57 分布調査
4	16	倉浦	倉浦の浜西地点		土師器	製塩土器	S57 分布調査
4	17	倉浦浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物
4	18	倉浦浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物
4	19	倉浦浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物
4	20	琴弾地	琴弾地		弥生土器	製塩土器	S57 分布調査
4	21	琴弾地	琴弾地		弥生土器	製塩土器	S57 分布調査
4	22	琴弾地	琴弾地		弥生土器	製塩土器	S57 分布調査
4	23	重石1号墳	0		須恵器	蓋杯	R3 歴民
4	24	重石1号墳	0		須恵器	蓋杯	R3 歴民
4	25	重石1号墳	0		須恵器	蓋	R3 歴民
4	26	重石1号墳	0		須恵器	短頸壺	R3 歴民
4	27	重石1号墳	0		須恵器	蓋	R3 歴民
4	28	重石1号墳	0		須恵器	無頸壺	R3 歴民
4	29	横防			須恵器	蓋杯	R3 歴民

家島

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
5	1	家島港	北浜		須恵器	蓋杯	S57 分布調査
5	2	家島港	北浜		須恵器	蓋杯	S57 分布調査
5	3	家島港	北浜		須恵器	甕	S57 分布調査
5	4	家島港	北浜		須恵器	壺	S57 分布調査
5	5	家島港	北浜		土師器	椀	S57 分布調査
5	6	家島港	北浜		土師器	鍋	S57 分布調査
5	7	家島港	北浜		須恵器	高杯	S57 分布調査
5	8	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	9	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	10	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	11	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	12	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	13	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	14	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	15	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	16	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	17	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	18	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	19	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	20	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	21	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	22	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	23	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	24	家島港	北浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	25	家島港	東浜		弥生土器	高杯	S57 分布調査
5	26	家島港	東浜		須恵器	蓋杯	S57 分布調査
5	27	家島港	東浜		須恵器	蓋杯	S57 分布調査
5	28	家島港	東浜		土師器	杯	S57 分布調査
5	29	家島港	東浜		須恵器	甕	S57 分布調査
5	30	家島港	東浜		土師器	甕	S57 分布調査
5	31	家島港	東浜		縄文土器	深鉢	S57 分布調査
5	32	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	33	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	34	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	35	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	36	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	37	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	38	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	39	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	40	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	41	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	42	家島港	東浜		土師器	製塩土器	S57 分布調査
5	43	家島鶴松ノ鼻	1972 家島鶴松ノ鼻出土の白紙		須恵器	杯蓋	R3 直島資料館
5	44	家島鶴松ノ鼻	1972 家島鶴松ノ鼻出土の白紙		須恵器	甕	R3 直島資料館
5	45	家島	家島港東遺跡		須恵器	蓋	R4 分布調査
5	46	家島	家島北西浜遺跡		土師質土器	杯	R4 分布調査
5	47	家島	家島港東遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
5	48	家島	家島港東遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	49	家島	家島港東遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	50	家島	家島北西浜遺跡		土製品	移動式竈	R4 分布調査
5	51	家島	家島と箱島の間の浜		縄文土器	底部	R4 分布調査
5	52	家島	はしもと畑遺跡		弥生土器	広口壺	R4 分布調査
5	53	家島	はしもと畑遺跡		須恵器	蓋杯	R4 分布調査
5	54	家島	はしもと畑遺跡		須恵器	蓋杯	R4 分布調査
5	55	家島	はしもと畑遺跡		須恵器	杯	R4 分布調査
5	56	家島	はしもと畑遺跡		土師器	鉢	R4 分布調査
5	57	家島	はしもと畑遺跡		土師器	椀	R4 分布調査
5	58	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	59	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	60	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	61	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	62	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	63	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	64	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査
5	65	家島	はしもと畑遺跡		土師器	製塩土器	R4 分布調査

葛島

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度	備考
6	1	葛島	0		須恵器	蓋杯	R3 歴民	913-2
6	2	葛島	0		須恵器	蓋杯	R3 歴民	913-2
6	3	葛島古墳群	B 区 10 号墳付近表探		須恵器	有蓋高杯	R4 直島役場保管遺物	
6	4	葛島古墳群	B 区 10 号墳付近表探		須恵器	有蓋高杯	R4 直島役場保管遺物	
6	5	葛島古墳群	B 区 10 号墳付近表探		須恵器	有蓋高杯	R4 直島役場保管遺物	
6	6	葛島古墳群	B 区 10 号墳付近表探		須恵器	有蓋高杯	R4 直島役場保管遺物	
7	36	葛島東大浜			土師器	二重口緑壺	R4 直島役場保管遺物	東阿波型土器
7	37	葛島東大浜			弥生土器	甕	R4 直島役場保管遺物	讃岐東部産
7	38	葛島東大浜			弥生土器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	
7	39	葛島東大浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	
7	40	葛島東大浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	
7	41	葛島東大浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	
7	42	葛島東大浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	
7	43	葛島東大浜			土師器	製塩土器	R4 直島役場保管遺物	

葛島(鉄器)

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	保管場所など	備考
6	7	葛島古墳群 B 地区 5 号墳			鉄器	刀子	R3 直島資料館	報告書第 49 図 -4
6	8	葛島古墳群 A 地区 13 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 22 図 -4
6	9	葛島古墳群 A 地区 14 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 22 図 -1
6	10	葛島古墳群 A 地区 14 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 22 図 -3
6	11	葛島古墳群 B 地区 8 号墳			鉄器	刀子	R3 直島資料館	未報告
6	12	葛島古墳群 B 地区 8 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 49 図 -3
6	13	葛島古墳群 B 地区 15 号墳			鉄器	刀子	R3 直島資料館	未報告
6	14	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-11
6	15	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-12
6	16	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-8
6	17	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	
6	18	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	未報告
6	19	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-10
6	20	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-1・3
6	21	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-2
6	22	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-5
6	23	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	不明
6	24	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-4
6	25	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-3・14
6	26	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-16
6	27	葛島古墳群 B 地区 23 号墳			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	報告書第 50-6・7
6	28	葛島古墳群 B 地区 25 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 49 図 -2
6	29	葛島古墳群 B 地区 25 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	報告書第 49 図 -1
6	30	葛島古墳群 B 地区 25 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	未報告
6	31	葛島古墳群 B 地区 25 号墳			鉄器	鉄鏃	R3 直島資料館	未報告
6	32	葛島古墳群 B 地区 25 号墳			鉄器	刀子	R3 直島資料館	未報告
7	33	葛島古墳群 C 地区 3 号墳			鉄器	刀子	R3 直島資料館	報告書第 49 図 -6
7	34	葛島古墳群表探			鉄器	鉄鏃	R 4 直島役場保管	
7	35	葛島古墳群			鉄器	曲刀鏃	R3 直島資料館	未報告

荒神島 1・2

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
9	1	荒神島			須恵器	蓋杯	R3 歴民
9	2	荒神島			須恵器	蓋杯	R3 歴民
9	3	荒神島			須恵器	蓋杯	R3 歴民
9	4	荒神島			弥生土器	高坏	R3 歴民
9	5	荒神島			須恵器	杯	R3 歴民
9	6	荒神島			須恵器	横瓶	R3 歴民
9	7	荒神島			須恵器	甕	R3 歴民
9	8	荒神島			須恵器	蓋杯	R3 歴民
9	9	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	10	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	11	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	12	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	13	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	14	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	15	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	16	荒神島			土師器	甕	R3 歴民
9	17	荒神島			土師器	製塩土器	R3 歴民

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
9	18	荒神島	0		土師器	製塩土器	R3 歴史
9	19	荒神島	注記 荒神 E4N-15 711210		土師器	製塩土器	R3 歴史
9	20	荒神島	0		土師器	製塩土器	R3 歴史
10	21	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 24		須恵器	ハソウ	R3 分布調査
10	22	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 24		須恵器	ミニチュア甕	R3 分布調査
10	23	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 24		須恵器	高坏	R3 分布調査
10	24	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 23		土師器	甕	R3 分布調査
10	25	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 26		土師器	手づくね土器	R3 分布調査
10	26	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 30		土師器	手づくね土器	R3 分布調査
10	27	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 17		須恵器	甕	R3 分布調査
10	28	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 11		須恵器	甕	R3 分布調査
10	29	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 21		須恵器	甕	R3 分布調査
10	30	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 9		須恵器	甕	R3 分布調査
10	31	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 7		須恵器	甕	R3 分布調査
10	32	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 14		須恵器	甕	R3 分布調査
10	33	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 13		須恵器	甕	R3 分布調査
10	34	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 5		須恵器	甕	R3 分布調査
10	35	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 6		須恵器	甕	R3 分布調査
10	36	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 8		須恵器	甕	R3 分布調査
10	37	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 1		須恵器	甕	R3 分布調査
10	38	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 22		須恵器	甕	R3 分布調査
10	39	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 27		須恵器	甕	R3 分布調査
10	40	荒神島	荒神島 祭祀遺跡 No. 28		石器 (片岩)	打製石包丁?	R3 分布調査
10	41	荒神島	荒神島 西丘陵 (石器 6)		石器 (サヌカイト)	石核	R3 分布調査
10	42	荒神島	荒神島 丘陵部 (西側 鉄塔裾部)		石器 (サヌカイト)	横長剥片	R3 分布調査

荒神島 3・4

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度	備考
11	1	荒神島遺跡 (ア地区)			須恵器	杯蓋	R3 直島資料館	
11	2	荒神島遺跡 (ア地区)			須恵器	杯身	R3 直島資料館	
11	3	荒神島遺跡 (ア地区)			須恵器	杯蓋	R3 直島資料館	
11	4	荒神島遺跡 (ア地区)			須恵器	杯身	R3 直島資料館	
11	5	荒神島砂浜 1975. 11. 19			須恵器	蓋杯	R4 直島役場保管遺物	
11	6	荒神島			須恵器	無頸壺	R4 直島役場保管遺物	
11	7	荒神島			須恵器	壺	R4 直島役場保管遺物	
11	8	荒神島遺跡?			土師器	直口壺	R3 直島資料館	
11	9	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	小型丸底壺	R3 直島資料館	
11	10	荒神島祭祀遺跡 注記 47			土師器	壺	R4 直島役場保管遺物	須恵器ハソウ模倣
11	11	荒神島祭祀遺跡 注記 47			土師器	直口壺	R4 直島役場保管遺物	
11	12	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	小型丸底壺	R3 直島資料館	
11	13	荒神島遺跡?			土師器	甕	R3 直島資料館	
11	14	荒神島祭祀遺跡			土師器	無頸壺	R4 直島役場保管遺物	
11	15	荒神島祭祀遺跡 注記 47 町 205			土師器	直口壺	R4 直島役場保管遺物	
11	16	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	直口壺	R3 直島資料館	
11	17	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	甕	R3 直島資料館	
11	18	荒神島祭祀遺跡			土師器	甕	R4 直島役場保管遺物	
11	19	荒神島祭祀遺跡			土師器	甕	R4 直島役場保管遺物	肩部打欠穿孔
11	20							
12	21	荒神島遺跡?			土師器	甕	R3 直島資料館	
12	22	荒神島遺跡?			土師器	甕	R3 直島資料館	
12	23	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	高坏	R3 直島資料館	
12	24	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	高坏	R3 直島資料館	
12	25	荒神島 E4N-7 71121019			土師器	高杯	R4 直島役場保管遺物	
12	26							データなし
12	27	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	製塩土器	R3 直島資料館	
12	28	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	29	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	30	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	31	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	32	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	33	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	34	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	35	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	
12	36	荒神島遺跡 (ア地区)			土師器	手づくね土器	R3 直島資料館	

荒神島 (玉類)

挿図No.	報文No.	遺跡名	種別	器種	備考	保管場所
12	37	荒神島	玉	凝灰岩		R4 直島役場保管
12	38	荒神島	模造品	勾玉形	滑石	R4 直島役場保管
12	39	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管
12	40	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管
12	41	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管
12	42	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管
12	43	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管
12	44	荒神島	模造品	有孔円盤	滑石	R4 直島役場保管

風戸山西 1・2

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
14	1	風戸山西?	A-1	表採	須恵器	蓋	S57 分布調査
14	2	風戸山西?	A-1	表採	須恵器	盤	S57 分布調査
14	3	風戸山西	風戸山西北端浜 A		須恵器	甕	S57 分布調査
14	4	風戸山西?	中央 B		弥生土器	広口壺	S57 分布調査
14	5	風戸山西?	B-1		土師器	広口壺	S57 分布調査
14	6	風戸山西?	中央 B		土師器	二重口縁壺	S57 分布調査
14	7	風戸山西?	B-1		弥生土器	壺底部	S57 分布調査
14	8	風戸山西?	B-1		土師器	甕	S57 分布調査
14	9	風戸山西?	中央 B		土師器	甕	S57 分布調査

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	遺構名/地点名	層位	種別	器種	年度
14	96	風戸山西	風戸C		土師器	製塩土器	S57 分布調査
14	97	風戸山西	風戸C		土師器	製塩土器	S57 分布調査
14	98	風戸山西	風戸C		土師器	製塩土器	S57 分布調査
14	99	風戸山西	風戸C		土師器	製塩土器	S57 分布調査
15	100	直島	風戸山西 北浜 包含層上層		0		R4 分布調査
15	101	直島	風戸山西 北浜 包含層上層		0		R4 分布調査
15	102	直島	風戸山西 北浜 谷奥表採		0		R4 分布調査
15	103	直島	風戸山西 北浜 谷奥表採		0		R4 分布調査
15	104	直島	風戸山西 北浜 谷奥表採		0		R4 分布調査
15	105	直島	風戸山西 北浜 浜 表採		須恵器	杯	R5 分布調査
15	106	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	107	直島	風戸山西 中央浜 包含層下層		0		R4 分布調査
15	108	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	109	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	110	直島	風戸山西 中央浜 包含層上層		0		R4 分布調査
15	111	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	112	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	113	直島	風戸山西 中央浜 包含層上層		0		R4 分布調査
15	114	直島	風戸山西 中央浜 包含層下層		0		R4 分布調査
15	115	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	116	直島	風戸山西 中央浜 谷奥包含層		0		R4 分布調査
15	117	直島	風戸山西 中央浜 包含層下層		0		R4 分布調査
15	118	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査
15	119	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査
15	120	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査
15	121	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査
15	122	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査
15	123	直島	風戸山西 南浜 谷前面表採		0		R4 分布調査
15	124	直島	風戸山西 南浜 北側谷奥表採		0		R4 分布調査

石器

挿図No.	報文No.	遺跡名/場所名	層位	器種	保管場所など	備考
16	1	井島		ナイフ形石器		
16	2	井島		ナイフ形石器		
16	3	井島		ナイフ形石器		
16	4	井島 鞍掛鼻遺跡 地点2		ナイフ形石器		
16	5	井島 鞍掛鼻遺跡 地点2		ナイフ形石器		
16	6	井島 鞍掛鼻遺跡 地点3		尖頭器		
16	7	井島 鞍掛鼻遺跡 地点3		石鏃		
16	8	井島 鞍掛鼻遺跡 地点6		石鏃		
16	9	井島 鞍掛鼻遺跡 地点5より西斜面		石鏃		
16	10	井島 鞍掛鼻遺跡 地点5		石鏃		
16	11	井島		横長剥片		
16	12	井島		横長剥片		
16	13	井島		横長剥片		
16	14	井島 鞍掛鼻遺跡 地点7		横長剥片 (被熱)		
16	15	井島 鞍掛鼻遺跡 地点7		横長剥片		
16	16	井島 鞍掛鼻遺跡 地点4		横長剥片		
17	17	井島 鞍掛鼻遺跡 地点5		石核		
17	18	井島 鞍掛鼻遺跡 地点2		細石刃核		
17	19	井島 鞍掛鼻遺跡		細石刃核		
17	20	石島山地点 5RF		二次加工有剥片		
17	21	井島 西浜南半		石鏃		
17	22	なかノ鼻古墳群北側浜		尖頭器		
17	23	井島 西浜南半		スクレイパー		
17	24	なかノ鼻古墳群北側浜		スクレイパー		
18	1	葛島		ナイフ形石器		
18	2	葛島		石鏃		
18	3	葛島		石鏃		
18	4	葛島		弱片		
18	5	葛島		石匙		
18	6	葛島		二次加工有剥片		
18	7	葛島		尖頭器		
19	8	葛島		石核		
19	9	葛島		石核		
19	10	局島		石鏃		
19	11	局島		石鏃		
19	12	局島		石鏃		
19	13	喜兵衛島		石鏃		
19	14	家島		剥片		
19	15	家島		尖頭器		
19	16	家島		横長剥片石核		
19	17	直島	へキ	尖頭器		
19	18	直島	串山	横長剥片石核		
19	19	直島	琴反地遺跡	打製石斧		

報告書抄録

ふりがな	いせきしょうさいぶんぶちょうさほうこく							
書名	遺跡詳細分布調査報告							
副書名	～直島群島における地域総合調査～							
編著者名	小野秀幸							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	令和 6 (2024) 年 3 月 7 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つむらいせき 積浦遺跡	香川県香川郡直島町 518-1		37364	34° 45' 22"	133° 99' 92"	2022.6.13 ~ 24	12.7㎡	文化庁埋蔵文化財 国庫補助事業埋蔵 文化財緊急調査
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	中世	礫敷き遺構 (港湾施設)		土器		中世前半の礫敷き遺構	
要約	令和 3 ~ 5 年度に「地域総合調査研究事業」として実施した直島町域の遺跡詳細分布調査において、発掘調査や踏査、保管資料の整理によって得られた、旧石器時代から近世にかけての遺跡分布や内容についての成果をまとめた。中でも発掘調査を実施した積浦遺跡については、中世前半 (12 ~ 13 世紀) の礫敷き遺構は、砂碓の先端上面に敷設され、平成 14 年に隣接地で行われた 2 次調査で確認された礫敷き遺構と同一のものと考えられる。港湾施設として荷上場の足場補強として施工されたものと想定される。							

遺跡詳細調査分布調査報告書

2024（令和6）年3月7日 発行

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024
香川県坂出市府中町南谷5001番地4
電話（0877）48－2191
FAX（0877）48－3249

印刷 ワールド印刷株式会社